

神道

は言を俟たず中に就き最も勢力ありし學派を朱學とし、説くところ頗る禪學と相似たり。その始めて傳はれるは何時の頃なりけむ、或は順德帝の朝俊苜これ傳ふといひ、或は金澤文庫にその創立者實時の子越後守顯時が奥書せる小學あれば、恐らくは既に鎌倉時代に傳はれるならむといひ、また一説には建武の頃玄慧の輸入するところともいひ、その他異説なほ多く、多少年歴の出入なきにあらずといへども、要するに禪宗と相前後して傳へられ、建武中興の頃や、著はれ、室町時代の末期に至りて大に行はれしものなるは疑を容れず、かく弘傳すると共に文學も漸くその思想を受くること多く、人心の陶冶に資するところはた甚大なるものありしなり。しかれども、この一事あるが爲に、わが國近世道德の淵源を以て直ちに支那にありとなさむは、一を知りて二を知らざるものの説のみ。由來われは東海君子の國、倫道の基礎國體と共に定まる、實たる名を假れるを以て直ちに實の存在を疑はむとす、誣ふるものといはざるべけむや。

敬神祭祀てふ行事の發達して神道となれるも蓋しこの時代にあり、而してこ

新佛教の傳播

も儒教と同じく佛教の勢力に隨伴して起れる新現象にして、教義の大部分を佛教にとり、なほ混和するに儒教及び陰陽道の二説を以てせるもの、道とはいへど、特種の深遠なる主張あるにあらざるなり。

佛教の傳來や悠遠なり、奈良の盛時はいふもことふりたり、平安朝においてはその内面的感化は外面の流行ほどにもなく、また漸く腐敗を重ねしが、その末葉よりこの時代の初期にかけて、禪宗支那より傳はり、種々の念佛宗、日蓮宗の新たにわが國に起れるありて、折ふし戦亂多き社會人心の根柢に觸れ、明日をも知らぬ人々の要求に應じて、平安朝の萎靡に對する反動の氣勢は漸く揚れり。されどこは新興佛教のみにして、舊佛教に至りては則ち興えず、天台、真言の如きも徒らに袖手傍觀してまたこれらと中原に角逐する能はず。この時代のこれら新佛教が平安佛教の現世的、形式的なる宗教的要求を對象となせりしは注意すべき現象に起れる武家の勢力と追逐す。故に禪宗まづ鎌倉關東に信者多く、念佛宗最も後れて一般民衆の

文學の服従

に特に禪はその教理以外に、支那の文化をも伴
 風潮に投じて、急ちこれを傳播し、風俗文藝に影響
 り、見よ、茶道の起りたるといひ、東山水墨畫の一代に
 これ禪宗の傳へられて後に然りしにて、衣食住萬端のこ
 止むといへども、感化の甚大なりしは概ねかくの如し。
 かくては文學もこの風潮に棹さざるを得ず。また強ち禪宗のみに限らずとい
 へども、當時、上下干戈を弄するに急にして、一般人士が學問の道に疎く、文筆を
 執るに暇なかりしや、操觚の業は自然にひとり閑寂なる僧侶の手に委ねらる。
 當代の文藝が宗教臭味を帯ぶること甚しきは一にこれが爲にして、偶、佛教者
 ならぬ人の述作にかゝるものありとするも、社會人心の傾向にして既に前述
 の如くなれば、勢また厭世無常の主張なきを得ざりしなり。佛教趣味の普及や
 善し、中世文學の特色の存するところ、正にこれあるが致すところなるべしと
 いへども、一步を過れば大澤に墮つ、佛教の趣味を加味して止むべかりしこの
 時代の文學は、果然その境界を越えて佛教の教理を宣傳するの説明手段とな

男尊女卑の風

り、よりて以て甚深の意を加ふべき佛教の爲に、却つてその獨立を失ひ、一種傀儡
 儡の觀ありて、倒さまに淺薄の誹を免るゝ能はざるに至りしは、實に惜みても
 餘あり。當時の人心よりいへば、和歌を學ぶもまたこれ佛道の奥旨に達せむが
 爲の方便にして、わが國小説の隨一たるかの源氏物語だに、この佛教食傷者の
 眼には、天台止觀の意を承述敷衍せる世にもありがたき法の手引と見えたり
 とよ。
 上述の尙武の氣象盛になりて、やうやく武士道を構成し、儒佛の影響感化はた
 人心の奥底に徹するに至りて、社會が女性に對する觀念は平安朝と全く異な
 るものあるに至れり。かの三從七去の説は早く儒教の來ると共に唱へられし
 ところにして、たゞ王朝における女性の勢力甚しきや、實際の習となるに至ら
 ざりしなるが、こゝに及びて犯すべからざる女性壓迫の憲法となれるは是非
 もなし。この儒教のまた養ひ難きもの女子と小人とに盡きたりとなし、佛教の
 生れながらにして罪業深重に、三世の諸佛に棄てられたるものこれ女人なり
 となせる外、直接に女子の身にとりて悲しきは戰場に馳驅してものの役に立

中世の概観

たざる一事なり。これらは相依り相援けて女性卑下の思想を養ひ、平安朝にありては一面には女尊男卑の傾ありしに、こゝに至りてその風全く堙滅し、男子は上にありて昂然自ら居り、女子は唯々として一にこれ命これ従ふ。この濟度すべからざる虚飾無能の化身たる女性に戀愛を送るを以て、男子が拭ふべからざる耻辱となし、極力これと關係交渉せざらむとするに至りしは、やがてこの傾向に附隨すべき思潮にして、これを反映せる文學にも、これまでさしもに重きをなせる男女の愛情も漸く見られずなり、君臣の情、父子の愛などいへる道德代りて旨と描かるゝに至れり。

要するに中世は、一面においては、因襲摸倣、平安朝の様によつて胡盧を描ける風を存すると共に、一面には習慣的勢力を打破して革命的改新を成就せる時代といふべく、文學にありても従來の平和艶柔なる戀愛を一掃して、殺伐剛毅の氣象を鼓吹するに至り、或は克己といひ、或は制慾といひて、儒教の意義を明かにすると同時に、無常厭世の佛教的教理を含め、破壊に代ふる建設は以て足れりとすべからざれども、とにかくに清新の風を容れたるは多とすべし、され

時代の區劃

どこれに伴うて形式の上に漸次階を追ひて進める典雅絢麗の雅文が崩壊せられ、しかも當代人士の滔々として文章に長ぜざるや、新たに精しき修辭法を以てこれに代ふるにも至らず、到るところ文法の破格に充てるはまた一奇觀なり、たゞ漢語、佛語の用ひらるゝこと漸く多くなりて、形容、句法の豊富を致すと共に剛健雄大の度を加へたるはこの時代の外形に特記すべき長所にして、王朝の雅文の近世の和漢混淆文に轉ずるに至りし徑路は、歴然としてわが中世亂雜の文體中に見ゆ。

圓數によりて中世を左の四時代に分つ。

- 一、新古今時代 (一八五〇—一八九〇) 四十年間
 - 二、鎌倉時代 (一一八九〇—一九九〇) 百年間
 - 三、南北朝時代 (一九九〇—二〇六〇) 七十年間
 - 四、室町時代 (二〇六〇—二二六〇) 二百年間
- (戰國及び織田豊臣時代をも含む)

第二章 新古今時代

所謂新古今時代

鎌倉幕府開けて後四十年の間を新古今時代と名づく、新古今和歌集の成りし元久元年は正にその中葉にして、新勅撰和歌集撰述の擧ありし貞永元年はその末葉なり。

和歌の盛運

小説は振はず、漢詩文も衰へたり、秋風落莫の感なきはなき鎌倉時代の文壇ながら、この一期にありてひとり丹楓の霜に誇れる慨あるを和歌の現象とす。そのかゝる凋落時代の偉觀としてめざましきはいふまでもなく、美なること花の如き古今時代に比しても遜色なからむとす。新古今時代は竟に新古今の時代なり、古今時代と共にわが和歌の二大盛時として記憶すべし。

時代區劃の難

翻つて思ふに、院政時代の特色はこの時代に入るも未だ何等の變革を被らず、一般文藝の傾向はた舊様依然として前時代を襲ふ、かくてもこれを前代と相分ちて新時代と稱すべきか、疑問なき能はず、そもく政治史上の時代區劃を

幕威確立の期

以て直ちに文藝史上に應用せむとするは、餘に輕率なる手段にして、精密にいへば、その政治史上の區劃だに實は甚だ曖昧に、普通に所謂武家政治の初は果していづれに置くべきか、極めて漠然たるなり。或は頼朝が鎌倉に座を占めたる時か、或は平家が安徳天皇を奉じて西海に沈める時か、はたまた頼朝が總追捕使もしくは征夷大將軍に任ぜられたる時か、これ既に一個の疑問なるに、更に一步を派らば、武家執政の備を作せるもの早く清盛あるに想到せずんば、あらず、單に武家政治の新現象を以て中世の發端となすべしとせば、寧ろ平相國が太政大臣となりし仁安、もしくはその全盛時代なる治承の交を以て擬するもまた可ならずや、もしそれ政權關東に歸して鎌倉幕府の威令全く天下に布き、その勢力牢として抜くべからざるに至りし時を俟たむか、そは遙かに下りて承久の亂の後にあるを如何せむ。

鎌倉幕府の建設は元暦、文治の古にあり、巨頭公が方寸には當時早く確固たる信念を貯へたりしなるべしといへども、時人は見て以て清盛が一時無上の權勢を弄したりしと同一視し、これに多大の囑目と信服とを捧ぐるに躊躇して

時代分割の
不精確

いつかはその覆滅の日あるべきを想ひ、朝廷はた深く政権の東遷を遺憾として常に回復の念を断たざれば、これに心を傾け、これに望を屬せる京都派の人は機會だにあらば討幕の大軍を起さむと期したりき。この沸騰せる反抗心の代表者はいふまでもなく後鳥羽上皇にましく、承久の亂はやがてその抑へ難き宸襟の發露せるなり。されど大勢既に定まりて王師勝たず、驟雨一過して新政府の地盤は却つて堅くなれり。王政復古の希望と武斷政治遂行の決心との軋轢もこれまでにして、京師はこの一敗の後また起つべからずなりぬ。これを國民一般の思想上よりいはば、源平時代以後さしにも動搖せる天下の人心、順に鎮靜すると共にまた活氣を失ふ、嚴格なる意義にいふ鎌倉時代は、かくて承久の亂の終ると共にその第一頁を開くといふべし。

既に政治歴史の上より見ても鎌倉幕府の創立を以てその時代を分ちがたしとせば、これを以て必ずしも細かに政治歴史と時を同じくして進まざる文學史上の時代區劃の目標となさむは、更に當を失せるや論なし。平安の末造源俊賴出でて和歌の新派を標榜し、その麾下に屬するもの甚だ多く、これより保守

を唱道するもの、清新の風を喜ぶもの、折衷を主張するもの、議論紛々として決せず、藤原俊成ついで出て、快刀を揮つてこの亂麻を断たんとしたれど、群雄割據の世は容易にこれを許さず、奮闘惡戦の狀政治上に源平二氏が兵馬の權を争へると正に絶好の對聯をなす。源平の争亂は鎌倉開府と共にその局を結びたれど、歌壇はその後も暫くこの趨勢を持続し、俊成の子定家がひとり覇權を弄するに至りしは、新勅撰集撰進の後にして、歌界一統の結果はこの集に始めて現はれ来る。これまでは紛亂騷擾の時代なり、敢て平安末期と撰ぶところなし。定家は歌界の頼朝なれども、その功を畢へたるは彼に後ること四十乃至五十年なり。故に文學上一般の形勢より論ずれば、院政時代と新古今時代とは殆どその間にけぢめを分ちがたく、従つてこれを平安朝の最後に附して王朝文學のまさに死せむとして終の光を放てるのと見るか、または鎌倉時代の初に置きて武家時代の文學の精華のすてにこの時に養はれたりと見るを以て、妥當の見解とし、二者いづれかその一を選ばば、文學史として在來の區劃に一進境を示すに足るべしといへども、かくてはなほ讀者の混亂と誤解とを招

新古今集の性質

くことなしとせず、暫く従前の方法に甘んじて、むしろ分ちがたき時代を幕府創立に分ち、新古今時代なる一短期を設くるなり。

新古今集の特色はさきの千載集と比べてさまざま異なりたるものなし、すなはち評して千載時代の傾向の更に一步を進めたるものとやいはむ。金葉詞花に種々の歌風亂れ起りて、清新と稱し、奇抜と唱へて、ひたすら古きをすてて新しきをのみ逐へる結果は、亂雑となり粗笨となり、一害を去りて一害を招きしかば、千載集出でてこれに掣肘を加へしを、新古今の更に大に束縛を固くしたるなり。束縛は固くなれり、されど標準を無視したる虐政者の筆法にはあらず、好所は存せられ、存せられてあくまで奨励せられ、唯よからずと思はるゝ節のみ抑へられたり。やがて古今は新古今を得て、屈竟の後繼者を見出せるものといふべく、新古今は、また名詮自稱、よく古今を改造して、別途に比較的圓滿なる發達を遂げしめしものといふべし。

平安末期以來の特色は、敍景詩の多くなれることなり。これを新古今集の例に見るに、

敍景の詠

かすみたつ末の松山、ほのくくと波にはなるゝ横雲の空、家 隆

旅人の袖吹きかへす秋風に、夕日さびしき山のかげ橋、同

古畑のそばのたつ木にゐる鳩のともよぶ聲のすぎき夕暮、西 行

の「さびしき」凄きなど、中には多少作者の主観的感情を交ふるものなきにあらざれども、概するに詠物敍景の著しく風をなし來れるは争ふべからざる事實にして、かくて主観的敍情のみを主とせる古今の舊風に客観的敍景の新潮を加味し、以て客主錯交、景情一致の趣を得むとつとめ、またよくこれを大成せるは、新古今の最大特色なるべし。

忘らるゝ身を知る袖のひらさめに、つれなく山の月はいでけり。

後鳥羽上皇

春の夜の夢のうき橋とだえして、峯に別るゝ横雲の空、定 家

格調句法の變
歌調についていふも、巧緻繊細なるもの、豊艶華麗なるもの、もとよりこれあり、されどこれと共に思想の雄大、用語の洗練を併せて極めて莊重謹嚴の趣あるもの、すなはち所謂丈高き歌の現はるゝに至りしも看過すべからざる一特色

なり。

ほのくくと春こそ空にきにけらし、天の香具山霞たなびく。後鳥羽上皇といへるが如き、悠揚として迫らざるところにいふべからざる妙所あり。修辭の進歩もまた新古今に至りてほゞその極に達せり、既に古今といへども、一はこれによりて名を得たるなるが、未だ幼稚の誹を免れざりしに、こゝに至りて嘗て聽かざりし琅々の聲をなす。この修辭の發達は、蓋し漸次複雑となり來れる思想の在來一様の語句に盛りがたきに至れる自然の結果にして、また一つには歌合の流行のこれを鞭撻しこれを刺戟せるがために外ならず、その特色の二三をいへば、名辭、終止の辭を多く用ふることなり、助動詞、天爾、衰波をなるべく省くことなり。この終止の辭を多く用ふることに關しては、本居宣長はこれを以て新古今の一大弊なりとして深く警め、石原正明はこれこそ新古今がよりて古今に凌駕せる全生命にして、その格調の高き所以のもの、一にこれあるが爲なれと斷じ、その他甲論乙駁、説をなせるもの少からず。蓋し思想は複雑になりても和歌はいつまでも三十一字に限られたり、その語句を簡潔にし、從

歌人輩出

うて終止の辭を多く使用するに至りしも、必然の勢といふべし。新古今集がよりて以て誇るに足るべき所以の一は、俊秀なる歌人に富むことなり。古今集成りて後、歌壇は久しくその風尚の跳梁に委せ、後進の輩これを摸倣して、その法則に違はむことを恐れしが、金葉、詞花の出てし頃より形勢漸く改まり、革新の聲高きに至れりといへども、この二集といひ、千載といひ、未だ新古今時代の如く名人は輩出せざりしなり。新古今時代にはまづ後鳥羽上皇あり、英邁にして、その才多方面、政治に勵精すると共に、和歌所を再興して、斯道の發達に力め、固よりみづからこれに秀てたまへり。土御門、順徳の二帝また和歌の上には拔群の伎倆ありて、父皇と並べ稱せられたまふ。後京極攝政、良經、權要の地位にありて、歌壇の重鎮をなし、その叔父にして、天台座主たりし僧正、慈圓も盛名あり、藤原家隆、同定家が當代の二星と仰がれしは、今更にいはずもがな。その他、男子に俊慧、寂蓮、長明、秀能等あり、巾幗者流に式子内親王、宮内卿の如きあり、みな當時録々たる歌人にして、各自その特色を有して、相下らず。余が霜葉二月の花よりも紅なるの概ありといへるはこの謂なり。

名家の概評

後鳥羽上皇の作には沈痛悲壯なるもの多し、而して言々句々おのづから君王の氣を帯ぶ。共に他の作家輩の企及を許さざるところなり。

奥山のちどろが下もふみわけて、道ある世ぞと人に知らせん。

人もをし、人も恨めし、あぢきなく世を思ふゆゑに物思ふ身は。

われこそは新島守よ、沖の海のあらし浪風心して吹け。

良經は天稟の才、迷悟の境に浮沈して煩悶に堪へざるところ、讀者をして同情の念禁ずる能はざらしめ、彼景の詠またすぐれたるもの多し。惜しいかな、中年にして人に殺され、その詩才未だ十分の發達を見ざりきといへども、清新の歌風は優に推して以て同時代の作家を代表せしむるに足る。慈圓諷して慈鎮といふ、西行を庶幾して、無常厭世の佛教的思想を詠せむと力め、歌數の多きことは遙かに西行の上であり、されど歌品の高下優劣を以て論ずれば、此は到底彼の敵にあらず、概ね粗笨蕪雜にして、趣味油然たるものを求むるに難し、多作の弊か、要するにその實遠く誇に及ばず。藤原家隆もまた多吟を以て名あるものなり、生涯詠ずるところ無量六萬首に及ぶと稱せらる、その特色は敢て新なる

にあらず、奇なるにあらず、極めて平和穩健なる思想言語のうち捨てがたき趣あるを取る。結構の上よりいふも、全體に重きを置きて、字句の工夫は寧ろ凝らざりしに似たり。家隆歌人として深く後鳥羽上皇の眷顧を蒙り、定家に推重せられ、一般人士に崇拜せらる。しかもまた多作の弊に陥りて、詩興を缺ける凡庸の平語を連ねたるもの少からず。

藤原定家

藤原定家は最も文字の修飾に重きを置ける歌人なり、西行が不用意に率直に素懷を吐露せると全く相反す、實に彼と此とはこの時代の作風の二極端を示すものといふべし。定家謂へらく、情は新しきを先とし、言葉は古きを用ふべしと、すなはち用語句法に苦心を重ね、彫琢に彫琢を加ふると共に、父の俊成にも過ぎて尙古の風を唱へ、三代集以後の言葉は用ふべからずとして、以て亂雜粗笨の弊を矯めんと力めたり。然れども時代の進歩に伴ひて思想複雜になれば、三代集時代にありては不足を感ぜざりし言語も、勢、その用を辨ずるに難し、ずてに限ある語數によりて限なき思想を現はさむとす、言語配置上の工夫が唯一の緊要手段となりて、修辭の技巧を以てその缺點を補はむとするに至るは

門閥の樹立

自然の結果にして、定家の歌はこの技巧上の修練工夫の爲に直裁簡明を缺いて、一讀再讀、歌意のいづれにあるかを疑はしむるものあるに至れり。晩年、新勅撰集を撰する頃に及びては、漸くこの弊を覺り、難解の嫌あるものを去りて、平穩なるもののみを尙びたりしかども、後世定家の崇拜者を以てして尙且その難語難句の應接に苦めるもの多し、特にその戀歌において然りとす。かくても定家の流を汲むものは、この戀歌を定家獨得の長所として、古今に獨歩すべきものとなすといへども、これ實は漠然として眞意を捕ふるに難き點を以て、感情の深刻痛切なるが爲と過信したるものなるなからんや。

年も經ぬ、いのる契は初瀬山、尾上の鐘のよその夕ぐれ。

といへるが如き、殊更に多くの名詞をよみ込みて、何の意なるかを知らざらしむ。余輩は定家が修辭上の苦心を多とす、たゞ多とするのみ、眞の詩才に至りては、いまだ首肯する能はざるを悲む。

時代はかゝり、新古今の成れる時、名家は綺羅星の如く列なれり。されどそれより時移ること、いまだ三十年ならずして、形勢は漸く一變す。良經はやく薨じて、

定家が政權の手段

諸家またこれにつぐもの多し。三上皇は承久の亂後、邊陲の離れ島に遷御せられ、後鳥羽上皇に昵近して最も信任を得たりし家隆は、たこの役以來、人の見ること漸く篤からず。こゝに定家は歌壇唯一の老將として、一般社會の輿望を負うて立ち、みづからまた兀々として倦まず、老年に及びて終に歌道の門閥を樹立するに至りぬ。

當時、時人の歌人を評するや、標準とするところ、作歌の絶對的價値に存せずして、その俗界に對する關係に拘はること多し、故に世間における俗人としての地位の上下は、直ちにまた歌界における作家としての聲譽に影響したるなり。されば家隆は後鳥羽院に昵近して、盛名頻に傳へたるも、院の遷御と共に勢力挫け、定家はこれに反して關東に阿附せるが爲に、家隆に代りて權威を得たり。定家が秋波を幕府に送りしは著しき事實にして、その新勅撰集を撰ぶや、何れも皆價値ありとは覺えざる。實朝の作二十餘首の多きを收めたるに、堪能なる三上皇の詠は、その一首をだに採らざりしを見ても、思半ばに過ぎむ。選者がこの一舉は世間の物議を招き、その妹なる越部禪尼さへ、後數年、定家の嫡子爲家

第二平 新古今時代
 定家の歌は、その技巧上の修練工夫の爲に直裁簡明を缺いて、一讀再讀、歌意のいづれにあるかを疑はしむるものあるに至れり。晩年、新勅撰集を撰する頃に及びては、漸くこの弊を覺り、難解の嫌あるものを去りて、平穩なるもののみを尙びたりしかども、後世定家の崇拜者を以てして尙且その難語難句の應接に苦めるもの多し、特にその戀歌において然りとす。かくても定家の流を汲むものは、この戀歌を定家獨得の長所として、古今に獨歩すべきものとなすといへども、これ實は漠然として眞意を捕ふるに難き點を以て、感情の深刻痛切なるが爲と過信したるものなるなからんや。

に書を送りて、この撰が名人たる家兄の手に成れるものならざりせば、手だに觸れざらましをといへり。當時、幕府と氣脈相通じて威勢をさく、儕輩を歴したりしは、太政大臣西園寺公經にして、俊成もしくは定家の門に學び、定家またその家に出入して、種々の便宜を得たりしが如し。權家に出てて、和歌に名ありしもの、なほ常盤井相國と鎌倉右大臣とあり。相國實氏は公經の子、定家が老後の作に則りて最も平穩の調を喜び、播紳家にして和歌の門閥を樹てたるなり。右大臣實朝は定家が秘藏の萬葉集を相傳すると共に、その尙古の一面を傳へて、好んで萬葉の古風を諷詠す。かくて東西の大勢力の師家と仰がれたる定家の勢力や想ふべく、群小作家の敬重畏服を博し得たりしもの固より知るべきのみ。

二條、六條の反目

これよりさき平安末季に當りてまづ歌道の門閥を定めたるを六條家とす。六條家の祖は藤原顯季なり、その後を繼げる顯輔また令名あり、三代清輔に及びて位置漸く堅し。俊成この時に出てて二條家を起し、爾來二家相反目して黨同伐異す。建久の頃、六百番歌合あり、俊成これが判者として、六條派の作家を罵り、

定家の歌學

偏頗の評一時に高くして、六條家の顯昭の如きは陳狀を作りて不平を訴ふ、これを始として正治二年、後京極家に選歌合ありて、こたびは六條家の季經その判者となるや、定家口を極めて、この撰の粗謬見るに堪へざるを誹謗せしかば、季經またこれを含んで定家を譏す。終にその年百首選歌の舉あるに際して、これに加はるを許されざりし定家が怨恨憤懣の情や想像するに餘あり、父俊成もまた奏狀を奉りて、六條家の無學を論述す。かくして漸く定家も百首作者の員に加へられ、且その歌によりて昇殿を許されしかども、あくまで敵を窮處に追はずんば止まざる俊成父子は、顯昭が日本紀の歌を註して法橋の僧綱を乞ふに及びて、またこれに向つて矢を放つ。軋轢年あり、六條家の壘漸く傾きて、氣息奄々また振はず、知家嫡流として家名を繼ぐといへども、疾く父を失ひて、終に定家の軍門に下り、定家よくこれを指導して機會ある毎に推薦の勞を吝まず、輔翼薰陶力めたるに庶幾し。定家の歿後、知家二條家を離れて、再び一家を稱するに至れりといへども、一時は全く二條家の眷顧に倚頼したりしなり。既に異を歌學に樹てて門閥を稱す、必ずや子孫後生に傳ふべき特色なかるべし。

からず。六條家はやく二條家に先だちて起り、歌論にも先鞭を附けて、これに關する著書頗る多かりしが、二條家には定家の出づるに及びて、殊に意をこゝに注ぎ、晩年に至りて拮据甚だ力めたり。渠はまづ種々の異本を涉獵校訂して古書類の定本を定むると同時に、その註釋をも作り、これを基礎として一家の説を打成したるもの如し。その日記なる明月記を見るに、頽齡に及びて未だ嘗て衰へず、嬰鑠として壯者の勢力を凌ぎ、古書を蒐集して、土佐日記、伊勢物語等の短篇の如きは、一兩日の勞よく淨寫の業を了へ、手寫に當りて誤脱の少きも、また私かに誇とするところなりしが如し。その苦心校合の餘になれる源氏物語は、青表紙とて、源光行の河内本と並べて後人の憑據すべき定本となり、註釋としては古今集の願註密勘最も名高く、源氏奥入また世尊寺伊行の註を定家の増補せるものといひ、水源抄、紫明抄に先んじて源氏註釋書の先驅と稱せらる。歌學上の著書に至りては、詠歌大概等頗る多しといへども、後人の假作に成れるも少からざるべければ、これが眞偽の鑑別は、定家を論ずるものの特に注意すべき點なりとす。

第三章 鎌倉時代

所謂鎌倉時代

これを政治の上よりいへば承久の亂（一八八二）の後、これを文學の上よりいへば新勅撰和歌集撰述（一八九二）の後、鎌倉幕府の滅亡に至るまで、政治の中心たる東の鎌倉と文化の中心たる西の京都とが兩々對立せる期間をわが鎌倉時代といふ。されど委しくいへば、かく畫然對立せしは北條氏執政の後にして、實朝の時まではなほ彼此固く執つて相隔つることなかりしなり。

源氏三代

實朝は風流にして錦心繡腸あり、自ら和歌を嗜み、頻に京都の文化を輸入せんと企てぬ。いな、實朝一人に止まらずして、源氏三代はいづれも京都を眷戀したり。今や天下の覇權その手に歸して、關東の威勢遙かに京都を壓すといへども、京都はこれ祖先の住みなれし桃源境、翻つて八州を見れば何ぞ葦蘆茫茫として、士民朴野なるの甚しきや、故郷忘じがたきの念こゝに於いてか、須臾も去らず、彼の優美なるところを取りてこの野に移さむと試みたるもの、蓋し自然の

人情なるべし、されどこの京都の憧憬が、剛毅朴訥また他を顧みざる關東土着の武士と相容れざるべきは、勿論のことにて、源氏の覇業成つて漸く三代、早くもその覆滅を招きて、悲惨の終を告ぐるに至りしもの、原因一にして足らざるが中に、余輩この兩者の好尚の異なるところ、意志の疎通を見る能はざりしを以て、そが主因の一に推さむとす。

北條氏の方針

源家滅びて北條氏政權を恣にするや、鎌倉幕府施政の方針は更に頑固になり、泰時以後はわけても武事を養ふにつとめて、勤儉質朴の風を奨励すると共に、嚴に驕奢柔弱の俗を遠ざけ、以て幕府永遠の基礎を堅うせんと計る。鎌倉と京師との對立こゝにおいてか、確然として成り、都人は鎌倉武士を以て蒙昧野蠻なる東戎として顧みず、關東武家は浮華輕薄兒として上方人を彈指す。兩れば者之間に交通關涉なきにあらざれども、古風と新興の潮流とは接觸するの期なく、公卿は公卿として特立し、武家は武家としてみづから行ふ、鎌倉時代の特色はまた實にこゝにあり。

關東武士の

鎌倉武士は文事に通曉せず、また知らざるを誇りて、知らむともせず、鎌倉幕府

文盲

殆ど百五十年の間、さすがに關東武士の國文和歌を玩ぶものなきにあらざりしといへども、それは寥々として晨星も僅ならず、はじめ頼朝の制度を定むるや、既に大江、三善等の明法家を京都より招きて事に従はしむ、よしこれは草創の際なりとせんも、その後久しく幕府の文筆を掌れる右筆の供給をも京都に待たざるべからざりしに至りては、何とかいはむ、關東武士は文筆にかけては實用にだにその人を缺けり、况んや文學の翫賞をや、更に况んやその創作をや、鎌倉は到底武事一片の地なり、文華は發生せざるに止まらずして、實に無用の長物として顧みられざりしなり、政治史上の鎌倉は刮目して注意すべし、文學史上の鎌倉に至りては、多く問はずして可なり。

京都公卿の萎縮

文學史上の鎌倉はその價值極めて少し、京都はこの時代に至りても依然として文學の中心たり、平安朝以來の文化はとにかくに常にこゝにその粹を集め、學問藝術の最高府として一代の名人を會すれば、これが翫賞者もまたこゝに限られたるの觀あり、されど承久の亂に公卿が一敗地に塗れてより、京都もまた振はず、虛榮の念はいまだ失墜せざれど、内心充實の信は既に脱出し去れる

なり、かれらは質實なる學問と光彩ある創作とにその特色を發揮せむとは思はずして、虛無空漠なる有職故實などに浮身を窺し、これを一身の學問とし、職業ともして僅かにその家を立て、その活路を失はざらむとするのみ。政權一たび鎌倉に移りて、一朝その實務に離れたるかれらは、盡日悠々、閑は棄つるに餘れど、一方に失へる勢力を以て直ちに文學に向くるにもあらず、漸く他方に懦弱なると共に文學にもまた活氣を失ひ、かれらが偏に古を憫愍して、みづから信ずるの薄きや、一にその範を平安朝の盛時に求めて補綴訂復これ事とするのみ、自己の主張を滅却して、摸倣假託の續出せることこの時ばかり甚しきはあらず。これが原因を求むれば新舊二潮流の分立に歸す、陰陽二氣の接觸するや、電光急ち閃き、雷車轟々の響をなす、東西兩思潮の合するところ、必ずや人目を聳動せざんば止まざりしなるべしといへども、惜むべし、京都は京都たり、鎌倉は鎌倉たること上述の如く、文學は一方にその生育發達を阻害せらるゝと共に、他方に全く萎縮凋落せり。而してこの趨勢は歌壇に最も著し。

二條爲家

定家の子に爲家あり、父祖と同じく長命にして、子弟に教授し、三代和歌の家學

を傳へて、二條家の門閥全くこゝに確立せり、俊成の千載、定家の新勅撰に爲家の續後撰を加へて、後の二條家の門流を汲むもの、「家の三代集」として尊奉措かず。蓋しこれらはその撰者が單獨任意の撰述に係りて、好尚のある所を知るに最も便よければなり、爲家の續後撰集の成れるは建長三年なるが、これに先だてるその寶治百首また二條家にありては百首の典型なりと稱せらる。爲家の重視せらるゝことそれかくの如し、されどその實一家の見地を樹てたるにもあらずして、ひたすら父祖の學を傳へて及ばざらむを思ふ、父祖の學を傳ふるに急なるはなほ忍ぶべし、その徒らに摸倣をこととして、父祖が有したりし清新の氣を失ひ、平板に流れ、凡庸に化せるに至りては、斷じて與すべからず。渠や凡骨のみ凡才のみ、その語と調とが父祖の鞭撻によりて練磨せられたるもの即ちその歌にして、詩趣の横溢は遂に見がたし、その歌學として説くところ、著しく古語を尊び、縁語を喜び、新奇勁拔の語を避けて、制ある語、主ある語を定めて、これを用ふべからずとなし、最も平々坦々の調を選びたりき。その古風を尊ぶといふも、いふところ歌ふところ、すべてこれ平凡淺近の調、自ら當世擬古

三家分立

の弊に流れて、眞の古體を傳ふるに足らざりき。
 爲家歿してその後三家に分る、長子爲氏二條家を繼ぎ、次子に爲教ありて京極家これより出て、三子爲相は母を異にして生れ、冷泉家の祖となる。而して何れも門戸を構へて相下らず、爲氏と爲相との如きは、父祖傳來の所領たる播州細川の庄の所有權を争ひて、遂にその裁決を幕府に仰ぐに至れり。こは家産の争にして、文學には直接に何等の關係なけれども、この紛争の爲にこの時代の紀行文の白眉たる十六夜日記を出すに至りしは注意すべし。日記は爲相の母たる阿佛尼の作にして、訴訟の爲に關東へ下れる道中の見聞感歎録なり。

二條、京極の軋轢

爲相と長兄爲氏とは年齢において非常の懸隔あり、爲氏が古稀に垂んとする時爲相はやうやく弱冠を過ぎたり、爲相父母の慈愛と保護とを一身に聚むといへども、和歌にかけては爲氏の敵にあらず、されば歌道の争論は鎌倉時代にありては主として二條、京極の二家に限られて、冷泉はこれに與らざりき。二家の反目は爲氏の子爲世、爲教の子爲兼の代に至りて愈はげしく、互に陥擠して、おのれ歌壇の覇權を握らむと願ふ時に恰も皇室にありては兩統迭立の議あり、大覺寺、持明院二派の軋轢絶ゆる時なく、終に南北朝對立の基を開くに至れり。爲世は後宇多天皇に事へて帝師となり、その女は後醍醐天皇の寵幸を得て、尊良親王、宗良親王等を生み、爲兼は深く伏見天皇に昵近してまた和歌を教へ奉り、後伏見、花園二帝これを乳父として、その家に生長したまふ。されば二家の和歌における紛争が皇統兩系の分立を刺戟するに與りて力ありしや、蓋しいふを俟たずして明かなり、されば二條家は名手の嫡流なり、續拾遺、新後撰など勅撰集撰述の譽は常にその家に歸すれば、世人の尊信も亦のづから他の二家と異ならざるを得ず、爲兼たるもの如何ぞこれを傍觀して安如たるを得む、勅撰集編成の志頻に動き、終に伏見上皇の勅を奉じて玉葉和歌集を撰して、自派の主張を立てたり。その後、花園天皇の風雅和歌集の自撰あり、京極の家風これより漸く興らむとせしが、爲兼は佐渡及び土佐の兩度の流竄に遇ひ、晩年に至りてまた振はず、渠を最後として、三家のうち京極家まづ絶えぬ。二條家はた爲氏、爲世の後、後繼者の以て一世を率ゐるに足るものなく、所謂師範家の勢漸く衰ふ。

兩家の歌風

二條家の歌風はその祖たる爲家の法格を墨守して、つとめて穩健雅馴の調を歌はむとしたるにあり。爲家すでに平板の弊に陥れるに、只管渠を軌範としたるその後の隨逐者が所信なく、主張なく、沈滞逡巡して新意を加ふるに至らず、いたづらに陳套凡庸の文辭をつらねて得々たりしもの、怪むに足らず。京極家はこれに異なり、その歌新古を問はず、調の如きも敢て雅俗の境を設けずして、一意珍らしく新しきを標榜し、束縛なく、箝制なく、平安朝のかた新古今にかけたる和歌を包羅して長短を取捨し、極めて自由なる歌體を創造して、以て二條家に對して天下公衆の耳目を引かむとしたりき。而してそのあまりに新奇を欲したるが爲に、放縱に流れ、偏頗に陥れる點なきにあらず。かくては二條家たるもの名家の嫡流として愈、保守に傾かざるを得ず、京極家の主張を抑制せむが爲めにはあらゆる手段を盡して、用語格調上の制限規則を發表したり。京極家またこの筆鋒に對して黙々に附するものにあらず、こゝに於てか二派の論戰絶ゆる時なく、稿を削りて辯難攻撃すといへども、その和歌の是非を論ずるや、これを自家獨得の主義批判によらむとせずして、一に父祖傳來の秘傳

秘傳家訓

家訓なるものによりて云爲するに過ぎざりしは二派ともに一なり、二條家の如きは必要の迫るところ終に家訓なきところにも家訓を設け、傳授なきところにも傳授を作りて、假託虚偽の武器を借りても敵を攻撃するの材料に供せむとす、かの三五記、未來記、雨中吟など、定家の著として傳ふといへども、その家を尊くせむが爲に後世子孫の偽作せるものなるは、夙に識者の辯斥せしところなり。

和歌の衰微

二條家が歌書假託の一事だにすでに藝術には恕しがたき罪惡なるに、これによりて歌風の自由を掣肘したる結果は、その生氣を殺ぎ、その向上を阻碍して、歌壇の衰廢を招き、爾後暫くはこの頽勢を救ふに由なからむとす。京極家が内部構想の如何を顧みずして、一意外形の用辭技巧にのみ新奇の工夫を凝らせる、固より極端の弊に趨れるものなるを否定せずといへども、二條家が思想形式二つながら平和穩當を主義として、因循固陋に陥り、ひいて子孫後生を誤れるに至りては、その罪もとより同日の談にあらずといふべし。

三家の概観

更に繰返して二家の概評を試みむか、古語古調を喜べるは二條家にして、新奇

を求めむとしたるは京極家なり、しかれどもその實現せるところは共に庶幾するところに反す。すなはちかれは古風を學ぶと稱して、實はその則るところ定家爲家以後の近體に止まり、これは時様の尙古を非議しながら、またいつしかに古調に歸れり、古しといへるも擬古の新調のみ、新しといふも、あつから古體を離れず、かくて二者の期するところは異なりといへども、その趣くところに至りては相距ること五十歩百歩、竟に甚しき逕庭なし、殊に二派いづれも父祖を尊崇して、しかも父祖の眞意を解せず、時流を斥けながら時流の眞相を解せず、空しく世と浮沈して、茫漠の境に彷徨したりしは、共に憐むべし。冷泉家に至りては、この時代にはその家振はず、多く説くに足るものなし、強ひていはばその歌風故らに二家に對して異を立つることをせず、寧ろ種々の風體を使役して偏頗の弊を免れたりといへども、近きを求むれば京極に傾きたりといふに止めて、和歌の一段を結ばむとす。

小説もその傾向和歌に同じ、藤原定家に門閥生じて和歌萎靡して振はず、源氏物語一たび無比の名を留めてまたこの墨を衝かむとするものなし、平安朝に

小説の衰運

ありては根本思想の變化こそなければ、或は事件を前後し、舞臺を轉換して、讀者の好奇心に投ぜむと試みたりしに、この時代に至りて和歌の平凡陳腐に流れたると等しく、小説も悉く同一典型中に固定して、大同小異の技巧に摸倣の跡を蔽はむとするのみ、昔の衣といひ、風につれなき物語といひ、石清水といひ、みなこれに洩れず、そもくかくの如きは當代の上流貴族がその職務を關東武士に奪はれて、社會の閑人となるや、併せてその活氣をも失ひ、遊食惰眠に日を送りつゝ、思想漸く涸渴して、創意も想像もなくなり、觀察さへ銳利ならずして、摸擬剽竊にあらざれば、篇をなす能はざるに至れるが爲なり。かくてこの時代の新小説の一として見るに足るべきものなければ、讀者が平安朝の小説に對する渴仰憧憬はいやが上に盛ならざるを得ず、こゝにおいてかそれらに對する註解書批評書の生じ來るを見る、わけても小説の絶作たる源氏の註解は踵を接して現はれぬ。

源氏物語の註解の始めて世に出でたるは源氏物語奥入にして、平安朝の末、世尊寺伊行これを編述し、のち藤原定家の増補したるものなりと傳ふ。ついで源

註釋と雜纂

偽書續出

光行の水源抄、その子素寂の紫明抄、相前後して出て、弘安の頃には源氏論議といへることも行はるゝに至れり。かく古代小説の研究の起れるも、この時代の一特色なるが、これと同時に一方には古來の奇聞逸話を輯めたる十訓抄、古今著聞集等の雜纂類の流行したるも、またその特色とすべし。而してこもまた平安朝追慕の念盛なるあまりの業にして、その驕華なる生活、優美の行狀さては秀逸なる詩歌を傳へむとせるものなるは云ふを須ひず。この二書の外になほ宇治拾遺物語あり、その序には、今昔物語の編者と稱せらるゝ源隆國の纂録せるやうに記したれど、これもその實鎌倉時代の撰にして、今昔物語の拔萃に加ふるに後世の逸聞を以てせるものなり。

當時作家の滔々として自信に乏しく、古代の作品に眩惑し、藝術的良心を缺けるの極、古人に假託せる偽書の續出を見るに至れり。歌學におけるこの現象はさきにこれを説きたり、神道五部書の上代の作として、中世このかた神道根源の經典として尊信せられながら、實はこの時代の假作に過ぎざりしも、古人既に定論あり、その他夜半の寢覺、とりかへばや物語等を改作して、平安朝時代の

文學にあらはれたる佛教

まゝなる名稱を存して、恬として耻ぢざるが如き、石清水物語の一名に附するに源氏に先だてる正三位の題を以てせるが如き、松浦宮物語を以て貞觀三年の作となせるが如き、その愚終に及ぶべからず。かの宇治拾遺物語に擬するに今昔物語と同じ撰者を以てせるも、正にこの好例なり。陋劣なる悪戯はこれのみに止まらず、⁷發心集を以て鴨長明の著に擬し、撰集抄を拈出し來りて僧西行の名を強ひたり。今行はるゝところの寶物集を康頼の作といひ、方丈記を長明の筆に成れりといふも、また信じ難し。偽作の一々の精確なる年代に至りては固より知るに山なしといへども、この時代における大體の傾向より推して、余輩はこれらが鎌倉時代に續出せるを明言するに躊躇せず。要するにこの時代にありては、文壇の徳義全く地を拂ひ、作者に自己の信頼なく、わが國文學史中最も意氣沈滞せる、最も不名譽なる一時期を劃すといふも不可なることなし。以上説き來れる文學の各方面を通じて、この時代に顯著なる特色をなせるは、佛教的意義を劇増し來れる一事なり。昔の衣は、北の方の幽死を悲める右大將が、これを因縁に落髮して横川に隠逃せんとすといふを以て局を結び、弘徽殿

の女房の父大臣を主人公とせる風につれなき物語は、大臣が宇治に佗しく行ひすませる原因を以てその女の早世とものが失戀との哀情に歸し、またわが身にも代へがたき意中の人の東宮の女御に立てるを見て善光寺に籠り行ける伊豫守が上を寫せるは石清水物語にあらざや、これらの例によりて見ても、この時代の小説の平安朝の範疇を脱せざるが中にも作者の作物に對する理想のちのづから變遷して、無常厭世の佛教觀を鼓吹せんと企てたるものなるは蔽ふべくもあらず、果して然らばこの佛教的見地に立てるかれ等が、或は源氏物語一篇の成れる眞意を付度して、紫式部が浮華艶麗なる好色物語にまづ人の感興を引き、そのうち徐ろに佛教の眞諦を闡明し、以て娛樂のうちには知らず識らず讀者を解脱の境に導かむとせるものに過ぎずとなし、或は式部は石山寺に籠りて、その經卷の裏面に五十四帖の筆を染め、猥りに佛物を使用して狂言綺語を寫すの非禮を敢てせるが爲に地獄に陥れりといへるも、偶然にあらざるを知るべし、もしこれの墮獄の罪を救はむとて源氏供養の行はれたりといふが如きは、かゝる時代にさもあるべき事實にして、愈、明かに一世の

新佛教の刺戟

趨向を反映するものにあらずや、方丈記、寶物集、撰集抄の類みな紛ひがたきこの時代の産物にして、厭世觀、往生談、さては自己の世をそむける因縁などを以て全篇を埋むといふも不可なることなし、要するに當時の作家の理想は、所詮佛教の傳播にあり、豈他あらむや。意氣銷沈せる平安京の公卿はひたすら古代の摸倣に一時を糊塗して、また千載不朽の作をなすを思はず、關東の武士鞍上に意氣を示して勢猛なりといへども、朴訥粗野にして眼に一丁字なし、この時に當りて新風潮を帶ぶるも文盲武士の比にあらず、學藝に通ずるも優柔公卿の流にあらずして、活潑潑地、よく文界一時の牛耳を執りて、清新の氣を鼓舞せるを僧侶及び僧侶ならぬまでも深く佛教の奥旨に徹底せる、佛教尊信者の一階級となす、平易なる親戀の假名聖教激越なる日蓮が遺文等はその例にして、品格と生意と二つながら備はり、この時代の産物としては特筆すべく、宗教上の述作としては、或は不朽に傳ふべきものなるべし、されどこれを以て直ちにわが文學史上に優秀の地位を有するものとなさむは當らず、さてさらばこの外に僧侶または佛教尊信者の手

に成りて、更に文學的價値の大なるものありとせむに、そは必ずしも親鸞、日蓮等の新佛教に關係せる人ならざるべからざるの理なし、蓋し佛教の新潮流を代表せるものは、いふまでもなく禪、念佛、日蓮等の諸宗なりといへども、從來の天台、眞言等の諸宗もこれに刺戟せられ、これに警告せられて、覺醒一番、重來の生氣を呈し來れるを以てなり。わが鎌倉時代における唯一の傑作たる平家物語は實にこの時に出づ、その著者の新佛教に關するものなると舊佛教に關するものなるとを問ふなかれ、たゞその熱心なる佛教尊信者の所産なるをいはば足る、何ぞその在家者たると出家者たるとを問はむや。

平家物語はいふまでもなく平安末期における源平の爭亂を描きたるものにして、結局平家が西海に落ち行きて底の藻屑と化せる一篇の悲劇なり。事實の詳略、文體の異同はあれど、同じ消息を傳へたるものに、別に源平盛衰記あり、更にこの以前の事實を記せるものに保元平治の二物語あり。保元平治はその簡素適勁なる點において時に平家に勝るものなきにあらざるといへども、大體においてその價値は平家の下にあり、或は軍記の祖として殊にこれを尊ぶもの

平家物語

あるを見れども、余はその平家以前に成れるを信ぜず、従うて別にこの二書について細説せず、平家と盛衰記との年代の前後に至りては古來種々の異説ありといへども、こゝにはこれにつきてもまた説を立てず、直下に作品としての研究に向ふべきが、しかしながら盛衰記に取るべきは、その敘述の精細なるの一點のみ、文學としては平家は戰記書中の第一位にあるべし。されば煩を避けて二書を放ち論ぜず、盛衰記の名を省きて、平家の下に攝せしむ。

歴史的悲劇

平家物語を讀みて吾人の最も感興を深うする所以のものは、それが歴史上空前の事實たる源平争闘の一大悲劇を寫せる點にあり。從來、文運盛にして作家が想像に生み來れる名篇傑作少からずといへども、わが國いまだ嘗てかゝる雄大沈痛の悲劇に接せず、壽永の天地を舞臺として自然が演ぜるこの活歴史は、貧弱なる人間想像の域を超越して、言葉の儘に小説よりも遙かに奇なるものありしなり。もとより平家は純粹正確なる歴史にはあらざるべし、その間著者が想像も交れり、傳説の誤れるものもまた多かるべし、しかもその歴史的事實を土臺として取捨鹽梅せるものなるに至りては斷として疑ふべくもあらず。

平家と太平記

況んやその事實たる、わが歴史にあらはれたる最大悲劇にして、その局面の變化に富める、また尋常一様のものにあらざるをや、平家が今日なほその讀者をして歎賞の聲を絶たざらしむるもの、洵に故ありといふべし。

社會の秩序混亂して、干戈飛び旗幟動いてわが世の修羅場を現出したる時代を歴史に求むれば、源平時代なり、南北朝なり、戰國時代なり、織田豊臣時代なり、平安朝は概するに泰平の世、徳川時代に至りては海内更に穩かにして、米艦一發の砲聲に三百年の眠のさめしは漸く末季なり、南北朝には太平記あり、戰國以後には應仁記、鎌倉大變紙、信長記、太閤記等あり、應仁以下は文學上見ろに足らず、ひとり南北朝の太平記は平家物語と並びて軍記の二大作物と稱せらるれど、なほ平家を以て太平記に勝れりとなすべき二個の點あり、一は平家の太平記に先んじて出でたること、一は平家の捕へたる事實の技巧を要せずして、おのづからに太平記よりも詩的分子に富めることこれ、換言すれば太平記は平家を摸倣せる點においてすでに誹を免れざると共に、その文彫琢に過ぎてあまりに華麗絢爛なり。

階級の破壊

源平争亂の事實は何が故に詩的にして多趣味なるか、いはく、平家一門二十餘年の盛衰が急轉掌を覆すが如きものありしを以てなり、たゞ榮枯地を變ふる夢の如くなりしのみを以ていはば、南北朝と多く異なることなし、されどこれは從來固定したりし社會の階級の動搖して、全く調和を缺ける新舊の二潮流は、こゝに始めて久しく蓄へ來れる威力と新進氣鋭の生氣とを以て堤を決して衝突せるもの、混沌澎湃の狀ほと想見すべからずや、南北朝の戰亂はその初はまた武士と公卿との争なりきといへども、しかも當時の公卿は既に武を練ること日久しく、實は武を以て武に當れるものなり、源平時代の争闘はすなはち然らず、源平兩武家の戰といふも、まことこれは文と武との争なり、新と舊との戰なるなり、この大混戰の渦中に投じて新舊衝突の犠牲となれるものを平家の一門とす、特に清盛が一生こそこれを代表して餘あるものなりしか。

平清盛は藤原氏の習慣的勢力に反撥して起れるなり、因襲の久しき上下の階級おのづから定まりて、その壓迫に堪へざれば、これを破りこれを倒して一面繁懽なる社會的形式を顛覆すると共に、一面箝束縛の境より自己を救ひ、以

清盛の奮闘

平家の覆滅

て人生本然の要求に應じて、その行動を自由にせむと試みたるなり、その志や諒とすべし、その徹頭徹尾自己の威力に信頼せる獅子奮迅の大勇猛心や、以て天下を横行するに足る。日本六十餘年は果して渠淨海によりて新光明を見たる、入道が希望はた將に成らむとす、たゞ歴史の勢力や更に偉大なり、清盛いかに縦横無碍に奮闘すとも、その張れる網をば破るべからず、否、そが壓制は早くも至りぬ、平家の軟化はやがてその結果にあらずや

清盛は知らず、昨日まで馬上弓を掻い挟んで疾驅せる殿めしき武夫は、今日は詩歌管絃の宴に袖を絞る優にやさしき公達と化しぬ、甲冑やいづこ、意氣やいづこ、一門がいま踏みて歸れる戦場の様も忘れたりげに、いしくも行ひすませる笑止さよ、平安朝以來の宗教もまた舊思想を代表して平家を煩はすこと多大なりき、園城寺といひ、興福寺といひ、延暦寺は幸にして清盛と結びしも、何れも不俱戴天の仇敵として、常にその干戈を差し向けぬ、平家が横紙を破りて一時帝居を福原に遷せるも、その理山の一は、蓋し京都の地にありてはこれ等舊思想の壓迫絶えずして、恣に威力を振ふに由なかりしが爲なりしなり、され

文武の對照

ど既に久しく養ひ來れる習慣の惰力はこゝにもかれらを安んずる能はざらしめて、また幾ばくもなく都がへりの陋態を演ずるの止むを得ざらしむ、さしにも魔王の威を振はむとせし清盛の運命もこれまでにして、その歿後數年を出てずして一門の破滅となり、西海の浦波をして永へに悲哀の曲を奏せしむるに至りしもの、單に源氏の武力の優れるが爲とのみにてはいひ足らず、木曾義仲が一擧にして都に入るを得たるも、從來平家に同心したりし山門の衆を語らひてその合力を得たるが爲に外ならざるなり、奈良の大佛殿を焼き、伊勢の神領を掠めたる平家が無道の振舞はいかに天下萬衆の敵愾心を喚び起したりけむ、およそこれらの壓迫と忿恨とは相重なりて、かくまで容易にめざよしき源氏の功名を遂げしめぬ、要するに平家没落の主因は二あり、都會に上ると共に早くもその武装を捨てて文弱なる公卿に同化せるはその一にして、これに反して一方には新進の勇氣に任せて舊來の思潮に對する破壊を試み、終にまた防遏すべからざる反抗心を躍起せしむるに至りしはその二なり。

宇治川の合戦脆くも敗れて、腹かき切らむと扇の芝に坐したる源三位頼政が、

平家の女性
と武士

最期の辭に埋木の花さくこともなかりしに、身のなるはてぞ悲しかりけるとよめる。薩摩守忠度が都落に馬の首を廻らして、俊成が五條の館を叩き、この中一首にても撰集に入るべきものあらば生涯の面目なりとて、己の家集を預けて去れる。また一の谷の櫓の上に吹き、すさぶなる笛の音に、木戸口に眞光かけたる朴訥の熊谷直實をして、平氏の公達は姿も心もやさしき上臈よなとて、歎の聲を放たしめし風流などの、詩味油然として興趣湧くが如き感あるも、當時新舊思想を代表せる文武の對照が餘に著しきによるるべし。平家の著者は固よりまたこの對照の讀者の感興を引くに足るべきを信じ、肉動き骨鳴る勇ましき戰物語の間々には、この優美可憐なる話柄を挿み、以てその庶幾するところを達したるは、苟くもこの篇を繕くものの容易に看取するところなるべし。

この優にやさしき方面の物語の中にも新舊二道の潮流はまたおのづから顯著にして、運命の翻弄するにまかせて、その一生を浮沈せる二代の后、小督局、維盛の北の方の如きは、飽くまでかよわき平安朝式婦人の舊思想を代表し、祇女、佛御前、横笛、千手の前等の中流以下の女性の如きは、その戀を失へばすなはち去つて佛に歸すといへる新時代の傾向を帶ぶ。武士に至りては、平家の公達の多くは平安貴紳に擬して優柔不斷に陥りたりといへども、なほその中にも新なる武士氣質を養へるものなきにはあらず。所謂關東武士は進むを知りて退くを知らざるもの、君の爲には一命を鴻毛の輕きに比し、干戈の外また一物を顧みざりしが、いまだ後世におけるが如き武士道の發現は見がたかりしなり。筑後守貞能が重盛に事へて平軍無雙の勇士と稱へられながら、しかも御方の都落にひとり離れて東國に向ひ、宇都宮氏に隱匿はれて殘生を送れるが如き、木曾四天王の一人と聞えたる樋口次郎兼光が兒玉黨の甘言に陥りて、これに降れる甲斐もなく斬罪に處せられたりと傳ふるが如き、これを證して餘あり。武士の志操氣節の成熟して渾然たる一個の武的道德を形成するに至りしは、遙かに後にありといふべし。

平家の厭世
觀

平家物語は縦に雄大悲壯の戰記を貫き、横に哀憐優雅なる戀物語を錯綜すると共に、また實に幽玄奥妙の佛教趣味を點綴す。叡山に關する記事は殊に多し。

これ既に前に説けるところにして、著者が平家物語一篇を述作せる目的の存するところ、これを措きて他あらむや、畢竟この主張ありて、治承の春を名残に、壽永の秋を西國さして落ち行ける夢よりも果敢なき平家一門の榮枯盛衰の史に言々涙あり、句々同情あり、讀む者をして讀誦一過、急ち無常厭世の感を懷いて佛道に歸入せしめずんば止まざらんとす、その全篇を通じたる平氏が運命の波瀾の、人心最奥の琴線に觸るゝものあるはいふまでもなし、その間に挿入せる戀愛譚の如きも、歸着するところは即ち無常にして、著書の理想は到る所に現はる、今これらにつきては深くもいはず、その冒頭を、祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅桑樹の花の色、盛者必衰の理を現はす、驕れるもの久しからず、たゞ春の夜の夢の如し、猛きものも遂には亡びぬ、偏に風の前の塵に同じといふに起して、結末の灌頂の卷に、建禮門院が白河法皇への物語に、その身の経過せる一生を六道に譬へたまへりといへるに考へて、その全豹を推すべし。

第四章 南北朝時代

この時代の
大勢

後醍醐天皇英邁の資を以て鎌倉幕府の専横を憤り、帝業回復の謀幾たびか蹉跌してなほ屈したまはず、御志いよく、堅きと共に、時勢もちのづから一轉して、諸國の武士の心を朝廷に寄するもの漸く多く、幕府遂に倒れて、建武中興の成れるを見る、すなはち天下は再び聖天子の直ちに政を視たまふ天下となり、世はさらに靜謐に歸りて王朝盛時の復興期して待つべかりしに、痛むべし、新令宜しきに従はず、公平に行はれず、さなきだに久しく武政に慣れたる諸將は奇貨措くべしとなし、碧血いまだ乾かざるに、早くも反旗を翻して亂を構ふ、首魁は足利尊氏、鎌倉に起りて京師に上り、大義名分を正しうせむが爲に正統を外にして別に天子を立つ、後醍醐天皇すなはち吉野に蒙塵したまひ、主權こゝに南北に分れて、嘗て北條氏が分ち奉れる兩皇統は更に相反目することとなり、武士てふ武士はそのいづれかに附して、戦亂これより止む時なし、社會は統

時運と文藝

一を失ひぬ、臣民は歸嚮すべきところを知らざらむとす。一時好望なりし文藝はたこゝに至りてその萌芽を潜めざるを得ず。そもく後醍醐天皇の中興の偉業は後鳥羽上皇の遺志を継ぎたまひしものなり、さきの承久の亂は皇權の回復を謀りたまひし御企なりしが、雨降つてあしくも地はかたまれり、官軍一敗地に塗れて、幕府の勢力いやが上に張り、その後にはまたかゝる無謀の舉に出てむとするものなかりき。この間、鎌倉の地は實力足りて活氣充滿すれど、文藝の道には極めて疎く、京都はこれに反して文學の士多けれども、因循固陋にして、舊型先例を摸倣するのみ。さらば後鳥羽上皇の企畫はその謫所に崩じたまふと共に全く跡を斷ちしかといふに、決して然らず、一脈不平の氣は沈滯鬱結せる人心の間にも縷々として絶えず、隱約の裡に根を張り幹を延して、遂に後醍醐天皇に及びて俄然として天下の耳目を聳動せるなり。京都はこゝにおいてか更に政治の中心となり、公卿は活氣を呈し來れば、この勢は社會の全般に涉り、文藝も一時復興の姿を示す。されどこの文藝復興の機は熱せるは、單に世の中の戰亂うち續くにつれて、人身の動搖せ

る結果なりと説かむは未だし、換言すれば、いまふたゞび政府の地となれる京都が、これまでに引きかへて活動の社會となり、亂れたる國家はこゝを中心として統一せられむとし、久しく暗黒の窟中に適從するところを知らざりし天下萬衆の、一路を探り得て、新たなる希望の光に接し、氣力を回復すると共に理想實現の途をも得たるが爲なりといふを以て妥當とすべし。しかも惜しいかな、京都の政治の中心たるはその後永く變ることなかりしといへども、社會の理想實現の希望は一時の夢と消えて、幾ばくもなく天下は更に麻と亂れ、望をかけたりし文藝もまた遂に陸離たる光彩を放つことなくして止む、實に已むを得ざりしなり。

頼阿法師

和歌の現象を見るに、鎌倉時代には二條、京極、冷泉の三家あり、各異を立てて門戸を張りしが、そのうち冷泉家は初よりいまださせる聲譽を得るに至らず、京極家は爲兼の歿後その家全く絶え、二條家も爲世の子孫にして勅撰に與るものなきにあらざりしかど、これはた微々として振はざりしが、元弘、建武の頃、二條家の門より出て、折ふし頼然たる二條家の風と一般歌壇の衰運とを挽回

連歌の起源

して、よく復興の實を擧げたるものを僧頼阿となす。頼阿法師は爲世に師事せる人、和歌の造詣頗る深し、その集を草庵集といふ。風體爲氏以來の平穩を主として、奇を避け、清新の氣を失ふといへども、言語の雅俗の撰擇に注意し、辭句の鹽梅に苦心を費して吝まらず、殊に多く縁語を用ひたる修辭上の技巧に至りては、蓋し何人もその價値を否定する能はざるものあり。後世、二條の流を汲むものの模範としてまづこの集を推すこと、所以ありといふべし。

その門下に攝政の貴紳あり、二條良基といふ。頼阿と力を協せてまた和歌の復興に勉む。されど良基の意を傾倒したりしは、和歌にあらずして、寧ろ連歌にあり。連歌の起源につきては、或ははやく神代にありて、伊弉諾、伊弉冉二尊に起れりとなし、或は日本武尊が酒折宮にありて、焚火せる翁に向ひてにひばりつくばを出でて幾夜か寐つると問ひたまふに、翁が答へて、かくなべて夜には九夜、日には十日をといへるを以て、その始となし、これによつて連歌を唱へて筑波の道といふともいへど、これらの起源論はいま深く穿鑿するの要なし。下りて萬葉、拾遺等の集にもその例見えたるが、なほ特別の名目を設けず、金葉集に至

連歌の盛運

りて始めて連歌なる一部門は置きたるなり。

連歌は一首の和歌の上もしくは下の一句を一人がよむを、これに次ぎて殘の一句を他の一人が連ぬるにて、その例は前にあげたる日本武尊の問答に見ても知るべく、初めは單に文學上の一種の遊戯として弄ばれ、隨つて多くは滑稽の意を寓せしものなるが、平安末期を通じて、鎌倉時代に入り、漸く盛に行はるるに及びて、和歌の名家にしてこれに指を染むるもの多く、同時に一首の制限を脱して二十句、五十句、百韻、二百韻、五百韻、千句に及び、二條家の祖爲氏の如きも和歌よりは却つて連歌をもつて得意の技としたりと稱せらる。かくて鎌倉時代には既に連歌の法式を定むるものあるに至れりしかど、なほ一家の私言たるに止まりて、以て全體の連歌を律するには足らざりしが、良基一たび出て救濟、周阿と共に連歌新式を定め、始めて準據すべき斯道の法則を立つるに及び、今までは消閑の餘技として取扱へる歌人も、眞面目の態度を以てこれに對すれば、滑稽の意味もいつしか嚴肅となり、進んでは和歌と拮抗し、或は和歌の勢を壓せむとするものあるに至る。歌界の風潮の變遷もまたこの間に窺ふ

神皇正統記

べからずや、述歌はかくこの時代に至りて滑稽の域を出でて嚴正の地步を獲得したり、しかもこれを歴史の壓迫を被ること多き和歌に比ぶるに、なほその法則の自由にして、用語の無節制なる、到底同日の談にあらざるは勿論なり。されば良基等の如き極めたる上流者間にも行はれたりといへども、流行の程度を以ていへば、公卿の間には和歌なほ勢力あり、述歌は寧ろ武家の文學として行はれたりといふを得べきか。

南北朝は王政復古せむとしてしかも復古せず、天下統一せむとしてしかも統一せず、日輪山端を出でて更に雲霧の爲に遍照の威力を遮られたるが如き時代なり。この瞬時一閃の光明を捕へて、よく理想の實現に力めたるものを神皇正統記と増鏡となす。神皇正統記は准后北畠親房の著にして、中興の業破れて南北更に分立するに至れる王道の衰頽を憤慨し、古來の歴史に照して皇統の正閏を論じ、三種の神器の在るところすなはち名分の存する所なるを疾呼せるもの、實にわが國文を以て綴れる議論文の權輿といふべく、婉曲なる語句のうちには博大の氣格を藏して、堂々としてまた朗々たりたりと著者が身權要の地

増鏡と吉野拾遺

にありて、みづから權力争奪の渦中に投じたりしが爲に、その文や、もすれば一種の政論的臭味を帯び、純文學として懽焉らざる節なきにあらざるは、或る人は却つてこれを賞すべく、余を以てすれば寧ろ憾むべしといへども、とにかくこれを以て文學者ならぬ著書を上下せむは固より誤れり。

増鏡は後鳥羽天皇の御即位より後醍醐天皇の建武中興に至るまでの歴史にして、この間に起れる大小の事實を客觀的に記述して、一見別に南北分争に關する何等の意見をも挿めるものにあらざるが如し。その後鳥羽天皇に記事の發端を置きたるも、單に今は絶えたる彌世繼の後を承けたるものと見ば、これは尋常のことにして、普通の歴史として毫も疑を容るゝ餘地なく、著者が編述の目的は極めて平明なるが如しといへども、余輩の付度にして誤らずんば、承久の亂を開卷として結末を建武の中興に選べる著者が内心、また何の意味をも存せずといふを得ず。たゞ正統記と選を異にして、明々地に正閏の議論を云爲せず、事實を事實として表面一様の敘述を用ひたるが爲に、その眞意を汲むに難んずるのみ。この増鏡が深く思想を裏に包みて、傾向的着色を帯びざる

は、やがてその文學として正統記に優れる所以にして、流麗の筆致またよくその模範たる榮華物語の文章を凌ぎ、大鏡の壘にも接せむとす、されど時代の先後よりいふも、絶對的價値よりいふも、増鏡は到底假名歴史の隨一として名譽を恣にするには足らざりき、吉野拾遺またこの時代に成りて、吉野の朝廷に關する種々の逸聞を録す、固より南帝の侍臣の作にして、舞臺は悉くなほ天下統一の希望ありし初期の吉野にして、恰も老後衰殘の士が今はた望むべからざる少壯健闘の時代を追憶せる回顧録とも見るべし。

徒然草

神皇正統記といひ、増鏡といひ、吉野拾遺といふ、いづれもその形質において多少の差こそあれ、その一時光明を認めむとしたりし實社會と相接觸して生成せる産物なるは、みな一なるが、こゝにこれらと全く發生の所縁を異にして、著者が修得せる道佛主義の眼鏡によりて、よく皮相の虚飾を透して隠れたる社會の裡面を洞察し、爬羅剔抉、痛快にその矛盾撞着のあるところを曝露し、しかも世間より一步を退いて全く第三者の位にその着眼點を置けるものあり、これを兼好法師の徒然草とす、兼好法師は洛東吉田祠の神官卜部氏に出づ、後宇

多上皇に仕へて、一時宮廷の間をも立ちならし、が、上皇崩御の後、髪を削つて山林に隠れ、閑寂の生活に世を終りし人、其の佛教の蘊蓄ありしはいふも更なり、ふかく道家の虚無説に悟入して、二者の抱合するところ、おのづから特殊の厭世觀をなし、かの支那の南北朝に出でたる清談家をこゝわが國に世を白眼に見る、されど平安朝以來の舊思想はこの時に至りてもなほ偉大なる勢力あり、平淡曠懷のこの僧をしてなほかつ感情主義の羈絆を脱するを得しめず、時に口を開いて、色好まざらん男は玉の匣の底なきが如しなど、戀愛偏重の響を傳へしむ、まことや人生を遠觀し時代を超越して、その好むところに従つて世を褒貶すといへども、また人間通有の情緒斷つに難く、その間おのづから一味忘るべからざる温情を有するは兼好の特色にして、その見聞記たり、感想録たる徒然草の、この時代の産物としては太平記と併稱せられ、隨筆としては枕草紙と並べて輕重を問はれむとするも、畢竟この舊思想たる情緒主義と新思想たる厭世主義とが、併存錯交、或は融和し、或は反撥して、時にかれに、時にこれに偏重し、以て一種獨得の調をなせる點にあり、一言にして兼好を評すれば、渠は

新舊思潮錯存の時代の鏡面の影なり、而してその趣味の清淡洒脱なる後世また對を求むるに難からむとす。歌道においても兼好は頼阿と弟兄たり、されど和歌はその得意とするところにあらず、長技は文章にあり、文章はすなはち不朽の價値を止む。

太平記

南北朝における文學の最大著述は、いふまでもなく太平記なり。太平記四十卷は平家物語に倣ひて作れるもの、後醍醐天皇の即位に筆を起して、建武中興を過ぎ、兩朝分争を経て、足利二代將軍義詮の薨後、細川頼之が幼主義満を輔佐して、天下の政治を行へる頃まで、およそ五十年間に亘りて、戦亂の始末を記す。その文章は平安朝の末造より漸く發達し來れる和漢混交文を用ひて、漢語を交ふることに多く、脈絡は大に漢臭を加へ來りて、絢爛華麗なること遙かに平家物語の上にある。されど評するものはこれを以てなほ平家物語と比肩する能はざるものとなし、讀むものはたこれに對して平家に感ずるが如き油然たる興趣なきを憾とす。何が故ぞや、他なし、平家物語には首尾を一貫せる著者の理想のあるあり、以て前後照應、抑揚あり、波瀾あるを得て、全篇渾然たる一全體をなせども、太平記に至りてはすなはち然らず、著者の心筆は事件の進行と共に屢、動搖し、いまだ嘗て平家が示せるが如き高調に及ぶこと能はざりければなり。

社會的統一の缺如

見よ、初め後醍醐天皇の中興の業に多大の同情と尊敬とを捧げて起てるが如き太平記の著者は、兩統分立の後もなほ流石に櫻樹を削りて赤心を披瀝せし兒島高德の忠節、その子の自殺を止めて尊王の大義を含めし正行が母の庭訓など、時に巧なる空想をさへ交へて、國民が向背すべき道義の路條を示したりしが、さるほどに南朝の旗幟漸く光なき朝に忠臣と頼まれし勇將も夕に賊軍に降つて逆さまに矛を構へ、一時の利害愛憎によりては兄弟も敵となり、敵も御方となり、一代を拂つて節義なく、恩愛なく、理想なく、主張なきに至りては、またいづれにその同情を向くべきかを知らず、描寫は徒らに東西に彷徨して、中心の歸着點を失ひ、支離散漫、讀者はまたこれが爲に屢、前後の脈絡を忘却して、卷を覆うて退屈を訴ふ。太平記が一人の手に成れると數人の手に成れるとは關するところにあらず、とにかくにそが統一の美を飲けるは第一の缺點にし

て、これは強ちこの書の著者をのみ咎むべきにはあらざるが如し。蓋し建武の中興ありて社會の秩序一時成立したるが如きも、やがてまた南北朝の兩立となり、天下更に混沌の狀に陥れば、仄かに認めし理想の光明も、忽ちにして消え、國家の統一を失ふと共に、文學の上にもこの影響の及べるなり。皇統の分立は短日月の間にはあれど、平家物語にもまたこれを見たり、たゞ太平記と異なるところは、當時國民の間に、政治の中心、權力の中心は常に京都にありといへる一片確固の所信ありしが爲に、かゝる際にもよく思想の浮動を免かれたりしのみ。

武と武との 争

さばれ太平記と平家物語とが趣味を異にせる著大の眞因はまた別に存す、それは平家の條にいへるが如く、兩者が取れる題材の主體の相違にあり、平家が取れる源平の争亂は、名は武家と武家との争なりといへども、實は武家と公卿との争なり、その生活を異にし、習慣を異にせる階級の相扞拮するところすなはち破天荒の詩味を生ず、これに反して太平記が取れる南北朝の合戦は關東の武家方に對する京都の宮方の反抗なり、一見その階級において非常の相違あ

るが如きも、この時代の宮方はまた舊の宮方にあらず、武を練り、膽を磨きて、剩へ從屬の武士ども、その數をさく／＼關東に匹敵すれば、實はこれ武家といふと何ぞ選ばむ。かゝる宮方と武家との合戦は全然武器の利鈍を試すなり、兵力の強弱を比ぶるなり、新田勝つか、足利敗るか、これを決するは一にかゝりて兵術の熟否にあるのみ。太平記が一篇を通じて殺伐なる記事に滿ち、絶えて平家に見たりしが如き、優美可憐なる戀物語、戯曲にも似たる悲劇の一齣をだに有せざるは當然の結果なりといふべし。平家物語はわが國の散文的敘事詩の上乗なり、太平記もまた後世に及びては一の敘事詩を以て目せらるるといへども、その當時の兵術を研究するに寄與するところあるを外にして、不朽の價値を有すること、よく平家の如くなるを得るや否や、識者を俟ちて後に知らざるなり。

道義の觀念

論じ來りて余輩は頗る太平記の爲に不祥の言を重ねたるを思ふ。然り、太平記はこれを何れの方面より望むも、文學史上の最大傑作とはいひ難し、されどこれは一全體としての立論なり、部分々々の美點に至りてはまた大に見るに足る

武士道の發

ものあり、而して平家に比較して太平記の特色とし長所として擧ぐべきは、その中に現はれたる個人が、かれの時代にありては未だ全く脱却するを得ざりし平安朝の色彩を去つて、新しき風俗習慣を養ひ、殊に儒佛二教の影響を受け、著しく倫理的、宗教的觀念において進歩を示せる一事なり。すなはち儒教の感化に見んか、かの藤原藤房が龍馬を退けて政道を論じたるが如き、また尊良親王が式部少輔英房の貞觀政要を講ずるを聞きて寵姫を遠ざけたまひしが如き、以て例とすべく、これを佛教にしては、わけて禪宗の勢力行はれて、公卿武士のこれに歸依するもの甚だ多く、日野俊基は鎌倉に身を失はれむとして、泰然として「古來一句、無死無生、萬里雲盡、長江水清」と喝破し、北條氏の臣長崎次郎は「如何なるかこれ勇士慙麼のこと」といへる問に對して「吹毛急に用ひて前まむには如かず」といへる南山和尚の答を得て、聞くや聞かずや、藝地に敵陣に駆け入りて血戦す。かれらが死を見ること歸るが如く、平然自若として運命の示すところに従へるもの、また偉ならずや、もしそれ武士道に至りては、これら儒佛の思想と聯關して、その發達の特筆す

展

るに足るものあり、元弘三年六波羅の陥るや、越後守仲時を始として兵士これに死するもの四百三十二人に及び、ついで高時の鎌倉東勝寺に誅に伏するや、無慮八百七十四人の臣下枕を並べて追復切つて失せにけり。北條氏の末路は悲惨なり、民心を失ひ、戰爭に敗れて、四面楚歌の聲に滿つ、されどその最後の一瞬やかくの如く、それ華やかなり、これをかの一の谷の合戦乃至壇の浦の船軍における見苦しき平家の敗北に想ひ比べて、その差幾何、あゝ、時勢の變遷の争ふべからざる一にこゝに至るか。

女性に對する觀念

女性に對する觀念もまた平家物語とは頗るその趣を異にし來れり。源平時代にありても、時に一世に先んじたる女性なきにはあらざりしが、なほ二代后、小督局の如き戀愛偏重の平安朝式婦人は、その時代の代表的女性にして、平家の著者はまたこの種の婦人に向つて滿腔の同情を注ぐに吝かならざりき。太平記の著者は然らず、鎌倉時代以後漸く根柢を固め來れる女性卑下の思想に同感して、頻に儒佛の説を注入したりしが如し。例へば、御方の土岐頼員が大事をその妻に洩せるが爲に、後醍醐天皇の討幕の御謀の破れたるを擧げて、七たび

子をなすとも女子に心を許すべからずといへる外國流傳の古語に左袒し、さしにも堅固なる武家方の佐々木信胤が一朝節を變じて宮方に附きたるを見れば、この頃天下に禍をなす例の傾城ゆゑとぞ申しけるといひ、更に新田義貞が合戦の期を失へるも、勾當内侍の愛に溺れたる爲、鹽屋高貞が家をも身をも亡ぼせるもまた美しきその妻のせさせたる業なりとす。されどかく著者が誹謗し呪詛せるは、優にやさしきかの平安上臈式の女性のみ、或はその子を誠めて、父の志を繼がしめ、或は御方の兵氣を鼓舞して止まざりし、楠木正行の母、奈須五郎が母、さては瓜生保が母などの如き、武事の一端をも心得て庭訓の龜鑑たるべき雄々しき戰國的女性に至りては、寧ろ好んでこれを描く。かくの如きは終に平家に見るべからざるところにして、以て太平記と平家物語との著者が女性に對する理想を比較すべく、延いては以て時代思潮の變動を知るべし。

第五章 室町時代

この時代の
大勢

南北朝合一して京都は再び政治の中心となる。尊氏はよく足利氏十五代の基礎を築きしかど、なほ擾々たる内訌軋轢を如何ともなす能はざりしに、花の御所を築き、金閣三重の樓を營める義滿に至りて、始めてその政治の緒に就けるの觀あり。尊氏が天下の覇を稱するまでの態度は、到底公明正大なりといふを得ず。戰亂の世の中とはいひながら大義名分は、おのづから盡然たり。尊氏いかに權謀術數に長けたりとも、曲れる尺度は正しく用ひがたし、機を見て動くに疾き渠は、諸侯と下民とが悦服の意なきを知りて、忽ちその態度を一變して、おのれまづ頭を低うして媚を八方に獻ず。驕傲、至尊をも無視するに躊躇せざる人の政策として、こは寧ろ奇觀といふべきも、天下人心を懷柔すべき道、これを措きてまた他あらざりしなるべし。しかも當時諸侯の尊大自ら許したりしや、尊氏がこれしきの溫容甘言に軟化するものにあらず、ますく勢を得、愈々權を恣にして、各自の所領に跋扈跳梁の限をつくし、將軍家の令を蔑にすると共に、或は個々に、或は黨與相結びて、隣戰遠攻、干戈相見えざる日とてもなし。およそかくの如きもの尊氏が世の有様にて、ひとへに渠が自ら招ける禍ともいふべ

くや。さて義満の代に至りて、久しく解決するところを知らざりし兩統の軋轢は合和し、天下の紛争はた一時に歇みて、士民こゝに太平の象を喜び、室町幕府の盛運を謳歌したり。されど實はこれ雨公篠を衝かむとして、滿を持していまだ放たざるの時のみ、やがて永享に一矢を試み、嘉吉に二を亞ぎ、應仁に及びて、續發亂射息をも繼がせず、風伯叫び、電將狂ひ驅け、雷神轟きさわぎて、京都を中心として、天下をこの混沌溟濛の裡に露出すること、前後百餘年ならしむ。あはれ義満の世に萌せる文華は、菑のまゝに咲くこともなくて散り了んぬ。徳川家康はこの雨この風の歇む時、頭を擡げたるもの、渠が見たる天地は、滿目風打雨撃の痕ならぬはなく、渠が見たる四民は、具さに塗炭の苦を嘗めて、怨嗟の聲いと哀なりき。嬋娟たる百花は、駘蕩の春にこそ誇れ、文學もかくの如き亂離の世にいかで榮えむ。

文武の合一

しかすがにこの戰亂の時代も應仁まではやゝ和煦の日時あり、よしや内治外交のこと、一々意のまゝに行はれざりしにせよ、室町將軍家の威令は、とにかくに全國を支配するに足りしなり。前の鎌倉の世を見よ、文化の中心は全く東西

社會よりも個人

に二分して、文藝の素養あるものは實力萎靡して振はず、氣力漲りて政治の權を握れるものは、文事の門外に立ち、文武全く兩途に趨せ、兩者の離反この時より甚しきはなかりき。相繼げる南北朝もまた勢力の二元なるは依然として變ることなく、天下歸服するところを失ひて、人心五里霧中に彷徨すれば、文藝の發育のこれがために阻害せられたるもの、豈少々にして止まむや。室町時代に入りては情勢一變、權力京都に集中して、文に携はるものと、武に與するものと、併びにこゝに合一し、従つて一時の元氣はこゝを中心として現はるれば、文藝はたこの機運に乗じて大に振はむとする傾向あり。すなはち所謂東山時代の繪畫を筆頭として、髹漆、陶磁等の美術工藝が、非常の發達を示したりし如く、文學にも漢詩和歌の盛を致すと共に、別に謠曲といへる新文學を生み、前後に類なき特殊の産物を後世に残したりき。

されど天下の諸侯、陽に柔順を装ひて、將軍家の麾下に服すといへども、陰には野心勃勃、事に臨み、機に従ひて、その鋒銜を露はし、弱肉強食の業に日もまた足らず、暗流四方に流れて盡きざれば、人民須臾もその生業に安んずるを得ず。東

山將軍も積極的にこの不服分子を平げて、昇平の實を擧げむとはせず、袖手傍觀消極的に退いて銀閣の閑室に風雅の道を樂まむとす。かゝる時社會に理想の光明を闕けるは理の最も見やすきことにして、この點はまた南北朝と異ならず、國是いづこにかある、統一いづこにかある、紛々たる好戰の諸侯は攻撃これ事とし、黨を同じうして異を伐つ、矛盾の人界なり、悲慘の世の中なりとは、當時何人の眼にも映じたる世相なるべく、これに逆ひて進んで自己の理想を體現せんとし、或は社會全體の精神を發揮せんと試みるが如きものなかりければ、勢々のづから、或は個人の苦痛悽慘の境に同情を寄せ、或はその清風高節を讚するものを生じたり、後崇光院の椿葉記の如きは稍、選を異にして、皇統の嫡庶を論じたりきといへども、これとて神皇正統記の氣魄堂々たるには似ず、寧ろ瑣末なる私事をことごとくしく説けるのみ、固より平家物語、太平記などの如く、天下國家の安危存亡に關する大戦を描けるものは少くして、義經記、曾我物語など、個人の武勇譚、孝行話の類を寫せるもの多く出て、なほ下りては社會の紛紜をば全く度外に置きて、専ら滑稽を主とし、純然たる想像の所産に俟て

る鴉鷲合戰物語、魚鳥平家等の作を見たり、されどこの時代また全く大題目を捕へたる戰記物のなきにはあらず、應仁記の應仁の亂を寫し、鎌倉大雙紙の關東治亂の委曲を盡せるが如きはすなはちその例にして、たゞ當年の士人が踏々跟々、自己の歸向するところを失へるが如く、作者もまたこれらの戰亂に對して、敵味方いづれにその同情を寄すべきかを知らず、漫然筆の動くに従つて記事を臆列糊塗すれば、通篇何等の主張なく、意義なく、要するに無味乾燥いふに足らざるの結果を生じたり。

典型の弊

かく文學はこの時代に至りて、いよく平凡庸劣のものとなりつれど、しかしながら文學に個人の尊重せらるゝに至れるは、この時代の新しき傾向として一顧に値す。されど余輩がこれに對して、いまだ雙手を擧げて贊稱の意を漏らすに躊躇する所以のものは、その皮相の極めて美はしきにも似ず、實體の實に察感すべきものあるを思へばなり、何を以てこれをいふか、他なし、この時代の個人尊重なるものは、國民の團結心の缺乏、社會思想の壞頽がその極に達して、國家的觀念の失はれたる結果、おのづからこゝに至れるにて、決して積極的に

意識的に人格を認識せむとしたるものにあらざればなり。されば文學が個人を寫すといふも、その性格なり、心理なりは極めて普遍的なるものとなりて、微細なる感情の發動の如きは現はれず、後に出でたるは先なるものの爲すところを追ひ、準擬摸倣、みづから深く研覈討究することなければ、一代は一代よりも自然に遠ざかり行きて、はてはあどろくしき一定不變の典型を生ずるに至れるなり。和歌に傳授の論のやかましくなれる、謠曲が千篇一律の弊に陥れるなど、原因はすなはち相同じ。

古今傳授

まづ和歌を見るに、頼阿の後、二條家も一向に振はず、僅かに、義滿の時、冷泉の家風を學べるものに、武人今川貞世(入道了俊)あり、ついで東福寺の僧正徹徹書記)また同じ流を汲みて一時盛名ありしのみ、概するに寂寥の感を免れざりしが、應仁の頃、武人東常縁なるもの、頼阿の曾孫堯孝の門に學びて、二條家の正流を得たりと稱し、始めて古今傳授を唱道す。そもく和歌の傳授といへることは、敢てこの時に始まれるにあらず、前にも説ける如く、既に鎌倉時代にありて、或はまた平安末期にありて、その萌芽は見えたるなるが、常縁がその弟子宗祇、法

師に傳ふるに當りて、特に古今傳授とは唱へけるなり、當時文學類然として衰へ、和歌の道日々に廢れて、師弟の相承も漸く失はれ、圖書も散佚しゆけば、これ等の弊を防がむが爲には、傳授などいふことも強ち無用のこととしも覺えざれど、それも程度あることにして、かれ等がこれによりて故意にその道を神秘にし、自己が糊口のたつきを得んが爲に、恣に牽強附會の辯を設けたるに至りては、斷じて許すべきにあらず、思ふにこれが結果、歌道に志すものをして容易にその門戸の窺ひ難きを想はしめ、斯道の弘通を妨げて、益、少數者間に局在するの非運を招かしめたるは、疑ふべからざる事實なりとす。かれ等が尊げに説けるところを見よ、三鳥三木など稱へて、古歌に見えたる語を捕へ來りて、たわいもなき意義を附し、以て傳授と呼び秘傳と稱ふるのみにして、苟くも和歌の大本に及びたるものありや、余輩不幸にしてこれを見ず。この和歌の傳授は宗祇より堂上家たる三條西實隆に傳はり、三人力を協せて二條家風の復興を計れり、實隆より子孫三代相傳へて、後更に武人細川幽齋に移る。戰國の世、歌道まさに絶えむとして絶えず、縷々絲の如くにして以て次の江戸時代に及ぶを得

宗祇法師

たるは、玄旨法印その功なきにあらず。宗祇は別に歌道を柴屋庵宗長及び牡丹花宵柏に傳へたり。されど渠はその二弟子と共に、短歌を以て立つものにあらずして、寧ろ連歌に有名に、その人みづからも得意とするところ、これにありてかれにあらざりしは、二條良基よりも甚しく、勅を奉じて、良基が菟玖波集について、新撰菟玖波集二十卷を編む、連歌の和歌を離れて一種特立せる文學となり、且勢力ありしこと、實にこの時に極まる。宗祇性ふかく山水の遊を好み、江湖に放浪して、旅次、箱根の山中に歿す。蓋し前の和歌の西行、後の俳諧の芭蕉と併せて、自然を心友として、その一生を羈旅に送れる、わが國の三大詩人として推重すべく、道こそ變れぬのく、その道にかけて第一位を占めたるも奇といふべし。されば摸倣を事とし、典型に泥める時勢の感化は、宗祇を以てして、いまだ全く免るゝを得ず、殊に連歌のものたる、この時に及びて、すでに遊戯の境界は離れながら、なほ即席の唱和に興を遣るに過ぎざりしかば、今日に至りてはさばかりの價値を認められず、從つて宗祇の名も他の二家に比べて、遙かに及ばざるものあるは、深く渠の爲に悲むべし。

能樂と謠曲

し、あはれ時勢は一轉の機を將來に待たざるべからざりき。室町時代の文學中最も偉觀あるは何ぞと問はば、誰か言下に謠曲なりと答へざらむ。三代將軍の世は足利家の權力が最も伸びたる時にして、また室町時代のうち、最も平和なる時なり。されば文學美術もこの頃より漸く向上の運に向ひ、第八代の時、應仁の亂は起りたれど、北山の粉壁を銀閣に暮せむとせる東山將軍の胸中には、金閣の主にも超えて、風流三昧の境地あり。いはゆる水墨畫の發達もこの間に遂げられ、香道、茶道起り、蒔繪、陶磁器なども、とりくくに新機軸を出して、いづれ面白からぬはなし。この氣運に伴ひ、義滿の時に起りて、義政の時にかけて盛なりし一種の舞曲あり、その舞は能樂にして、その曲はすなはち謠曲なり。能樂委しくは散樂の能といふ、散樂は古來多く神事に用ひられし一種の伎樂なり、義滿殊にこれを喜びて、樂師をして、田樂、曲舞等の長をも取りてこれに融和せしめ、以て今日行はるゝ能樂を起せり。これよりさき、禪宗の行はるゝこと漸く盛にして、唐山の文物、來往の僧侶によりて傳へらるゝもの少からざりしが、義滿新に明國と交を修し、彼我の外交頻繁の度を加ふるに及びて、

謠曲の作者

その影響いよく、甚しく、いつしか繪畫に宋元の水墨が浸潤し來れる如く、文學にもかの國の風は入る。謠曲もまたこの一例にして、そのわが國の古來の文學を綜合打成せるものなるは、いふを待たずといへども、また支那の傳奇雜劇いはゆる元曲に則るところ多かりしは、特筆すべきことなりとす。

こゝに明かならざるは謠曲の作者なり、あるひは觀阿彌、清次、世阿彌、元清等の名を擧ぐるものありといへども、これらの人々は曲譜をこそ定めたれ、詞藻もその手に成れりとなさむは早計に失すべし。一休、正徹等の禪僧の作として擬せらるゝもの二三あり、やゝ信ずべき説なるが如きも、これとて確證あるにはあらず。今日に傳はれる謠曲は通常、内外二百番、その外番外のものを一々數へばその數倍にも及ぶべし。これらは決して一時に成れるものにあらず、世を繼ぎ時を隔てて、徳川氏初世の頃までに漸次量を積みたりとするを以て妥當の見解とすべく、なほその後に至りても辭を修め、句を正せること少からざるべし。されど後なるは前なるを摸して概ね一樣の形式を脱せざれば、室町時代の思想はあつからその儘にして失はるゝことなく、畢竟謠曲はこの時代の所産として、その特色を存するものといふべし。

國家的觀念の缺乏

前にも述べぬ、室町幕府の世は諸國の大名に權力ありて、將軍は虎皮の威をなせも缺きたる時なりと。げに日本六十餘州あつて、獨立して、一小國の姿をなせば、國家を一體とせる社會觀はあつから存するを得ず、士民は全くこの小範圍に踞踏して、更に眼を大局に放つを忘れたりき。謠曲はこの時代觀を包含す、そのひたすら個人としての個人を描くに力めて、國民としての個人はた國家を閉却せる傾あるは、言を要せずして明かなり、佳吉の神が、わが文化の程度を窺はむとて來れる白樂天を追ひかへし、(白樂天)支那の天狗がわが國を計らむとして、却つて佛教の爲に敗れ歸れる善界類、これらはいづれも日本は神國なり、また佛法加護の國なりといへる、古來の思想を、この亂離の世にありても、國民が失ふことなかりしを示したるものなれども、社會の秩序の紊るゝと共に、かゝる國家的觀念も漸くその絆を絶たれて、行方も知らに漂ひゆかむとせるは、蔽ふべからざる事實なり。大佛供養、景清における景清はいかに、渠が敵と狙ふは頼朝一人のみ、渠が望は頼朝一人を失はば即ち足れり、それ以上に源氏を

江戸時代との比較

亡ぼして、再び平家の世を見んなどとは庶幾はざりしなり。安宅攝待にあらはれたる義経はいかに、渠にはその徒黨を糾合して更に覇を天下に稱せんの志なし、たゞ追窮せられたる鼠の如く、身を隠すべき所もがなと逃げまどふのみ。小なるかな、謡曲に現はれたる景清や、義経や。かくいはば論者あるひはいはむ、かくの如きは主材たる史的事實の興り知るところにして、これを借りて筆端に上せたる作者に罪を問はむとするは、問はむとするものの酷なるなりと。されど思へ、史實を史實として、一毫一抔もその真に遠ざからむことを恐れ、小心翼翼として忠實の描寫を試みむとするのみが、能ある詩人の本領なりや。否、謡曲が歴史に拘泥せずして想像を加へたる作物なることは、論證を待たずとも明かなることなり。従うて曲中の人物も作者の方寸に従ひて自在に左右せらるべき筈なり。下つて江戸時代の戯曲小説を見れば、一の谷嫩軍記に彌平兵衛宗清は敦盛を守りたてたり、平假名盛衰記に樋口次郎兼光は幼主を保育したり、而して共に衰へたる主家を興して、天下を治めしめむとす。されどこれらの主張はなほ薄弱にして、殊に注意すべき程に

謡曲に現はれたる古代の事件

もあらざるが、馬琴の作に至つてその傾向殊に著しく、義経に兵法を授けし鬼界ヶ島の俊寛が衷情滿腔の經綸施すに所なく、去つて琉球に風雲を捲きし八郎爲朝の將略、南朝の復興を計る新田、楠の遺孤が忠信義膽、老奸北條を罵倒せし朝比奈三郎が俠勇など、いづれか國家的觀念の存在を證するものにあらざる。翻つて謡曲を見るに、鉢の木、藤榮の類、僅かにこれに準ずべしといへども、かれは佐野源左衛門が廉潔によりて再び出世の途を得たりといへる一身の話、これは月若丸が一たび叔父に横領せられし本領を取りかへして、めてたく榮えたりといへる、大きくしても一家の事件に過ぎず。殊に鉢の木の最明寺殿が源左衛門の志を試みむとて、要もなき鎌倉の大事をいひ觸れしめて、人心の動亂を顧みざるが如きは、國家をも政治をも辨へぬ沙汰の限にして、沒常識もこれに至りて極まれりといふべし。中世には平安朝以來の舊思潮と武家の世となりて起れる新思潮とが合流す、而して文學はこの形勢を反映すとは、既に概觀の章下に述べたるところにして、謡曲にもまたこの二風潮は確然として存するなり。即ち王朝時代に材を取

物 謠曲の世話

れるものは、上臈の戀愛、和歌贈答の山來など優にやさしき物語多く、鎌倉時代以後の史實に據れるものは、ちのづから勇敢殺伐の氣に滿つ。前者の例としては、空蟬、夕顔、葵の上、匂の宮、玉葛、浮舟は源氏物語より、小鹽、井筒、杜若は伊勢物語より、姥捨、求女塚は大和物語より出て、後者の例としては、頼政、實盛、巴、七騎落、敦盛、忠度、八島などありて、平家物語、源平盛衰記に出づ。中にも屢、謠曲に引かれたるは、義經と前二書以外の事件たる曾我兄弟とにて、一は武勇一は孝行を以て、中世はいふも更なり、下りて江戸時代の文學にも頻繁に現はれて、讀者に喜ばる。太平記時代の史蹟に至りては極めて少く、僅かに壇風の一篇を見るのみ、支那の故事などもまた散見して、漢文學尊重の跡を留めたりといへども、十中の八九は、平安朝より鎌倉時代を舞臺とせるものなりといふも不可なかるべし、これらの史蹟は嚴格なる歴史的事實より生れたるものにあらず、今しも舉げたる例にも見ゆる如く、多くは文學の中に現はれたるものを材料として作爲せるものにして、かくの如きものを稱して余輩は假に謠曲の時代物と呼びとすいふまでもなく時代、世話の名稱は後世に至りて起りたるものなれど、こ

れらを外にして殘るは謠曲の世話物にして、すなはち當代の社會を反映せるものなり、中に就き最も多數を占むるは離散せる親子の再會、ついでに敵討なり。當時、世の中亂れに亂れて、政令の行はれざるや、人買と聞く名もおそろしき人鬼の都の中にさへ横行して、みめよき兒女を誘拐して錢に代へしとかや、自然居士、隅田川、櫻川、隱岐院など、みなかどはかされし子とその親との運命を寫せるものにして、かくて子を失ひし母の氣もすゝろに、そこはかとなく迷ひ出づるは、三井寺、百萬、柏崎、父の子を尋ねるは花月、丹後物狂、歌占、繼母に虐待せらるゝ子を實母の悲むは竹の雪、子の親を尋ねるは籠祇王、苅萱、土車、女の夫を探しあるくは班女、加茂物狂、水無月、祓夫の女を慕ひ求むるは舞車なり。これらの中には隅田川、苅萱の如く永へに相見る期なくして幽明處を異にすといふ悲哀に局を結ぶもあれど、多くは再會の時を得て歡語を盡すに終る。男女の中らひよりも親子の情を主とせるは、いま數へたる數の多少にても知り得べく、以て平安朝に比して、人心の推移の甚しきを見る。また臣の君を失ひて狂亂せる高野物語などもあり、望月、放下僧などは即ち父の敵を討つ例とす。

文學の下向的傾向

述歌は上流よりも主として中流に行はる、和歌もまたこの時代には武士の文學となりぬ。そもく平安朝にありてはわが國の文學は摺紳貴女の専有するところにして、敢てその以下の輩の窺ふを許さざりしが、鎌倉時代に入りて、情勢一變、僧侶のこれに携はるもの多く、且その後世の中の亂るゝにつれて、武士の立身出世は器量のみとなり、王侯將相種を問はぬ習となれば、いつまで續く公卿の地位かは、文學もやがてその優柔の手を去りて、中流以下には投じけらし。さはいへ、この時代にありては文學はいまだ全く平民的化せりといふを得ず、一面における貴族的傾向の保守はなほ盛にして、この二潮はうち混じ相争へり。和歌の道が武士の手に移りながらも、その武士たる東常縁が貴族的に古今傳授を唱へたるが如きは、この好例にして、謠曲にもまたこの傾向はありき。元來謠曲には曲論義などいひて、歌ふべきところと單に語るべきところとあり、固よりこの二要素の分れたるは、すでに平家等において然りしなるが、謠曲に至りて殊に著しき區別を生ず。歌ふべきところは希臘古代の合唱コラスに似たりともいふべきか、これには到處に古歌故事などを引用すれば、文學の素養あり、且常にこれを耳にし慣れたる輩ならては、到底その意を解しがたし、これを貴族的方面とす。語るべきところは近世の演劇の面目を存し、比較的によく俗談平語を用ひて、聞き易く解し易し、やがてこれ平民的方面なり。この二部の分裂はいふまでもなく元曲に擬して成れるものにて、これのみにては強ち室町時代の文學が貴族的と平民的との兩面を有する十分なる證左とはなしがたからむも、この謠曲が能樂として演ぜらるゝに當りて、更に相同じき傾向を有したりしは深く注意すべき事柄なり。そは古歌をよみ込み、故事を引き入れたるものくしき謠曲が多くの觀者に解し難かるべきを思つて、別に謠曲の本文を通譯俗解せる所謂間の狂言なるものをその間に挿めることすなはちこれなり。

狂言

間の狂言のほか独立せる狂言もあり、貴族的なる嚴格なる能樂に對して、狂言は平民的に、また滑稽を主とす。多くは罪もなき尖策談にて、中にも迂愚なる大名を主人公とせるもの多く、人情の弱點を捕へて、誇張過大の脚色、よく人の頤を解かしむといへども、謠曲と共に踏襲摸倣を事として千篇一律、概するに

謠曲の宗教思想

一種のフォーリス、パントマイムにして、その價值においては今日の俄と相距ること遠からず、たゞ愛すべきはその古樸にして品位を存する一點にあり。謠曲は平安朝の戀物語と鎌倉初期の武勇譚とに富む、これ上來説き盡したるところなるが、また謠曲の研究者が看過すべからざるは、これらと錯綜して佛教思想の遍滿せる一事なり。佛教思想はこの時代にありてはあらゆる文學の根柢をなす、一例として和歌を解釋する爲に古今傳授が唱へたる體用の説を見よ。歌學者はいはく、ちよそ和歌のものたる體を以て説けば表面の義の通なれど、用を以て説けば一首の歌も微妙にして甚深、佛法の眞義に徹底せずんば止まずと、一見奇異の感なき能はずといへども、古今傳授の實は眞言の灌頂に擬して出でたるものなるを思はば、この邊の消息はちのづから明なるべく、かれ等がひたすら和歌の道を以てこれもまた衆生濟度の善巧方便なりと思惟したるもの、所以なきにあらざるを知るべし。翻つて謠曲のことを思ふに、所謂鬻物戀愛を主とするもの(にまれ、修羅物武勇を主とするもの)にまれ、はた狂女物(物狂を主とするもの)にまれ、佛教の意を寓することの多きは、想像の外にあ

り、勿論、一概に佛教とはいへど、うち分けていへば神道のことも混れり、元來祭神の儀は國民本有の通習、佛教渡來して後は、やゝこれが爲に抑へられたるが如きも、なほこれと同化していまだ甚しき壓迫は被らざりしなり、かつや能樂の起原を尋ねれば、祭祀の用として神前に行はれたる古樂を基礎とせる因縁もあり、ちのづから神道はまた謠曲に缺くべからざる一要素とはなりけるなり。この神道に關するもの多分は、脇能といへるものの中に收められ、御裳濯(伊勢)、加茂、弓八幡、石清水、大社(出雲)、松尾老松、北野など、みな神々の靈驗もしくは社々の縁起を述べたり、數もまた決して少しとせず。

來世の解脱

佛教に至りては、謠曲全體がその思想を鼓吹せむが爲に作られたるにあらずやと思はるゝほどにて、猛將勇卒の亡靈が、妄執浮びもやらず、宙宇にさまよひ、賤の男子に現はれて、巡錫の途なる名僧智識に遭ひて、處の物語などし、更にありし世のさまに歸りて、歴史的事實を再演し、さて僧侶の供養を得て成佛するといへるが、十中五六を占むる筋なるが如し、平家物語の如きまたおなじく佛教の教理を含めたりといはるれど、平家にありては、たゞ人世は泡沫夢幻の如

現世の利益

きもの、修羅道の如きものといふに止まりて、畢竟作者が厭世觀を洩せるには過ぎざるに、謠曲は更に進んで、その矛盾悲惨の境界より解脱して、未來に救はれざるべからずとなすところに、大なる特色あるを見る。

將來の光明は必ずしも來世の得脱に限らず、現世の幸運を寫すところにまたこれを見る、得脱は所謂時代物に多く、幸運は所謂世話物に普通のことなり。隅田川刈萱の如きは例外にして、哀別離苦を寫せるものも、後にはめてたく再會するを以て結末とすとは前に述べたるところ、この邂逅もまた多くは神佛菩薩の冥助によるとなす、百萬は嵯峨の大念佛のをり、弱法師は天王寺にて、三井寺、高野物狂、加茂物狂はその名の如く三井寺、高野山、加茂にて、花月は清水寺にて、柏崎および土車は善光寺にて、丹後物語は切戸の文珠堂においてするが如き、みな然らざるなし、何の加護ありてともあらで、母がふと櫻川にその子を見つけたる櫻川子が飛鳥の里に田植するその母を尋ね出せる(飛鳥川)が如きは、隻手の指を折るにも足らざるべし、こゝに至りては佛敎は單に未來の冥利をのみ希ふものにあらずして、現世の幸福をも得るの手段となれりといふを得べしかく謠曲がこの世における佛敎の物質的利益を認めむとせるは一見すれば平安朝の佛敎を排して起れる新佛敎の傾向に反するが如きも、實は一時佛敎的厭世觀によりて蔽はれたる國民の思想が、こゝに至りてその固有の樂天主義と相混和し融合して、光明主義の人世觀を發露せるものに外ならざるべし。

御伽草子

謠曲より蓋し一步を後れて、戰國時代に大に行はれたる文學に、御伽草子、舞の本、誹諧の三種あり、御伽草子は平易なる短篇小説なり、その主人公としては、小町草子、和泉式部などに平安朝の人物を見、小敦盛、横笛草子などに源平時代の人物を見、木幡狐のせざる草子、猫の草子などに動物類の人格化せるものを見る。なかんづく名あるは文正の草子、鉢かづきの草子の二篇にして、前者は常陸の國鹽燒の里に住みける文正といへる賤の男の鹿島大明神に祈りてまうけたる二人の娘を骨子とし、この娘がやんどとなき人の妻となり、父文正も宰相の位に上りて、その家富み榮えけりといふに一篇を結び、後者は、鉢を頭にかづける片輪の女の繼母に悪まれて、世をあぢきなく過し、が、遂にその鉢の碎け

舞の本

おちて、金銀財寶あまたの中よりあふれ出て、宰相なる人に嫁ぎてめでたく暮しけりといふを梗概とす。總じて御伽草子の思想は、平安朝の形式を踏襲して、毫も清新の趣を認めがたきもののみなるが、その甚しく通俗化せると佛教の息味を帯びたるとは、殊に注意を要することなるべし。鉢かづきの結末に、これたゞ長谷観世音の御利生と聞えける、今に至るまで観音を信じ申せば、あらはに御利生ありと申し傳へはんべりける。この物語をさく人は常に観音の名號を十遍づゝ御唱へあるべきものなり、南無大慈大悲観世音菩薩といへるを讀みては、またいかに佛教の影響の著しきかを知るに足らむ。

舞の本は今日殆どその跡を絶ちたる幸若舞の舞曲なり、いま四十餘種を存す。幸若舞の權輿は詳かならざれども、その義政の時すでに行はれたるは事實なるべく、されど謠曲創作の年代よりは後れて、概するに體裁文章ともに謠曲よりもやゝ近代の風を帯ぶ、主要の題目はこゝにもまた義經と曾我兄弟とにして、これならぬも神躍り魂飛び勇壯の事蹟を第一とし、辨猛殺伐、針小棒大筆を極めて誇張の言を構へたれば、今日の讀者を以て見れば、かたはらいたきこと

俳諧

多し思ふに謠曲はその品位甚だ高く、中流以上に行はれたるものにして、舞の本はその趣味やゝ低く、多くは中流以下に喜ばれたるものというて可なり。

俳諧は山崎宗鑑、荒木川守武等が始めたものと傳ふ。宗鑑はやゝ宗祇に後れて出てし人、また連歌に志しゝかども、この道はすでに宗祇に至りて絶巔に達し、後進の士の施すに餘地なきを思ひて、轉じて別に滑稽洒落なる新生面を開かむとし、守武もこれに合してその發達を助けたり。所謂俳諧の連歌略して俳諧とのみいふはこの時に起り、また別に連歌の附合を離れて、一句をよみする發句も行はれぬ。蓋し連歌の起るや、その初は滑稽を主とし、一種の文學的遊戯としてこれを見て、卑しき言語をも、俗なる趣味をも、何等の束縛もなく、自由自在に用ひたるところに特色は存せしなるが、年を経るに従ひて、漸くまた眞面目のものとなり、法格も備はり、用辭思想の選擇も嚴かになりしかば、これより更に俳諧は廢れ、嘗て連歌が和歌に對して試みたるが如くに、また連歌と拮抗對立するに至りしなり。俳諧の起るや、それかくの如し、而してよく習慣の爲に左右せられず、規則の爲に箝制せられずして、一時の座輿を造るに成功した

平民文學の曙光

りしかど、この時代には、なほ言語の上に滑稽を弄するに止まりて、いまだ十分なる發達を見ず、それが戰國の頃起り來れる浮瑠璃と共に、わが文學史を飾るは、更に江戸時代を待たざるべからず、従つてこゝにはたゞ發生の徑路を説くに止めて、その餘はこれを後の全盛期に譲らむとす。

以上述ぶるところを綜合すれば、この時代に入りて文學の傾向は正しく一轉機を示せりといふを得べし、すなはち保守的、貴族的なる境を出でて、通俗的となり平民的となる。既に前代にありても多少この傾向は見るべく、戰記類もまた然りきといへども、この時代に至りてこの趨勢は殊に著しくなり、進んで江戸時代に入り、以てその文華を煥發せしむ、こゝに注意すべきはこの平民文學發達の因縁にして、こゝは固より曩に略説せる個人的觀念の傾向と相關聯す、この時代の個人的觀念は、實は社會の進化に伴へるものにあらず、平民の自覺に伴へる積極的所依を有せず、唯世の中の亂るゝに従ひて、一方に社會的國家的觀念の銷磨すると共に、一方に學問の道廢れて貴族的文學を味ふだけの能力なきに至れる結果として、訓蒙的平民的なる文學は起れるなり、即ち平民的文

學の發生はいまだ以て平民思想の進歩に依れるものと稱すべからず、さればこれを以て直に文藝の進歩といはむは早計の甚しきものにして、實はその退歩を示すものに外ならず、思想の自由なれば、徒らに古代文學を憧憬し、さりとて趣味の素養なければ、古代文學の妙趣も見出すに由なく、ひたすら形式の摸擬にのみ趁る。室町時代の特産と稱せらるる謠曲の結構の、前後因襲一を讀めば他は推すに難からざるも、これが爲にして、能樂としては一種幽遠の趣を具へて、ひとかどの見所はありながら、文學としてはたゞ手際よく古來の美辭麗句を補綴したりといへる外に、何等大なる自發的特色なきは、いかに悲しき現象ぞや、御伽草子の詞藻の如きも、また飽くまで鑄型の中に誇大の辭句を弄して、固陋の弊濟ふべからず、舞の本の單調なるも、またこれに同じ、要するに江戸時代の曙光はこの時までに見はれたれども、その本體たる平民文學が眞の平民的思想を發揮したりしは、なほ遙かに後の事なり。

室町時代の末期は所謂戰國の時代なり、干戈動くこと頻にして、文學は絶滅の境に瀕す。幽齋歿せば古今傳授の絶えむことを恐れて、丹後田邊の城に勅使を

戰國末世

立てて、その圃を解かしめたまひし一事によりて考ふるも和歌の道推しては文學にその人の乏しかりしを知るに足る。この時に當りて學問文藝に指を染め、以て僅かにその命脈を次の時代に傳へたるは、京師の五山もしくはその他の大寺の僧侶にして、苟くも文字を修せむとする者は、就いてこれに學ばざるべからず、後世の寺子屋の稱もこれらの因縁より起れるなり。あゝ國亂れて麻の如く、都も野邊の夕雲雀、落つるを見ては涙ぞ流る、しかすがに大名の威權あるきは、の城下は賑へり、細川氏、三好氏の堺、大内氏の山口、北條氏の小田原の如きはすなはちその尤なるものにして、京都の文藝の士にして、一時これらの地に難を避けたるものも少からざりき。文運微々たることかくの如くして、わが戰國時代は過ぎて行く。

江戸時代

第一章 この時代の概観

文學普及

江戸時代は明治の世を外にしては文物の最も發達せる時なり、その文學は以て王朝の盛時に比すべきのみならず、もしその行はれたる範圍の廣狹を以て論ずれば、王朝果して何物ぞ。江戸時代の大序は元和偃武なり、元和偃武は戰國の黒幕の落ちたる舞臺にして、正面の主人公は家康なり。蓋し信長、秀吉は大車輪に事を行へり、しかも多く勞して少く收め、めでたき大團圓を見ずして逝けりしが、家康は隱忍して時の至るを待ち、遂に先進の二人が理想を實現したり。亂れたる世は馬上にしてをさむべし、治まりたる世ををさむるには、文によるべしとは、その大主義にして、時世のかれを去りてこれに向ふや、すなはち大に文事を奨励す、爾後の將軍みなその志を繼げば、幾ばくもなくして、教育都鄙となく、弘通して、江戸には湯島の聖堂あり、諸藩には藩學あり、庶民の爲には到る

儒教の勢力

庵また佛道より儒道に轉じたるものなりと稱せらる。これら當時の儒者は自己の勢力を張らむが爲に、口を極めて當の敵たる緇衣の徒を罵り、以て從來佛教が扶植し來れる勢力を覆さむと試みたり。

神道の如きも、山來本地垂迹の説によりて佛道に混化せられ、甚しきは神として佛に隸屬せる觀あるものなきにあらず、唯一神道の如きは神道の獨立を唱へたりといへども、なほその道を説くに當りて佛教の教理に借るところ多かりしなり。然るにこの時代に至りて度會延佳の神勢神道、吉川惟足の視吾道、山崎闇齋の垂加神道など起りて、神道を佛道の範疇より脱却せしむると共に、佛教の庭内にこれを拉し來り、宋儒の見によりて、陰陽理氣の説を融和合一す。儒教の文明指導者としての勢力、國民思想の先達としての勢力の佛教を越えて遙かに上にありしは概ねこの類にして、文學の如きもかの國の文學たる漢詩、漢文が牛耳を執れるは、かゝる時代の現象としてさもあるべきことといふべく、文學批判の見地はた以前は佛教の厭世因果説の上へのみ置かれしが、こゝに至りて全く移りて儒教の修身齊家説を土臺とせるも敢て慚むに足らざる

佛教の弘通

なり。

幕府はいふも更なり、諸藩の藩學いづれも儒教を以て學問の根本とし、道德修養の憲法とするの世なれば、さらば佛教は全くその勢力を失ひたりしかといふに、決して然らず、民間一般に盛なるは敢て前代に渝らざりしなり。名僧碩徳の輩出したりしは固より佛教振肅の主因、明僧隱元が新に黃檗の一宗を傳來したる、運徹は眞言鳳潭は華嚴の振作者、白隱は禪門中興の祖と仰がれたるが如きを思へ、されどその外にまた佛教をして前日の盛を維持せしめたる一因あり、よりて以て佛教は泰山の安きに據るを得たり、即ち幕府が耶蘇教を禁せんが爲に取れる政策にして、その制によれば國民は上下を擧りて、異教徒にあらざるを表明せむ爲に、いづれの宗派にもあれ、佛教信者たることを要したるなり、すなはちこゝに一家あれば必ず一家の檀那寺を定めざるべからず、檀那寺はまた必ずこの檀家に對して寺受證文を交附せざるべからずして、八代將軍の治世までは、宗門改帳はやがて戸籍簿たるの實を具へぬ、かゝれば宗教として盛なるは今もこの佛教に及ぶものなく、神道の實力に至りてはこれに較

武士道

ぶべくもあらざるなり。されば當時の中流以下に行はれたる文學のうち、なほ因果應報、宿命の説を骨子としたるもの多かりし所以、これによりてまた釋然として明かなるべし。

すでに國民の心中には二千年來の歴史を經たる儒佛二教併存して抜くべからず、されどこれは到底外來の思想にして、いまだ全くわが固有の精神と合一しがたし、かくてかれをこれに融和打成して渾然たる一個の美玉をなす、いはゆる武士道これなり。そも、武士道の根本精神たるや、國初このかた深く國民の胸臆に包藏して失はざるもの、戰亂多端の武家時代に際して漸くその形を現はし、が、その内容と形式とを兼備して、利弊ふたつながら高調に達せるは、この江戸時代を措いて何れにか求めむ、何をか武士道といふ、一言にして盡せば、内に膽を練り氣を養ひて、外、弓馬、刀劍乃至兵法に達するなり。刀劍は武士の魂なりとて行住身邊を離さず、時に殺伐に渉るもまた已むを得ざるに出づ。忠孝はまた武士道の要件なり、國の爲、君の爲には千鈞の命を抛ちて、鴻毛の輕きに比し、死節を全くするは、かれ等が庶幾に忘れざるところ、然るの一言、金銀より

りも堅うして、武士に表裏反覆の行なしと誇る、こゝにおいてか武士が個人間の信用は甚だ嚴なるに至りたれども、また一方を見れば、當時國內諸藩に分裂して、天下國家の觀念に乏しければ、これらの觀念もいまだ大なる統一的思想を形成するに至らず、同藩の中にもまた上下階級の差別明にして、平等の思想を缺けば、公德心の甚だ高からぬ程度にありしも惜むべし。その他廉潔克己等も武士が特に重んずべき道の中に數へらる、金錢を見ること塵埃の如く、私慾の爲に自己の意志を枉ぐるは、許しがたき卑劣の行爲として、社會の制裁は忽ちその頭上に墜ち來れり。

心學

およそかくの如きはこの時代における武士道の綱領なり、當時社會に濶歩して國民道徳の指導者を以て任じたる武士が必須の徳なり、藝なり、なほこれと同時にその地位低しとして輕んぜられ従つて徳義の制裁も、武士に比べては、しかく嚴しからざりし町人の間にも、おのづから發達せる道徳律の存するを見たり、而してそが一個の教理として現はれしを、この時代の中葉に起りし石川梅巖の心學とす、心學は、武士道がわが國固有の忠孝尚武の精神を基礎とし、

折衷するに儒佛二教の特色を以てして成れるが如く、また神儒佛の三道を混じて生れたり。唯その異なるは、これは忠義を第一義として説かずして、孝行を主とし、かれにありて口にするをだに憚られたる金銀財寶の重んずべきを諄々として説きたる點にあり。すでにこの武士道とその基くところを一にし、またその影響をも受けたる心學が、嚴格なる教理において、虚偽騙詐等の不徳を警めたるや明かなりといへども、普通には町人は武士とおのづから事情を異にするところもあり、空辭義、懸賣は商買の方便なりと許し、その結果は武士が金錢の輕侮と相合して、取引上の不信用となり、餘弊引いて今日に及んで未だ抜くべからず。

道德主義

かくの如き時代に養はれたる文學の平安朝と痛くその性質を異にするべきは、いはでものことなり。平安朝文學の主動者は感情なりしが、江戸時代の文學に至りては意志の活動を中心となす、故にかれには普通の事象たりし男女の戀愛も、これには主題として寫すこと稀なり。蓋しこの時代において、人性自然の要求に従ひて男女が相愛の情を恣にするが如きは、節操なく、克己心なき儒

弱の所業として斥けられ、殊に武士が女性に愛着するが如きは、刀の手前も耻かしき振舞とし、戯曲小説の主人公としてもかゝる輩は同情を寄する所以を見ずとせられたればなり。されば現はれ来る主人公てふ主人公は、いづれも道念堅固にして、性慾に對して降服せず、斷々平として行くべき道を行くを常とす。換言すればこの時代の文學は感情を寫すものとはせられずして、寧ろ勸懲主義の道德を教へて、俚耳に入り易からしむる善巧方便として用ひられたるなり。また武者修行、敵討などの勇壯なる事柄は題材として最も多く、各篇また毎曲到るところ殺伐の氣に滿つ、讀むもの敢て怪まず、却つて手を舉げてこれを歓迎したりしは、そのあくまで平安朝と趣を異にし、好個の對照をなすところなり。

四段の階級

江戸時代の文學を論ずるに當りて、儒佛二教の影響を受けたる國民の思想を述べたるのみにては、いまだ以て盡せりといふを得ず。すなはち更に進んでその社會制度の如何に及ばむ、そもくわが國氏によりて族を分ち、上下の別畫然として存したりしは、太古以來のことにして、平安朝しかり、鎌倉時代また然

り、然るに一朝戦國の世となるに及びて、この階級制度は碎けて、實力の社會となり、下流の士も器量によりては侯伯の位に上り、臣僕時に主君の地を篡奪して怪まず、こゝにおいてか徳川幕府の政を始むるや、子孫後世の爲に、その家を安きに置くの道は、まづこの戦亂時代の風習を掃蕩して、社會の秩序を挽回し、嚴重に永遠にこれを持續せしむるに如かずとなし、さらに階級の制を正しくして、上下その分に居らしめ、一步を外に出てむとするものあらば、社會をしておのづからこれを制御せしむべき方針を取る、いはゆる士農工商の別はかくして生じぬ、この四級の稱も固よりさることながら、別にこれを公卿、武士、町人、百姓と分たむは、更に妙ならずや、さらば前の區別に見えたる商と工とは、ひとつ町人のうちに攝せらるゝこと、勿論なり、この四級の中に就きて、公卿は京都に局在せる極小の階級なり、平安朝の古にありては、一國文化の源泉として、勢また並ぶものなかりしが、鎌倉幕府の創立以來、位のみは依然として高きに居れども、知識も生活もやう／＼下向し、この時代に至りては、むしろ迂愚固陋なるものの標本として、一般社會には何等の交渉も勢力もなくして過ぐる百姓

は如何にといふに、交通極めて不便の世、都會の文明は地方に傳はらず、従つて平和なる田舎にのみ閑棲して、眼に一丁字なきこの種の民の、いかでか學問とやらん、文藝の歴史とやらんに關知せむ、四級のうち、これに關知するところ多かりしは、武士と町人となり、わけても武士こそは人の中なる人と謠はれ、江戸の文化はこれを中心として湧き出てたり。

階級の制厳しく立ちて、町人の子は生れながらにして算盤はじく運命を持ち、武士は生涯二本指と株がきまれば、これに相應しき差別はまた文藝嗜好の上にも現はれ、中流以上に行はるゝものと、それより下ざまなるとは、おのづから相分れて互に犯すことなかりき、士分の家に彈ぜらるゝは、琴、町人の門に響くは、三味線、かれに烏鷲の懸引あれば、これに飛車角の魂膽あり、一方の樂むは、土佐狩野の畫、一方の翫ぶは、吾妻錦繪、能狂言と淨瑠璃芝居ともまた同じ相違を示す、もしそれ文學に至りては、漢詩、和歌は前者の專有にして、狂歌、俳諧、戯曲、小説などは後者の領分ならずや、かく分れたる雙方の長短を比較するに、上流は何事によらず古法を株守して、清新の風に乏しく、下流はこれに反して歴史と

文藝におけ
る上下の離
隔

家系の尊重

習慣とを蔑如し、恣に新様をも試み得て、發達頗る見るべしといへども、その對象たる讀者にして、すでに向上の一路を缺けば、趣味の陋劣はまた免れがたき缺點なりき。あゝこの上流と下流ともしよく混和抱合せしならば、その結果は更に一段の光彩を添へたるべきに、不幸にして氷炭相容れず、一旦發展の途に入りし文藝をして空しく一所に停滯せしめしは、惜みてもなほ餘あり。

階級の制度はまた延いて系統の重んずべきを知らしむ、かばかり犯しがたき貴賤上下の區別も、詮じつむれば家名の尊重なり。生れて武家となるも素町人となるも、たゞこれ系圖一卷がせさする業、一代の學識も移すべきにあらず、一身の徳望も更ふべき道を知らず、因襲久しうして世を擧つてこれに甘んず、甘んずるを得るものは幸にして、自己の伎倆を頼んで、家格の外の出世を望むものは禍なるかな、身を倒さまに血に啼くとも、破格の立身のゆるさるべき社會にはあらざりけり。されば人々いづれも家族の分子として、個人の權利は認められず、吾は自己の吾にあらずして、一家の吾、氏神、家の檀那寺とはいへど、吾の宗教とはいはず、わが身とわが家との間に利害の衝突を生じたる時は、吾を没

消極的態度

して家を立てざるべからず、養子といひ、勘當といふ二つの反對せる習慣も、一家系の斷絶に備ふる豫防策、階級分れて家系は重く、家系重くして、職業世襲の風は成る、これ自然の勢なり。武士の家に生れては、父と同じく弓矢の道を練り、町人は多少の自由を有したれど、なほ醫者の子は藥味箆筒の前に坐る習にして、祖先嫡々の職業をしも變へて、別に野心を貯ふるものあらば、遠からずして破滅の日は到るべしと思へり。従うて上下の風俗、何れもその身分を示して混ぜず、亂れず、竹庵老の慈姑頭、新五左の淺黄裏、片はづしは御殿女中の外はななく、俱利加羅紋の文身は江戸、子の鳶の者なり。

この職業世襲の風と諸般の道に師資相承を貴ぶとは、またちのづから相伴ふ、生みの父母は身體の親、藝術の師匠は才能の親、かれの血統を重んずるが如く、これが系統をも重んじ、弟子七尺去つて師の影を踏まず、師の教ふるところは斯道の骨髓、秘事口傳の沙汰喧ましく、手本の神聖を瀆すものは、豫め破門の辱を期したりしなり。ちよそかくの如きは、江戸時代に入りて始めて養はれたる習慣にはあらず、由來するところ頗る遠しといへども、徳川幕府が消極政略を

傳承の弊

行ふに至りて、殊に甚しきを加へたるはいふまでもなからむ。いつの世とて須臾も國民の念頭を去らざるは向上の精神なり、この趨勢をして擅に増長せしめんか、秩序の破壊は早晩免るべからざる運命なるべし。幕府は早くもそのおのれに不利なるを見たり、鎖港の制もこれが爲すべし。耳なれぬ説を唱へ、見なれぬ物を作ることを禁じたるも、これが爲なり。これのみにあらず、季節以外の野菜菓物類を市場に出すべからず、身分に従ひて着る物は一尺何分以下に限るべしなどの瑣事をさへ、法令の正文に載せて、實行を強ひ、以て天下萬衆をして小仙窟裡の少康に安んぜしめ、併せて幕府千年の基礎を堅うせむとしたり。幕府の消極的方針は、果然、國民をして、よく勤儉質素に、各自天命に安んずるの風を養はしむるに効果ありき。されどまた當時の社會を驅りて、因循固陋に流れしめ、著しく事業の進歩を萎靡せしめたるに至りては、その罪決して輕からず、わけても文藝の道において然るものあり。それ藝術の天才は個人的なり、個人的特性の滅却破壊を以て一代の方針とせる時代にありて、いかてか天才の出現を待たむ。江戸時代の文學に携はるものは、他の機械的諸藝に従事するも

普遍美の描寫

御家騒動

のと共に、師資相承す、父子傳統す、後進眼を開いて人生の實相を見むとすれば、粉本堆く遮り、典型算を亂して横はる。人間の墳塋は一年は一年より蒼然たる古色を添ふ、かれらが粉本と典型とは一代は一代より現實を遠ざかりて、幻妖奇怪の境に入れり。かくの如く因襲隨逐、年を追うて自然と離隔せる作物を讀破して眞意を誤らざるものは、纔かに泉下に眠るものの誰なるかを知りて後に碑銘を判ずる徒のみ、知らざるものは則ち盲目大衆を探るの歎を禁ぜざると共に、やがては唾棄して顧みざらむとす。時代が創意を没却して、摸倣を強ひたりし弊もまた甚しいかな。

かくの如く社會は家系を重んじて、個人を無視す、世人が自然となく、人生となく、一に普遍美を主として、個性美に冷淡なりしは、また必然の結果にして、この現象を反映したる江戸時代の文學は、世にあり得べしとも思はれざる道德完全の摸本的男女を空想し來りて主人公となし、肉あり血ある個人を描くを忘れたるき。

進んで文學に用ひられたる題材を見れば、家系尊重の大事件はいはゆる御家

時勢の概括

騒動に如くはなし、御家の重寶紛失し、その保管者がこれを尋ねて東奔西走得ざれば、則ち自殺したりといふは、殊に注目し、何故に今日のわれより見ては、むしろ些細なるが如き器什を秘藏して、傳家の重寶となし、一身を賭しても、これが保存に熱中したりしか、他なし、傳家の重寶はやがて祖先が功名手柄の標象なればなり。それが器什としての價値の如きは、さもあらばあれ、たゞそれ祖先の記念すべき遺物なるが爲に、これを永遠に傳ふるは、子々孫々の忽諾に附すべからざる義務にして、父祖の名と一家の名とを不朽に遺すと遺さざるとは、一にかゝりて後継者がこの重寶を保存するとせざるとにあり、換言すれば、名器の亡失は、とりもなほさず家名の斷絶なりと思惟せられたればなり。』要するにこの時代の文學は、種々の原因の促すありて、發達の上よりいふも、普及の度よりいふも、洵に前代未聞の盛を致せり。されど一たび戰國の世に遇ひて、壞れむとせし階級の制も、幕府の確立と共に更に成り、文學も貴賤全く趣を異にして、上流なるは保守的にして固陋に陥り、下流なるは進歩的なれど趣味の野鄙を免れず、一般に時勢と相應じて消極的に流れ、系統の傳承に執着して、

時代の區劃

個人の描寫に想到せず、勸善懲惡主義の目的に慥はしめむと力めて、終に文學の高尙なる眞意義に觸るゝことなかりしは、わが國文學の爲に忘るべからざる恨事といふべし。

この時代を分ちて、また四期とせむ。

- 一、啓蒙時代 (一二六〇—二三四〇) 八十年間
- 二、京坂の盛運 (二三四〇—二四〇〇) 六十年間
- 三、文運東遷 (二四〇〇—二四五〇) 五十年間
- 四、江戸の盛運 (二四五〇—二五二八) 七十八年間

この四期のうち、最も特色あるは、京坂の盛運期すなはち所謂元祿時代と江戸の盛運期すなはち所謂文化文政時代(または大御所様時代)とにして、啓蒙時代は、むしろ京坂盛運前期とも稱すべくして、させる光彩もなく、文運東遷時代は、一部は前の元祿時代に接し、一部は後の文化文政時代に屬して、江戸盛運前期ともいふべく、ともに以て一期を劃するに足るの要素と價値とに乏しといへども、暫く如上の區劃を設けて、了解記憶に便するのみ。

第二章 啓蒙時代

古書の蒐集

戦國以來、學問文藝の道衰へて、典籍の散逸せること驚くに堪へたり。應仁の亂に、博學を以て名ありし一條兼良は家を後にして、難を都の外に避く、その桃華坊の文庫は、邸内にありて、辛うじて兵燹の禍を免れしかど、七百餘合の筥に滿ちたりし藏書は、武士の狼藉にあひて、とり散らされ、誰ひとり拾はむとするものもなく、空しく路上に横はりしとぞ。そののち兵亂、織豊時代を通じて荒び、流民轉蓬、國狀の悲惨この時に過ぎたるはあらず。家康覇權を握りて、干戈こゝに動かず、すなはち大に文教を興すに意あり。可いかな、渠は焦眉の急務として、銳意遺書の蒐集に着手したり。上は内裏仙洞より、下は武士町民の間に至るまで、搜索探求及ばざるなく、當時褊狹なる公卿が家寶として、篋底深く秘めたりし書類まで、嚴令の下に呈出せしむ。これらは悉く五山の僧侶に附して筆寫せしめ、必要あるものは更にこれを版本となす。

印刷の進歩

そも、わが國における印刷の最古の遺物と見るべきものは、奈良朝の古天平寶字八年、一百万塔を作りてその中に藏めたる陀羅尼なり。その後平安朝にも經文摺寫のことなきにあらざりしが、固より屢行はれたりとは見えず。鎌倉時代以來や、進歩の度を示し、法然上人の撰擇集、正平版の論語などを古きものとし、室町時代に及びては、所謂五山版の經文、詩文集、語錄など多く現はれ、地方にしては、周防の大内氏、上杉氏の臣直江氏等また古書を翻刻せることありき。されどこれらもなほ兵馬倥傯の際における偷閑の餘事にして、勘合校定するところ、いまだ五車を充すに及ばざりしに、家康がこたびの擧こそは、徹々たりし出版事業に一大刷新を行へるものにして、印刷の歴史の上に忘るべからざる一轉機を呼びたるなり。かくして行はれたる印刷には、まづ活字を試用す。蓋し文祿征韓の役に傳へたるかの國の法に倣ひて作れるもの、それも時期いまだ早かりけむ。銅製なるは幾ばくもなくして廢れ、木製なるはその後や、久しく行はれたれど、遂にまた整版に壓倒せられ了んぬ。活字整版の消長はともあれ、爾來印刷は年毎に盛に、寛永の頃には早く民間にさへ弘布して、庭訓節用

の類より、啓蒙訓誨の書など刊行せらるゝもの、紙々として相繼ぐ出版の進歩は知識の普及を促し、知識の普及はまた出版術の發達を早からしむ、かくて暗黒裡に餘命を保ちし戰國の文化は江戸時代の朝暉を迎ふ、この時期を名づけて啓蒙時代とはいふなり。

この時代の儒學は藤原惺窩が朱熹の學を奉じて名を擧げたるに起れり。惺窩の弟子にして鐵中の錚々たるものを林羅山とす。羅山、惺窩の推薦によりて家康に事へ、政治に參與して畫策するところ少からず、子孫相尋いて幕府の儒官たり。當時、佛教なほ盛にして、儒學は文化の中心たること難かりければ、惺窩、羅山は力を極めて彼が勢力を打破せんとす。元來、宋儒の學は理論に偏して實行に疎き傾ありしものなるが、をりふし幕府草創の際を去ること遠からず、新法の制定は急中の急務なりければ、林家の如きは必要に迫られて、古來の制度を考覈し、諸家の傳記を研究す。加ふるに世は戰亂の後を承けて、學問普及せず、人民高遠の學說に耳を傾くるに堪へざりしかば、在官の儒家も民間の學者も故らに平明なる實際的倫理を説き、易きによりて直ちに世を導き社會を教へむ。

儒學の訓蒙
的、實際的
傾向

欠

MISSING

恨之助と薄雪

たるもの、この時代の小説といふべきものは大抵この種類のものなり。されどこの時代にも純粹なる小説なきにあらず、そのうちにも最も有名なるものを探りて二篇を得、恨之助草子と薄雪物語とこれなり。恨之助は慶長頃の作と思はれて、この時代の作物にては最も古きものの一なるべく、男にては葛の恨之助、女にては雪の前を主人公としたる例の事ふりにたる戀愛小説なり。行文ことさらに絢爛なれど、印象極めて明確ならず、室町時代における釘鉋補綴の跡を追うて、何等の特色もなく、たゞ追腹切つたる記事などに時代の風尚をあらはすのみ、薄雪物語は寛永の頃世に出て、園部左衛門と薄雪姫との情事を寫し、姫死してのち左衛門は出家してその菩提を弔ふといふに終る、一篇の徑路、甚だ恨之助に似たり、記述の體裁は男女往復の書簡に擬したるものにして、蓋し堀河院の艶詞に源を發せるものなるべく、その時好に投ずることいかばかり大なりけむ、新薄雪物語、錦木、小夜衣など、その後相續いて出てこれに倣ふ、されど薄雪も結構の平板なると共に、文章また情熱の迸れるなく、殊にさらでもあるべき和漢故事の引用の雜多なるは、いよ／＼讀むものをしてこ

ちたぐ厭はしき悪感を加へしむるのみ。この外に、安樂庵策傳が著にして、噺の本の鼻祖と稱せらるゝ醒睡笑あり、滑稽の古雅にして簡淨なるは遙かに後世の輕口に優り、これに次いで昨日は今日の物語仕方、噺、會呂利狂歌、噺、一休、噺など風を望んで世に現はる。支那の剪燈新話の類に倣へりと覺しくて、珍事異譚を寫せる淺井了意の御伽婢子、狗張子等またこの頃に出づ。島原の役以前は、禁制に遇ひながらも、耶蘇教の密かに行はるゝありて、外國語を學ぶ者もありけらし、伊曾保物語の翻譯さへ成りて、僅かに萌芽に過ぎずとはいへ、やうく西洋文學の輸入せられしことをも忘るべからず。

なほ逸すべからざるは淨瑠璃のことなり。淨瑠璃は室町時代に起りて、今、こと新しく始まれるにあらずといへども、この時代に至りて三味線に合せて語るゝやうになり、同時に傀儡を伴ひ舞はしむるやうになれるを注意すべし、三味線はもと支那もしくは琉球より傳はれるもの、永祿の頃早くわが國に行はれたりといへば、その頃よりこの時代の初に至りて、すでに四五十年を経たり、かくて淨瑠璃のこの樂器と併せ用ひらるゝに及びて、共に一時にもてはやさ

淨瑠璃

歌舞妓

れ、いつしか流派をさへ分つやうになりぬ。されどこの文學は思想も詞句もなほさせる新意もなく、むしろその源流たる謠曲、幸若の舞曲または當時盛に行はれたる説教祭文等に倣ひて、或は男女の戀愛或は勇士の功業などを仕組み、敢て自らその陳腐をも覺らず、中にも金平節の如きは、折ふし戰亂の世を距ること遠からず、人心おのづから殺伐の氣象あるに乗じて、力めて勇壯活潑なるものを脚色し、大夫は鐵棒を以て拍子を取り、意氣軒昂するところに至れば、われを忘れて岩をも木偶の首をもち破りぬといふ。その趣向をいへば、主人公は坂田金時の子金平、渡邊綱の子武綱など、いづれも義經、辨慶にもまされる剛の者にして、猛獸山賊をとりひしぎ、また地獄廻をなして閻魔惡鬼をも苦む。すべて肩胛つゝ、ぱり口尖らかし、誇張に誇張するを以てその特色とせり。淨瑠璃は地の文と對話とがうち混じたるより見ても、謠曲の系統を引けるものなること明かにして、對話のみを以て成れる歌舞妓と異なること勿論なり。歌舞妓芝居はその發達淨瑠璃とは交渉なく、慶長の頃、出雲のお國といふ女子によりて、初められ、佛教鼓吹の爲に行はれし舞謠と狂言とを折衷して成れる

ものなるべし。とにかく淨瑠璃も歌舞妓もこの時代にあってはなほ極めて幼稚の域にあり、いまだ眼識ある人々の觀賞に値するまでには進歩せざりしなり。

第三章 京坂の盛運

前代の経過

文學は社會の變遷と共に推移して的確にその状態を反映す、室町時代の末に當りて文學に現はれたる最大現象は平民の勃興といへる新事實なりしが、それも積極的に自覺の力によりて成りたるにはあらずして、むしろ社會組織の瓦解と共に、おのづから窮屈なる階級の束縛より解放せられて然りしものなることは、すでに論じたる如くなり。理由はともかくも干戈相争うて息づく暇もなかりし世の漸くあらぬ昔と過ぐれば、平民の將來は益々希望あり、文學もまたその手によりて新方面の開拓に從事せられむとす。されど幕府創立の當初にありては、自然の順序として、生活状態の改善すなはち物質的文化的發達も

支那との關係

しくは一般知識の弘通に力を盡して、いまだ文藝の上に深く意を注ぐの餘裕を得ず、いはゆる啓蒙時代はかくて文學史上特筆すべきものもなく疾くうち過ぎにけり。

幕府初政の頃最も尊重せられたるは儒學なるが、ざりとして平安朝の弘仁前後におけるが如く、これが爲に自家を忘却して、斯學の本國なる支那に心醉することはあざりき、それもまた理由なきにあらず、當時かの國は明末に際して、制度文物あさましくも廢れたる時なり、僧隱元が家綱の招聘に應じて來朝せるも、或は本國の擾亂を避けて、天下太平なるわが東海の君子國に就かむと志したるにあらずや、朱舜水が水戸公に仕へたるに至りては、明朝の遺臣として、その没落を見るに忍びずして來朝したるものなること、明白なり。かくてはこれ等歸化人の本國の文化につきて説くところ、いかに美しからむとも、聞くものの全然これを師表と仰ぐに吝かなりしは、また然らざるを得ざるところにして、彼此對照、漸く自己に對する信念を堅うせるは、なほ道眞の奏請によりて遣唐使を止めたる後の平安人士が情勢に似て、しかも一層強烈なるものあり

明治との比較

しならむ。

當時の形勢は蓋しまた大に明治の初年と同じきものあり、たゞ明治初年の社會は、すでに江戸三百年の雨露にはぐくまれて、一躍急速の發達に堪ふべき素地を養ひたれども、幕初時代は然らず、久しく戰亂蒙昧の惡時代に悩まされて、至るところ礪确荒蕪、知識の犁鋤は草莽を闢くにだになほ多年の努力を要したり、またこの時代とても西洋との交通なきにあらざりしが、その文明の滔々奔注し來りて、國民を壓迫し刺戟したること、到底維新以後に及ばず、從つて社會進歩の歩度も、かれにありてはこれの如くいまだ俄かに着々として進歩する能はざりしのみ。

五代將軍

さもあらばあれ、今や泰平うち續くこと八十年、嘗ては一椀の稗、一掬の水に飢渴を凌ぎたる民も、いつまでかこの悲惨の生活をつゞけて止まむ。衣食足りて禮節を知るならひ、かれ等が慾望の早く精神的娛樂を求むるに至りしは、自然の勢といふべし。江戸時代の門戸が家康の手によりて開かれたる如く、江戸文學もまたこの人によりてその緒に就けるなるが、五代將軍綱吉に至りて殊に

意をこゝに用ひ、管に有司をして獎勵の道を誤らざらしめむと期したるのみならず、またみづから諸侯を招いて經書を講ずること屢なりき。上に威ある時、その好むところは、下において益甚し、將軍學を嗜むこと三度の食事の如くにして、諸侯みなこれに倣へば、四民また翕然としてこれに向ふこと草の風に靡くが如く、文化日に起り、學藝月に盛なり、これを學問の上より見たるわが元祿時代の大概となす。

元祿の盛運

江戸幕府が施政の方針はあくまで消極的なり、消極的政策の特色は壓制なり、束縛なり、壓制と束縛とはこれに慣るゝ國民をして萎靡沈滞せしめずんば止まず。江戸時代を通じて、社會は未曾有の泰平を享樂しつゝも、なほこれらの障礙の爲に個人的發展を阻害せられたる傾向あり、個人的發展に對する桎梏の直ちに文藝の進歩に影響すること大なるは、更めていふまでもなきことなり。幸にも元祿時代にありては、この傾向いまだしかく甚しきに及ばず、たとへ三代將軍家光の如きは、はやく諸侯に宣言してみづからは生れながらにして幕府の主なれば、卿等に對して等輩の禮を執る能はず、今より君臣の儀によるべ

しとて、急に従來の寛大主義を廢して、よろづ窘束の方針を執り、同時に人民に對する幕府の制裁もやうく嚴重を加へたりとはいへ、戰國この方恣に増長せる奔放の習慣は一時に抑ふるを得ず、従つてなほ中葉以後の如く國民精神の鬱屈を見ることなかりしなり。試に思へ、束縛の棄却は文藝發展の最大要件なり、されどこれのみを以てして如何ともするなきは戰國の歴史に徵證あり、また思へ、國家の治安は苟くも文藝發展の素因として除外すべからず、されどこれのみを以てすべてを攝せむことの難きは、平安朝の歴史に考へて明かなり。さらば文藝の眞の發展はいかにして來るべきか、いはく、これらの二條件が兩々輔翼の關係にある時なり、委しくいへば、活潑潑地なる自由の精神を以てして、國民が文藝の製作、欣賞に當るべき、平靜樂易の天地を有する時なるべし。さらばわが元祿時代は實にこの好時期にあらずや、譬喩少しく奇に涉るの嫌なきにあらざれど、貝類の饒かに産するは河海雨水の交はるところにあり、元祿時代はこれ、桑名の磯、その新鮮豊富なる文藝こそは名物時雨蛤、木曾の急流を躍り下れる快活自由の精神が、ひねもすのたりくと天下太平なる伊勢の

習慣の打破

海に注いで、投合調和するほとり、蠅蛤ぞ湧き出づる。
元祿文學の特長として、まづ擧ぐべきはいづれの點にありやといふに、新進氣鋭何物にも拘泥するなき自由の精神を鎗として、斷々乎として従來のあらゆる慣習を衝破し、以て不羈獨立の大文學を樹立し得たるにありて存す、そのあくまで創建的にして新意に富めるは、いふまでもなきことなり。翻つて中世の文藝史を按ずるに、人智よく開けず、先人の所説は絶對無上の證權として動かすべくもあらざれば、文藝の士が自然と人生とに對するや、また自家の心眼を運用せむとはせず、唯々諾々として古型舊習を株守す、人情いづこぞ、理性いづこぞ、あはれかくの如くにして、一代の精神を發現すべき文學に、いつとも知らず誰ともつかぬ人情あり、理性あり、怪奇幻妖習をなして世はむなしく過ぎぬ、作るものに罪あれば、讀むものにもまた咎ありて、當代の讀書界はかゝる作物をしもわが意を得たるものとして迎ふるに躊躇せざりき、禍亂蒼生を苦むること幾十百星霜、今や平和の福音を傳へてすでに一世紀に垂んとす、儒學の勃興に伴ひて上下の知識は著しく啓發せられたり、文學上の典型とやらんはい

まだ知るところにあらず、この新知識を提げ、この燃ゆるが如き感情を以て、おのづからなる人生と中世の作品とを比較し來れば、二者の没交渉にして相隔絶せる、雲泥萬里の相違のみならむや、かれ等が愕然として驚き、毅然として反抗の聲を擧げたるもの、實に所以あるかな。かくてわが元祿時代の社會は全く中世の厭ふべき慣習を脱して、花紅に柳綠なり、あるは梅、超然たるは野鶴の如く、あるは牡丹、赫耀たるは美人の如し、實もあり、花もあり、文壇の榮げにこの時に極まるとぞ見えし。

順庵と益軒

漢學には木下順庵、貝原益軒ら博洽を以て聞ゆ。順庵はその學博通普遍を主とし、自己の學識のすぐれたるが爲よりも、門下に知名の士を出せること多きを以て有名なるは、俳諧における松永貞徳に似たり。益軒の學風は求めて達見を衍ふことをせず、淺近を旨として諄々説いて倦まざるをその特色とす。その著書いづれも平易の國文にて綴り、大和俗訓、家道訓、初學訓、文武訓などいはゆる十訓の如き、處世の道を説けるもの多く、また通俗に諸國の地理を示して行旅の人に便せるものも少からず、この童蒙の教訓を目的とせるは、益軒が國文學

界の北村季吟と進退を同じうすと稱すべき點にして、しかも季吟が古典の註釋をこれ事としたるの觀あるに反し、益軒が一に實際の道義を説いて社會を益せんとしたりしは、兩者の趨向を異にしたるところなり。さばれ順庵も益軒もその半世は前代の人にして、爲すところまた前代の風潮の外に出でず、元祿時代の漢學者として大光彩を放てるは、別にその人あり、伊藤仁齋及び荻生徂來すなはちこれ。

仁齋の古學

伊藤仁齋は京都の人、資性穩雅、いふところ奇を求めざれど、おのづから卓拔、眼光よく紙背に徹するの概あり。初め朱子學を學びしが、その老佛の説を交ふること多くして、孔孟の眞面目にあらざるを疑ひ、古意を知るはこれら宋儒の附會を斥けて、直ちに原文に對するに如くはなしとし、遂に自らその神髓を得たりと稱す。仁齋論じていはく、大學は孔子の遺書にあらず、中庸も後人の摺入多し、宇宙第一の書はそれ論語か、孟子これに次ぐと、またいはく、論孟を讀破すれば、即ち孔子その人に接するなり、孟子は論語を敷衍せるもの、論語は教を説きて道その中に籠り、孟子は道を立てて教その中に存す、さらに論語の理を説け

るに對して、五經は實際を論ず、故に學者まづ論語の一書に天地に磅礴せる自然の理を悟り、然る後五經に鑑みて、これを萬物の實際に應用するを要すと、朱子學は理氣二元の説を立てたれども、仁齋はこれを駁して、二者を分たず、天地間たゞ一元氣の存するのみといひて、生々活動機に應じて動くべしとし、世の道理に著して變ずることを知らざるものを排したり、仁齋がかく一元説を主張して、自ら潑刺たる活氣に鞭ちて勇往直進せるは、もとよりその本來の性の然らしめしなるべしといへども、また時勢の促せるものあるを忘るべからず、蓋しかくの如きは元祿の思想、自山の時に遇うて始めて見るべく、秩序紊亂して、士民歸向するところを知らざる世に起るべき現象にあらざればなり、或はいふ、仁齋の説は明の吳廷翰の吉齋漫錄と符節を合するものあり、仁齋は竊かに漫錄の説を取りたるものなるべしと、またいふ、清朝に古學を唱へたるもの、顧炎武あり、仁齋はこれによれるにあらざるかと、第一の疑は學説に偶然の契合をも認めざらむとする嫉妬褊狭の言たるを免れず、第二の疑は二人の時代は同じといへども、仁齋が遙かに年長なりしことを知らば、おのづから氷解せ

徂來の古文

む、仁齋はこれわが國における唯一の大哲學者、單に薄弱なる理由を以てその偉大を疑はむとすとも、余輩はその平生に顧みて、決して渠が剽竊を敢てして得意なるものにあらざるを信ず、仁齋と殆ど同時代にしてまた朱子學を破したるもの、山鹿素行あり、これもまた時運の生むところ、おのづから然りしなるべく、仁齋の學と何等の交渉なくして出でたるもの、如し、たゞ素行の本領はむしろ兵法にありて、儒學にあらず、従つて整然たる組織なく、系統なければ、その識見に至りては相等しきも、一全體たる學説として見る時、ひとり仁齋を擧げざるべからざるは、また已むを得ざる次第なり、仁齋の長子を東涯といふ、學問の該博、修辭の洗鍊、遙かに父の上に出づ、されど一意乃父の説を祖述するに止まりて、敢て異を樹てず、復古學はこの後繼者ありて、漸く盛を致す、仁齋處士として生涯仕へず、堀川の塾に帷を下して、門生に臨むに、刺を通ずるもの無慮三千、國別にしてたゞ飛驒、佐渡及び壹岐の人を見ざるのみなりきといふ、東涯ついで同塾に教へ、爾後連綿として明治の世に至る。

堀川塾は京都にあり、その頃別に江戸にありて名聲籍甚なりしを、荻生徂來と

し、伊藤父子と對峙して當代東西の偉觀なり。徂來は川越侯柳澤吉保の臣、委しくいへば東涯と同時代の人にして、仁齋にはやゝ後れたり。初め朱子學を學びしが、仁齋の古學を唱ふるを見て、感奮發明するところあり、みづから一派を起して朱子學を誹り、併せて仁齋の説をも駁す。徂來が仁齋に向つて矢を放ちたるは、學說の相違によるよりも、むしろ個人的憎惡に出づ。嘗て渠、仁齋の説に服して一たび書を致ししに、仁齋すでに老いて執筆に懶かりしか、他に事情ありしか、これに酬ゆることなかりしかば、徂來は痛くその自尊心を傷けられ、憤懣骨に徹して、事ある毎にその鋒鏘を露はす。仁齋童子問を爲れば、徂來辨道を作りてこれを駁し、かれに語孟字義、論語古義あれば、これに對してわれに辨名論語徵あり、大學定本現はれて、大學解は成り、中庸發義に對する中庸解の關係もまたかくの如し。およそかくの如きは、徂來が古學に對する態度なりきといへども、滿幅の霸氣に乗じて攻伐を事とするは、その他に對してもまた同じ。渠の學は内に蘊蓄せむことを冀ふよりも、むしろ異を立てて世に傲らむことに力め、いふところ沈厚の風に乏し。謂へらく、仁義忠孝は徳にして道にあらず、道は

すなはち詩書禮樂なり、故に道は先王の作爲せるものにして、おのづから存したるものにあらず、これを知るの道、古辭を學び、古文を讀むに越えたるはなし、文は秦漢の前に溯り、漢魏六朝を參照すべく、詩は須らく範を盛唐以上に採るべし、文は韓退之に至りて衰へ、學は程朱を得て墮落すと、かくの如く、ひたすら古文を尊崇して、宋元以後の風を賤しめたるが、その詩文を評論軒輊したる一段は、實に明の李(于鱗)王(世貞)の説に負ふところ多かりしなり、これを要するに徂來は哲學者たるよりも、經世家に近く、經世家たるよりも、操觚者といふを當れりとす、されば渠が研究の第一義は辭句の工夫、形式の穿鑿にあり、また好んで天下の經綸を談ずれども、個人の道德に至りては深く問ふところにあらず、孔孟の書は讀めども、孔孟が倫理の觀念は寧ろ閑却して顧みざりしなり、門人の俊秀には太宰春臺、服部南郭あり、經學を修めて身を持する極めて嚴格に、師とも同門とも趣を異にしたるは春臺、詩文に堪能に、併せて文人風の畫技に長じたるは南郭なりき、これを始として、濠園の門下才人多く、古文辭學の一派大に世に行はれたるが、一身を修むるを以て偏固なる舊式の村學究のこととせ

新井白石

る徂來の子弟に放蕩無頼の徒の多かりしも、また已むを得ざる數なるべし。哲學者たる仁齋は一個のコスモポリタンなりとはいへ、堅忍不拔、自己獨得の學說を立てたるこの人にして、その用ふる文はなほ漢文なるざるを得ず、徂來が眼中また支那漢文あるのみとせば、文學に對する當時の趨勢卜するに難からざるべしといへども、しかも外國文學の操縱の容易ならざるは、屢説けるが如くにして、いかにこれが平民化したりとはいへ、上下を通じて書かれ讀まれむことは望むべくもあらず、且や元祿時代は國民自覺の時代にして、摸擬蹈襲に甘んぜざる意氣の壯あり、かくの如くにして、余輩は漢學者より出て、國史を究むれば、識見無雙、國文を作れば古今絶倫と稱せらるゝ白石、新井君美を迎へ得たり。白石は略、徂來と時代を同じうす、江戸の人、六代七代の將軍に歴仕して、その帷幄に參し、當時の施設渠の建白に基くもの多かりきといふ、その頃、羅山の孫鳳岡あり、五代綱吉以來の儒臣として、また一方の勢力たり。白石これと合はず、屢、幕閣の上に議論を戦はして、その敵を屈せしむること數回、されど八代吉宗立つに及びて、すなはち斥けられ、鳳岡更に信任せらる。白石政治を料理

するの傍心、を學問の研鑽に潜め、著はすところの書、繁忙の間に成るといへども、積みば等身、多作すれども駄作なく、彼に當り此に當れる眼光の警拔にして、多角的なる、一鶴鷄群に擡んずるの概あり、その重なるものを數ふれば、南島志、蝦夷志の地理におけるが如き、采覽異言、西洋紀聞の西歐事情を明らかに、やがてわが國洋學の先鞭を着けたるが如き、本朝軍器考、車輿考、冠服考の有職故實におけるが如き、東雅、同文通考の國語の性質を説き、漢字假字を論じたるが如き、古史通、讀史餘論の古今の歴史を考究せるが如きあり、中にも古史通は神代の史論にして、この時代の真相を知らむとせば、まづ古語に通曉するの要あるを説き、更に去つて神名、地名等はしばらく習慣に従ひて書紀に則れども、事實の材料は古事記に仰ぎ、以て古意は古言に求むべしといへる自家の主張を明にす、古事記傳に先だつて既にこの卓論あり、白石が識見の高邁なること、この一斑によりて、全豹を推に足らむ。加賀侯がこの書を見て、手を拍つて、本邦第一の書、萬古の疑を決すといへるもの、敢て過褒の讃辭にあらざるなり。讀史餘論は將軍の前に古今の成敗を論じたる稿本、頼山陽の日本外史は、單に史論とし

白石の傑作

ては、その糟粕を嘗めたるものなりと稱せらる。文學の上より白石の傑作とすべきは藩翰譜と折り焚く柴の記となり。藩翰譜は諸侯伯の系譜を記し、乾燥なる諸家の履歴を列敘したるものなるが、問々勇士奇傑の逸話を挿みたり。その文意を歴ずして成り、毫も斧鑿の痕を止めず、筆端聲あり、文字の移るに従うて人物もまた活動し、彼此應酬の態眼前にあり、折り焚く柴の記は白石の自傳なり、記すところ、藩翰譜の一般に單調無味なるに比して、頗る變化あり、波瀾ありといへども、文章のあまりに優雅ならむことを欲したる爲に、却つて冗漫の弊に陥れる觀なくんば、あらず、余輩をして遂にこの名文をしも棄てて、藩翰譜の簡潔適勁を採らしめむとするは、惜むべき限ならずや。とにかくに白石は一代の文章家なり、その本領は政治家たるにあるべし、學者たるにあるべし、殊に爛々たる史眼は以て古今に獨歩するに足るべしといへども、文章にかけてまたよく渠と對峙して相下らざるもの幾人ありや。固より渠の作れるところは、史實の記載を旨として、純文學の域に入るべきものは、あらずらむ、されど春水の過ぐるところ、柳櫻枝を交はさずとも、流れゆく

大日本史の
編修

姿に落花浮絮の趣あり、枯木死灰を捕へ、これに氣脈を通じて、萬葉靈雞の雲を搖曳せしむるもの、實に渠白石が靈筆にあらずや。日本一の敘事文家は誰ぞと問へ、近松門左衛門ならずばすなはちわが白石なり。こゝに史學の消息を説くに當りて、特筆大書すべき人あり、即ち水戸の徳川光圀にして、白石に先だちて世に出て、白石よりもさらに大なる事實を成したり。その史學に對するや、嘗にこれを以て一身の事業としたるのみならず、後世子孫に涉れる社會的一事業となしたるなり。同時にまた光圀は文學の保護者なりき、古典の學の復興は實にその賜にして、新文學の發現もまた渠に負ふところ鮮少なりといふを得ず。光圀は家康の孫にして、頼房の第三子、兄を超えて家督を承く、承くといへども、自ら安んぜず、史記の伯夷傳を讀むに至りて、殊にこの感深く、史記尊重の念はやがて歴史編纂の計畫を促したりと稱す。一説には林春齋の本朝通鑑に皇家の始祖は、吳の太伯の後なりとあるを見て、世なほかくの如き辭説あるかとして、これを改訂せしめ、みづからまた修史に志したりとも傳ふれど、強ちに信ずべからず。さて光圀が叱咤督勵の効空しからず、彰考館

の儒臣はよく名君の素志を成就せしめたり、近時に至りて大成せる大日本史即ちこれなり。

光圀は屢に一言せるが如く、明の遺臣朱舜水を聘して賓師とし、程朱の學に歸して、最も道義を重んじたり、常に家祖家康を尊崇して、その神靈を拜することぞ忘れざりしが、これと共にまた深く皇室を畏敬し、毎歲元旦必ずまづ西に向つて宮闕を遙拜したりといふ。されば大日本史の編輯に當りても、大義名分を正しうするを以て最大最要の使命とし、この立脚地によりて在來の國史に三つの訂正を試みたり、何ぞや、神功皇后を帝王の外にして、皇妃傳に收めたるはその一、大友皇子を本紀に加へたるはその二、神器の所在を標證として、南朝を正統に立てたるはその三なり。今日より見れば、これらもまた多少の論なきにあらざるべしといへども、渠が旨意の存するところは、則ち諒とすべし。わが身は幕府の近親、奉ずるところは支那の儒學なり、この境遇の桎梏を蔑視し、この學問の束縛を脱し、國體の存するところを明めて、自覺せる國民が指南車たらしむとせる光圀はまた偉なるかな、これを以て畢竟その宗家に嗣せること多か

水戸學の大義名分説

るべきを悲しむが如きは、時運の變遷を思はずして區々たる一家族の存亡に執着する至愚の偏見のみ。光圀また古文を輯めて扶桑拾葉集を成し、法度儀式を類別して禮儀類典を撰す、しかもその計畫は別に更に大なるものありて存しき、萬葉集の註釋すなはちこれ。

萬葉集の註釋

萬葉集は奈良文學の精髓なるに、平安朝に至りてすてにこれを讀むもの多からず、鎌倉以後はまして一二の註釋ありといへども、暗中の摸索のみ、その書は傳ふれどもその意は解すべからず、古史の闡明を以て己の任とせる光圀は深くこれを遺憾として、これが良註釋を得んことを思ふ。事の成否は當事者の人選如何による、江戸に求むれども、この地文運なほ盛ならずしてその人を得ず、乃ち遙かに大坂なる下河邊長流に託す。長流は大和の人、古典を學んで自得するところあり、説くところ舊套を脱却して、頗る獨創の見に富み、後年浪華に寓居するに及びて、就いてその門に入るもの甚だ多し、されど性狷介にしてまた疎懶、平生人の刺を通ずるものあれば、好惡意の嚮ふところに任せて、或は座を空うして引き、或は門を閉してこれを謝す、されば水戸家の依囑に應じて、心

に快しとする時にあらざれば毫を下さず、事業の進捗はかゝしからずして、荏苒歲月は経過し、遂に註釋を果さずして歿す。光圀なほ屈せず、更にその人を求めて長流が莫逆の友契沖を得、禮を厚うしてこれを聘す、されど契沖は俗事を煩はしとして草廬を出でず、光圀が紙筆を送りて懇に事を囑するに及び、やう／＼に庵中に筆を執ることを諾す。

契沖が古典の學

阿闍梨契沖は攝津の人、幼にして薙髮して真言宗の僧となり、高野、長谷、室生等に修道苦業し、特に悉曇の學に深き淨嚴律師に學びて得るところあり、元來契沖の嗜好は佛教の經典よりもむしろ古典の學に傾けり、一たび悉曇を律師に授けられてより、これをわが國の假名と對照比較して研鑽怠らず、平安朝中葉以降假名の用法の甚しく墮落せるを發見し、これを古代の精確なる格式に歸さんとして、立言していはく、正しき假名を知らむとせば、まづ直ちに古事記、萬葉集、和名抄等の漢字の音を假りたるものによらざるべからず、平假名、片假名を用ひたる書は、轉寫の際、誤に誤を傳へて到底信を置くに足らず、所謂定家假名遣の如きは殊に杜撰を極めたるものなりと、かくて契沖はその生涯を通じて

て二個の大事業を成就したり、一は歴史的假名遣の復興にして、和字正濫抄はその具體的發表なり、一は即ち萬葉集の研究にして、光圀が依託によりて拮据經營、一生の心血を瀝いて成れるもの、實にこれを萬葉代匠記四十卷となす。かくて契沖が偉大の勢力と卓抜の見識とを傾倒して、この書を考註するに及び、つわが國の復古の學はこゝに至りてその緒に就けりといふべく、こののち幾ばくもなく、國文學の隆々たる奎運を迎へたるも、契沖の功多きに居るは勿論の事なり。

戸田茂睡

契沖は古典を註釋して一世を裨益したり、この時江戸に戸田茂睡あり、梨本集を著はし、中世以來の歌壇の積弊を痛撃して、みづから和歌革新の先覺者を以て任じたり、されど茂睡は創作の技において拔群の譽なし、その論も破壞的にして建設的ならず、詞を盡して、制の詞、主ある詞などは師範家が相排擠せんが爲、その道を尊くし、神秘にせむが爲に造り設けたるものなるを論破したりしに過ぎざりしなり。とにかくにその識見は敬重するに足るべく、これもまた元

祿特異の現象にして、古代慣習の束縛を断たむとしたるものなるが、當代の歌壇はいまだ直ちにこれに應ずるの準備を缺きたりけむ、さしたる反響を見ずして止めり。

國學興起の
順序

仁齋の古學は抽象を主として哲學的思索に傾き、徂來は政治經濟の如き實際の方面に重きを置きしが、その說漢學に出てて一般國民に緊密の感を與へず、共に未だ以て當代における社會の反省的思想を満足せしむること能はず。さらに水戸の歴史學は道義を唱へ、名分を正しうせむことを力めたりといへども、なほその初は過古を過古として、現代と沒交渉なりしを如何にせむ。契沖が古典の學また然り、渠やもと圓頂緇衣の徒、固より漢學者の時流に伍して佛教に對して敵意を挿むものにあらず、さりとして儒教に對しても後の國學者の如き偏見は持たず、その古文を註するや、論旨極めて公平に、理智の指導に従ひて、中世の間、傳説と俗信とによりて謬まられたるところを正して、また遺憾なきが、その從事せるところは専ら古文辭の學にあり、古の假名遣を今に復活せしめむとしたる一點のみは、その學を以て現在に關係あるものとしたりといふ

を得べけれども、遂にその上に及ばず、倫理風俗に關して過古と現在とがいかなる交渉を有するか、この邊の消息に至りては、一言もその口を洩るゝを聞く能はざりき。然るに思へ、元祿は現世主義の時代ぞ、自覺自信の時代ぞ、當時の國民には外國よりもわが國が尊く、過古よりも現代が主なり、この國民にして、すでに、古代の歴史を明らかに、その美醜を發く、いつまでか手を空しうして徒らに古代の花を眺め暮すものぞ、更に進んでその蓋を抜き、瓣をちぎりて、自家の藥籠に收め、以てその理想を現實にし、社會を改善するの資に充てむと志すに至るべきは、當に然るべき發展の順序なり、かくして契沖の後に荷田東應は出づ。

荷田東應

荷田東應は京都の人、幼にして古典の學を好み、制度格式、有職故實、國史、國文に精通し、當時、堂上家の人々が固陋頑迷風をなせる間に立ちて、ひとり異色あり、嘗て江戸に出づるや、名聲一時に傳はり、諸侯のその門に遊ぶもの踵を接す、八代將軍また祿を與へて召し抱へむとしたりしが、辭して京に歸る。東應は一個の學者なり、而してその資質においては世の謂はゆる慷慨家なるものに似た

り、以爲らく、平安朝以來、歌文の道漸く淫蕩に流れ、今や絶えて上古純樸の風を存するなし、これを矯むるは我儕の任なりと、乃ち歌を詠ずるも、取材はものづから他と異ならざるを得ず、戀愛の歌は一生遂に詠まざりさといふ、東應また儒佛の異教に學びて、道を説くものはあれども、國民が本來の性情に基きてわが國に固有の大道を闡明する者なきを慨し、歌うていはく、よみ分けよ、倭にはあらぬ漢鳥の跡を見るのみ人の道かはと、渠が國史を極め、律令を明らかに、古學の盛衰、道義の興廢を研究したるもの、一にこの抱負を實現して、再び淳朴溫良の時代に歸さんとし、僞らず飾らざる上古の風を儀表として、今日の道徳を律せむとしたるものに外ならず、或はいふ、さはいへど、東應の學は當時大に世に行はれし儒教の古學に負ふところなからずやと、それ或は然らむ、されど余輩の見を以てするに、元祿社會の風潮は必ずしも、摸擬因果の關係を以て説くべきものにあらず、右に流れては仁齋等が古學の唱道となり、左に流れては東應が國學の建設となる、東西南北、趣くに從ひて、隨所に大渦は卷きたるにあらざるか、契沖との關係は固より否定せず、東應が仁齋等の學に暗示を得たと

欠

MISSING

は郷土の名産紀州蜜柑を江戸に上せて巨利を博し、東叡山根本中堂の造營を請負うて得るところはたいかばかりなりけむ。本所に廣大の邸宅を構へて、客を迎ふる毎に席を新にし、數人の疊屋日々手を休むるに暇なかりきといふ。京の中村内藏助銀座として豪富に誇り、大坂には娼家茨木屋幸齋ありて家作の結構宮殿も及ばず、淀屋辰五郎は一萬坪の地所と一萬人に近き奴婢とをわが者として王侯の贅澤に比す。江戸の石川六兵衛の妻が清水の舞臺に京の難波屋十右衛門の妻と衣裳競をなして、模様南天の實に累々たる珊瑚珠を列ねたりといふも、當年の榮華を偲ばしむる好話柄なり。財寶限り、虚榮の心いまだ消えざるに、藏庫まづ空しく、餘の遊興に夢の間に百萬の資産を蕩盡するもあり、分外の榮耀沙汰の限なりとて、幕府に籍沒せらるゝもあり、覺めての後の悲境はまた天下の耳目を欬てしむるものなきにあらざりしかど、とにかく當時の町入はまたもとの町人にあらず、武士こそ名のみはいめしかりけれ、實力に於いて天下は平民の天下なるを奈何にせむ。浦安の國安うして、米價頻に下落すれば、まづ苦むしものは米を祿なる武士ぞかし、あはれ金錢を土芥と見たり

し戦國武士の風はいつしか失せ、苦しき時は二本投げ出しても、町人様に才覺を頼まざるを得ず、さりとて町人もえらくなれるものかな。されば江戸には旗本奴に反抗して、幡隨院長兵衛、唐犬權兵衛等の所謂町奴なるもの跋扈し、然諾の一言に男一疋かけて、弱きを扶けて強きを挫く面魂さても頼もしく、上方の文學にも、その忠臣藏に殊に一町人を拈出して、天川屋儀平は男でござると氣焔を吐かしむ。わけて大阪は、秀吉が築城のかた漸く堺の富を吸収して、東西往返の要津となり、出て入る船の影港の口を埋めたり。江戸を政治の中心とすれば、大坂は商業の中心、彼處は武士の都にして、此處は町人の都なり。げにや全國の相場を支配するは堂島の米市場、こゝが日本の臺所とはよくぞいひし。みなこれ町人の自覺に因する現象にあらずや。

現代の賞讃

試に當時における國民の心裡を解剖せよ、いかに余輩明治の人と事態を同じうするぞ。今日古老の幕府時代の狀勢を語るを聞く時、余輩は悚然として膚粟を生ずると共に、いかなればこの曠古未前の盛代に生れ、隆々たる帝業を賛し、思想は自由に才に任せて驥足をも延ばすを得るかと思つて衷心いふべから

ざる愉快あり、五千萬の蒼生今に至りて誰かまた戀々として維新以前の國情に歸らむことを冀ふものぞ。元祿平民の心情も必ずやまたかくの如くなりしならむ、おのれ等が擊壤鼓腹の情を以て幕府初政の時もしくは戰國の末季に比するに、夢か、幻か、はた天地の顛倒したるかを疑はしめむとす。もしそれ百般の文明に至りては、貞享、元祿の元和、寛永におけるは、なほ明治四十年の文久、慶應におけるに同じ、かれ等は余輩と共に眼を睜りてその長足の進歩に驚くと同時に、またかゝる歎美すべき社會の一分子として生存し、活動するを無上の誇とし、光榮としたりしや、明かなり。當時の町人が、わけても欽慕の聲を放ちて惜まざりしは、三津の繁華なり、よくもあらぬ例ながら、役者評判記難波入江船にいはいく、天地人の三才に人ほどたつときはなし、中にもお江戸は武士所都は女の艶所、大坂は町人所、人情風のみよき所、頼むというてひかぬ所、さかぬと云うて死ぬる所、萬大腹中な寛濶所、麻につるゝ蓬つむ女までも心のだてな色所、そなはつて下卑ぬ所なり」と。

浮世繪と浮

かく現代を謳歌して、また他あるを思はざれば、古代の憧憬などいへることは

世草紙

元祿平民の大禁物なり、口にするとろは一より十まで、現實世界なり、當時の小説に化物も幽霊も出てざるにはあらねど、また謠曲の幽霊の如きものにあらずして、臆病なる人間らしき化物となりぬ、その頃浮世といふ詞あり、なほ平安朝に今様といふが如し、すなはち當世風といふほどの意なり、元祿時代はこの浮世ならては夜も明けず、日も暮れず、浮世狂、浮世笠、浮世蓑、浮世楊枝、さて同じ格にて浮世繪と浮世草紙とは出づ、浮世繪は當世の風俗をあざやかなる色彩に寫し出して、専ら中流以下の玩弄に供したるもの、菱川師宣、鳥居清信、宮川長春等最も名あり、浮世草紙はすなはち元祿の寫實小説にして、從來の假名草紙に對して起れるもの、これを論ずるは即ち井原西鶴を論ずるなり。

井原西鶴

井原西鶴は現代謳歌者の張本なり、大坂の人、俳諧を西山宗因に學びて、檀林の高足と許されしが、固より繁忙なる都會に育ちし身の、心を動かすものは天地山川の自然にあらずして、變轉極なき人事の現象にあり、渠もまた芭蕉の如く幾春秋を（終）旅に費し、異境に過し、は、一目玉銜及びその小説によりて推されるれど、浮世に氣遠き月花はその性の謔ふところにあらず、所詮の對象は人心の

西鶴

秘密にあり、風俗の真相にあり、殊に諸國遊里の状態を探るを以て旅行の目的とす、かくの如き人の喜ぶところの思想はよく從來の小詩形に盛るを得べきか、果然、俳士西鶴は四十一歳を一期として小説家と豹變したり、その處女作はすなはち天和二年の好色一代男にして、これを江戸時代の小説に一時代を劃せし傑作なりける、この作一たび梓に上るや、讀書界は色めきたちぬ、かねて一代の民衆が心に描きたりしところは、この作によりて現實にせられたり、これより西鶴の名一時に高く、俳壇の鬼才其角の如きも、吉原五十四君を著はしてまた渠が作に擬すれば、大勢は推して知るべきのみ、一代男に始まりたる快樂本位の小説即ち好色本は爾後數年うち續きて、よく三都その他の遊廓の委曲を盡し、洛陽の紙價爲に高かりしが、機を見るに早き渠は、喝采の聲未だ收まらざるに先だちて、局面を一轉し、忽ち武士を題目とせる武道傳來記等を出す、されどこれらは固より町人の謳歌者たる西鶴が得意の壇上にはあらず、更には三たび移りて終に町人社會を捕へ、筆もまた漸く圓熟の境に入れりしが、如し、日本永代藏、胸算用などはこの期における雄篇とす、この外に珍事異譚を集めた

西鶴の思想

るもの因果物語の類もありしかど、一括していふに西鶴において最も見るべきは初の戀情小説と後の町人小説とにあることいふまでもなし。一代男といひ、一代女といひ、いづれも前後一貫せる一篇の主人公を許けて、その生涯の情事を寫したるが如し。もしその描寫をして思ふさまの現世的快樂——社會の制裁を無視し習慣の束縛を侮蔑せる人間生慾のたけ——を盡さしめ、以て當時の町人に媚びたるものなりとせば、その理想の賤劣尾籠は憫笑するに堪へざるなり。されど余を以て見るに、西鶴の小説は概するにその事件の進行においても、人物の性格においても、豫め這般の考案あるにあらず。主人公さへいづれともなき、今の新聞紙の三面記事に髣髴たる短篇を彼是輯集補綴せるが如きものなり。更にその記するところを見れば、伊勢源氏の一節を今様に譯出せるもあり、一代男の如きは大體の着想においてまた源氏に負ふところありといふを得べけれども、西鶴は竟に西鶴にして、その本領とするところは極端なる寫實にあり、渠や觀察奇警にして精透、三都風俗の華奢に驚きつゝ、その紅紫眼を射る表面を描きつくせるは勿論、文明の裏必ずまた罪惡潛

み弱點伏する所以を抉出して餘すところなきは、筆鋒の簡潔犀利なると相俟ちて、洵に古今獨歩と謂ひつべし。しかれども外に觀ること多きもの内に察すること少し、西鶴の觀察力はかくの如く精微なりといへども、その想像力に至りてはすなはち缺く、故にかばかり通曉したる遊里の様も、見聞を離れては一語も下し得ず、一旦經驗を寫し盡しては、これを再びするに重複の嫌あり、みづから生まむとすれば、想涸れ筆また盛まる、一代男に比べて二代男が劣り、二代男に比べて三代男が更に下れるは、これが爲のみ。西鶴はまた自らよく知れるものなり、その好色物より轉じて武家物、町人物に移れるは、時勢を見るに敏なるの致すところなるべしといへども、そもくまたこの弱點を自覺せるに、よらずんばあらず。

さもあらばあれ、西鶴の壯年時代を表はすものは前の好色物にして、晩年を描けるものは後の町人物なり、この思想の過程はひとり西鶴に特有なるにあらずして、實に當時一般の民心を反映せるものといふを得む。青春血熱しては、短き世に樂むべきは色と酒、さつさ押せくと、鴛籠を飛ばすは島原、新町、さては

西鶴と世相

吉原に流連すれど、中年以後に及びては、懐寒きものが影を顧みて流石に秋風に身をすぼめざるを得ず。昨の遊蕩兒は今の世間男、勤儉貯蓄を口にし、人間萬事金の世の中と悟れるも殊勝ならずや。かくても西鶴はなほ快樂的詩人たるを失はず、時に榮華の楳花一朝の夢と消え易きを啣ちしこともありつれど、これら悲愁の曇は山來佛敎的厭世思想の屢、わが國民の性情に浸みむとして、しかも能はざると一般、いつしか寛濶の風に吹きはらはれて、西鶴本來の面目は曝露せらる。後期の小説に現はれたる、働き得る日に働きて、老年の隠居を樂めよといへる思想は、また樂天的にして寫實的なり、西鶴自身の人生觀にして、一般世間の世界觀なり。

近松門左衛門

兩雄並び立たずといへども、名家時に相率ゐて起る西鶴を結べる筆を以て直ちに近松に續がざるべからざる元祿文學は眞に余輩の誇とするところなり。近松門左衛門、巢林子と號す、傳ふるところによれば、はじめ西鶴に學ぶ、されど元祿は個性發展の時なり、徒らに人の糟粕を嘗めて止むべきにあらず、渠の趣くところは西鶴と異にして、別に淨瑠璃の新方面を開拓したり、近松の生園は

時代物と世話物

いづこなりけむ異説並び存して定かならず、京に出てて搦紳一條家に仕へ、位階をさへ授けられしが、自家を知るものは自家に如かずとかや、更に浪人して都萬大夫座の爲に歌舞伎の脚本を作り、これも面白からざりしか、更に轉じて宇治加賀椽、井上播磨椽等の爲に淨瑠璃を作る。時に貞享二年、大坂の淨瑠璃大夫に竹本義大夫(筑後椽)といふものあり、道頓堀に竹本座を立つ、近松京を後に下りてこれと結び、爾後専らその座附作者として、相續いて新作を出す。義大夫もとより美音梁塵を動かすもの、近松が靈筆はこの妙腕を俟ちていよく發揮せられ、唇齒輔車、當時難波第一の名物とし、いへば、竹本座の淨瑠璃よと世に許され、開場を待ちて市民はあしかけつめかけ、酔へるが如く狂へるが如くにもてはやしぬ。

そも、淨瑠璃には時代物、世話物の二類あり、時代物はその舞臺を過古に取り、世話物はこれに反して目前現在の出來事を仕組む、小野も通が十二段草子以來、淨瑠璃は概ね時代物なりしが、元祿前後の風潮に促されて、さて世話物は出て來たるなり、されど當時にありてはそれもなほ二番目物として餘興に演

ぜらるゝばかりの様にて、近松が全力を盡し、もまた時代物にありて世話物にあらず。その作について數へても實に彼の八に對する此の二の比のみ。今日こそ近松が世話物はわが文壇隨一の名品と仰がれ、渠がシェイクスピアと上下せらるゝ所以また一にこれあるが爲ともせらるれ。元祿時代の人々は國姓爺合戦、曾我、嵯山に寢食を忘るゝことを知りて、いまだ曾根崎心中、天の綱島に不朽の價値あることを思はざりしなり。かくの如きは現在を生命とせる時代にもありても、なほ全然歴史の束縛を脱すること能はず、むしろ題材は從來のまゝに歴史的事實を採用せしもの、されどその内容を探れば、則ち元祿の元祿たる所以を知る、所以とは如何。

時代物の性質

時代物は世界を古代に取るといふ、されどこゝに古代といふにも制限を置かざるべからず、名のみを聞けばいかめしき武士もひと皮むけば當世の素町人、義經といふは大蟲辨慶といふは幫間、曾我兄弟は廓あらしのどら息子なり。されば史實の正否などいふむづかしきことはさておき、言語も全く現在慣用のもの、儀式正しかるべき上流武邊の語調も無下に卑しく、大坂商人が奉公人に

所謂心中物

對する口吻と毫も違ふところなし、かくの如きは現在を最高級に置ける元祿時代にさもあるべき自然の勢にして、近松が故意にかゝる時代の混淆を敢てしたりといはむことの非なるのみならず、寧ろ近松もまた時勢の小兒たることを證して餘あり。

世話物はまのあたりなる事件を捕へてこれを種とすといふ、中にはやゝ時代の派れるもあれど、多くは大坂またはその附近の地に起れる近事を、眼もくめるべくばかり早く淨瑠璃に作り、操にかけたるものにして、偏にその迅速を以て世人の喝采を博せむとしたるなり。その重なる題目はいふまでもなく男女の心中にして、數多き世話物の中よりこれを除き去らば、剩すところ幾何かあらむ。當時蕩逸浮靡風をなして、この病的現象は到るところに蔓り、巷談茶話その沙汰ならぬはなし、近松この風習に乗じて、靈妙の筆を最近の世話に着くるに、言々涙あり、句々珠を聯ねしかば、果して一世を風靡し、これが爲にうらわかき男女のこの慘劇を實地に演ずるもの、一時更にその數を加へたりきといふ、かのゲイテがファウストと思ひ比べて、天才の威力眞に人を驚倒せしむ。

世話物の性

近松が世話物の先驅は元祿十三年に出でし長町女腹切にして、心中物の露拂は同十六年の曾根崎心中なり、これよりさき延寶六年、萬屋助六心中といふ淨瑠璃都一中によりて語られしかど、何人の作なるかを明かにせず、これについては近松を以て心中物の先達とすべし。さて近松は世話淨瑠璃を作るに當りて、その事件に如何ほど忠實なりしかと見るに、さまては實際に拘泥せず、經緯大體の骨格をこそ摸すれ、筋肉を附し、色澤を賦するは、一に渠が好尚の嚮ふところ、に俟つ。こは寸毫も違はず事實を寫さば、その關係者より苦情を申し込まざる、恐ありといふ懸念にもよることなるべけれど、そも、また近松が特殊不動の趣味と理想とを有したるにあらずんば、いかでかこれを想化し、醇化してかゝる妙篇傑作を做し得む。

近松と西鶴

近松が西鶴と全くその徑路を異にする所以は主としてこの一點に存す、西鶴は社會の事相を活寫して除すところなかりしといへど、畢竟その表面的現象を對象としたるに、近松はこれら皮相の觀察を排して、天地と共に淪らざる人心秘奥の一物を把持せむとす。故に西鶴が小説には今はた忘れられたる服飾

飲食物などの語彙、應接に暇なく余韻を苦むれど、近松が戯曲にはさるたぐひ多からず、所詮は義理なり、人情なり、その衝突なり、義理と人情との衝突！あゝこれ人間性情の極致、人生の波瀾長しへにこれを繞りて重疊として止む時なし、この渦に投ずる時、佳人涙あり、これに觸るゝ時、才子腸を斷つ、近松はこの大題目をしも捕へて、剔抉分解、庖丁の牛を割くが如く然るものあり、その道德的觀念も西鶴に比して頗る發達したりしかども、さりとして後の褊狭なる讀本作者の如く、必ずしも善人榮えて悪人亡ぶべしとはせず、あくまで情理の絆に纏はれて抗すべからざる運命の手に翻弄せらるゝ世上幾多の人の子の爲に同情の涙を灑ぎ、これと共に訴へ、これと共に恨みて、結末多くは心中の悲劇となる、その少數は普通平凡の終極を告ぐるもあり、稀には因果應報の理を説明するに至るものさへなきにあらず、鎌倉以後一般の風尚漸く移りて、文學の従ひて左右せられたるを看取せよ。

西鶴はわが世の歡樂に沈湎して、放縱自ら恣にせるもの、その作物の内容の當時の時勢粧を描けることは既に述べたり、その文章は同一文學中に胚胎せる

近松の文章

ものなれば、さすがに古文の影響も少からずといへども、法格規約に至りては全然これを無視し、別に自由奔放なる一體を創めたるところに特色を有す。近松は然らず、渠は等しく社會を寫すといふも、主眼とするところは異にして、念刹那に消滅すべき皮相の現象には意を留めず、ひたふるにその理想とするところを押し樹て、不滅不易の人情を探らむとせしかば、渠にありては今と共に更に訴りて古をも究めざるべからず。加ふるにその立脚地、西鶴の如く全く任意的なるを得ずして、舞臺に上せて語らざるべからず、操にかけざるべからずといふことの、その詞藻を拘束するありて、おのづからまた古文學の範圍に近づかざるを得ず、渠が初期の作物の如きは殊に著しくその影響をうけたり、甚しきに至りては謠曲と全く同一なる題目を選び、その文辭もそのまゝに襲用したるもの少しとせず。されどかくの如きは天才近松がいつまでか甘んじ得べき境界ならむ、幾ばくもなくこれらの困難をも打破し、古文を消化しながらも、自ら獨立自由の天地を闊歩し、一たび紙面に對すれば千萬言たちどころに湧く、こゝに至りて國文學の素養は却つて渠を助けたること少からざる

歌舞妓

べく、天馬行空の快筆得て、端睨すべからず、もしそれ渠が簡潔なるべくして累説し、眞面目なるべきところに諧謔を弄したるが如きは、偶、千慮の一失にして、これをや弘法の筆のあやまりといふべく、いまだ以てその千載不世出の文豪たるを否定するには當らざるなり。

すでに啓蒙時代の終に説きたるが如く、歌舞妓と淨瑠璃とは發達の徑路を異にしたりき、而して歌舞妓には初より一人の名だたる作家をも出さず、近松の如きも、一時この方面に筆を染められたれども、後には一意淨瑠璃の著作に従事するに至れり。按ふに歌舞妓には直接に觀客に接する役者に無上の權力あり、作者はその下に立ちて註文にも難題にも應ずるの覺悟なかるべからず、この屈辱は學あり才あるものの受くるに屑しとせざるところなるべければ、おのづからさせる作家をこゝに誘致すること能はざりしならむ。されば脚本には見るべきものはなかりしが、それにも係はらず、元祿の歌舞妓はその技藝において目覺しく發達したり、役者の有名なるもの、京には坂田藤十郎等あり、江戸には市川團十郎初代二代相續いて荒事の名人、中村七三郎は無類の和事師とし

平民と演劇

てもてはやさる。梨園の巨匠今を盛と讃出し、今日の演劇は實にこの時にあいて成形せられしなり。

そも、淨瑠璃にもせよ歌舞妓にもせよ、その江戸時代に入りて生育せられ、元祿に至りてかく美花を結べるは、全く平民の發達に基けるなり。弄りて思ふに、平安朝には枕草紙、源氏物語等の出づるありて、散文、わけて小説はそののち今に至りても匹儔なきまでに振ひしかど、演劇の方面には何等の發展をも見ざりしにあらざや、これ他なし、劇の性質として長時間の演藝の鍊磨と大仕掛なる舞臺上の設備とを必須の要件とすれば、平安宮廷の貴族の生活いかに嫺雅に、庫裡いかに堆積し、長袖いかによく舞ふとも、その少数者の範圍のうちに、よくこの大道具を整へ、旬月の演技を繰返さむことの不可能なるはいふを待たず、僅かに單調にして幼稚に、華麗なる服裝と山緒ある樂器のほかは何等の準備もなき、雅樂を以て満足せざるを得ざりしもの、怪むべきが如くにして、また故あるかな、下りて室町時代に至れば、猿樂の興行には平民的傾向もやゝ見るべくなりしが、その後亂離の世の中とて、これに親み得べきものは、いつも悠

八文字屋本

悠無事なる貴紳か、さらば干戈の暇に開日月を弄せむとせる中流以上の武士輩のみ、舞臺といふも名のみにて、興行の時日も漸く一日二日、今日やめていつ始むべしとも限らざれば、その脚本は對話よりも諷誦して記憶に便なるものならざるべからず、その演技もまた一を學びて容易に他を推し得べき同型のものを選ぶべしとの註文も出づべし、かくてぞ千篇一律の語るよりも、謠ふべき謠曲の特體は成りたる。しかるに江戸時代に入りて情勢一變、元祿には平民は一躍して文化の中樞となり、歌舞妓もまたこの新進の大衆に擁せられて、急劇の發展を遂げ得たり。こゝに至りて曩日の蕭張の小屋掛の面影はまた見るべからず、定紋の櫓をあげたる堂々たる定小屋は成りぬ、舞臺は廣く、道具は美に、衣裳は眼を奪うてきらびやかかなり、外題も半月、一月、評判よきは百日も打ちつゞくるに、日毎に新顔の客筋を絶たず、時人誇りていはく、新吉原と葺屋町とを知らずんば、江戸の繁華を語るに足らずと。

戯曲小説界の趨勢を見るに、西鶴の後、これを學びて當時の社會を寫せる小説日を追うて盛行したりしかど、その祖を凌駕するものなし、たゞ所謂八文字屋

本なる一束の作物に異色を見るのみ。八文字屋本はこれを刊行したりし自笑の屋號をとりてこの名あるもの、自笑みづからその作者と稱せしが、眞の作者は別に存し、わけても江島屋其磧の名儕輩を壓す。この草紙は西鶴が好色本に倣ひて、男女の情事を主とし、殊に狹斜の風俗を好題目とし、更に等類にして異情なる小話を集めたる所謂氣質物を多く出せり。寫すところ西鶴の如く表面の寫實に止まらず、やゝ近松が淨瑠璃になせるところをも試みて、滑稽皮肉なるが中に、一味悲愁の人情を籠め、行文はたその保守的なる京都の地に生じたる爲か、西鶴より一步を退きて一段の古文臭味を帶ぶ。さりながら八文字屋はもと劇評すなほち役者評判記に家名を擧げて、爾來年々ひき續きてこれを本業としたるもの、従うて小説も歌舞妓の感化を受くること多く、一方には近松によりて順に興れる淨瑠璃の影響さへ甚しかりければ、その草紙はかれを摸しこれに擬して、おのづから清新の氣を失ひ、全盛幾ばくもなくして振はずなりぬ。

淨瑠璃の變

淨瑠璃の發達はこれに比するにめざましきものありき。竹本座創立ののち數

遷

年を出てずして更に道頓堀に豐竹座の起れるあり、紀海音を立作者として、盛に竹本座に對抗を試み、南北競うて勢を張らんとしたりしかば、これに伴うて作者も多く出でて互に想を練り腕を磨く。近松の歿後最も噴々の名ありしを竹田出雲とす、その脚色の變化に富めるは近松に比してむしろ優るところあり。されど近松を外にして、またさばかりの學識と才能とを提げてこの道に入るものは得がたかりしかば、この頃より合作の風頻に行はれ、全體の統一を擱きて部分の美に力をこめ、たゞ一幕の山を看板にして觀客の好評を博せむとす。趣味低き平民の前にはかくても所期の成功を收め得たりしかど、その實は一部の劇曲にも各齣の優劣あまりに顯著に、人物の性格も矛盾撞着、前後に關聯もなき人物事件を加へて、たゞ支離滅裂と評するの外はなく、所謂夢幻劇の病弊は齋言に入りてまた救ふべからざるに至りぬ。近松逝いて數十年、その間なほ名ある作者も少からず、世は淨瑠璃の世とこそ見えしに、一人のこの弊風を矯めて巢林子に踵を接せむとするものも出てざりしこそ是非なけれ。

義理と人情

中古以來、制慾克己の精神次第に養はれ、女性を卑むの風盛なるに従ひて、もは

や戀愛は文學の上乗なる題目とはせられずなりぬ。江戸時代に至りて儒教の影響殊に著しきものあり、上下を通じて一切情緒の發動を抑制するの主義を取れば、まして男女の相愛の如きは、最も懦弱なる人間の閑事、否、罪過として、架空の説話としてもまた耳を假す者なきが、この時代における社會の傾向なりき。何事ぞ、ひとりわが元祿時代の感情を重んじて、中にも戀愛に我を忘るゝもの多きや、この點において元祿は江戸時代らしからぬ。江戸時代にして、むしろ一步を平安朝に容るゝものといふべし。平安朝と元祿時代とはわが國における感情主義の二大盛期なり、されど類似のうちおのづからまた差別は存す。これを文學の上に見るに、かれにありて波瀾を起ししものは常に感情と感情との衝突なりしかど、これにありては到るところ感情と義理との葛藤なり。こは、定まれる道德律のいまだあるなく、ひたすら感情の中庸を標的として行動せる平安朝と、忠孝仁義の道に國民思想の根柢を固めたる江戸時代との、社會精神の相違に基ける必然的結果なるべし。

余輩はこゝに元祿時代は感情偏重の時代なりといふ、されど誤解するなかれ、

凡下なる平

民の趣味

そは主として町人の間のことにして、學識備はり、徳操高き中流以上の社會にはあらず。従つて戯曲小説の喜ばれたるも大抵前者の範圍を出でざりしは、今更説くまでもなきことなり。事情かくの如くなれば、戯曲小説において道德とよび義理ととなふるものは、また極めて皮相淺薄なるものにして、後人をしてそのあまりに形式的なるに失笑せしむ。殊に一轉して金錢すなはち義理の存するところなるに至りては、迂愚また及ぶべからず。義理の爲ならで金錢の爲に死すとは、すでに近松のその作中に喝破せるところ、いかに理財と離れがたきが町人のくされ縁とはいへ、親の藥代拂はむが爲にその身を奴隸にし、主家の貨をとり戻すとてその妻を賣るの類は、まだしものこと、放蕩に身を持ちくづして融通がつかずとて我とわが刃に伏し、遊女うけ出す身の代がなしとて心中を急ぐ、自殺は實にかれ等が壓迫苦痛を脱すべき唯一無二の手段にてありけるなり。

遊廓

戀愛は當時の倫理觀よりしては勿論排斥せられたり。男女が自己の自由意志によりてその愛情を交換するが如きは、以ての外の所業にして、女子はもとよ

り、男子も結婚問題は徹頭徹尾これが解決を父母に仰がざるべからずとせられ、夫婦同棲の後も、よしいかほどの愛情をうちに貯ふとも、表面は儼として主従の如き關係あり。お夏の如き、おさんの如き、お七の如き、西鶴近松の名筆に上りたればこそ、世の同情をも贏ち得たれ、實際に見て當時の社會は淫奔破倫の徒と做し、半ば憐笑を禁ぜざると共に、半ばその無節操を彈指するに憚らざりしなり。たゞ一別天地あり、こゝにはさしも峻烈なる社會の制裁もなく、窮屈なる道徳の桎梏もなし、はにかまず、氣どらず、とりつくるはず、天真の性情を露出せる婦人はこゝに來りて始めて見るべし、これを當時の遊廓とす。蓋し元祿の人士が遊廓に對する、その觀念において大に余輩と趣を異にするものありて存す。當時の遊廓は幕府の消極政略の壓迫に堪へざる鬱氣の噴火口に外ならず、これや上下おしなべて邊幅を去りて自由平等に遊興すべき唯一の交際場裡にして、遊ぶものも遊ばすものも、一面には金錢の勢力の下に動けど、また世間一般の徳義を離れて、憎むも愛するも感情趣味の和合衝突により、意氣あり、はりあり、情もあり、かくて京の島原、大坂の新町、江戸の吉原はいつも不夜

この時代の概観

城の繁昌を極め、西鶴を初として作家のこれに向つて筆を着くるもの甚だ多かりしかば、元祿文學の花は大半この裡より咲き出てぬといふも不可なることなし。

要するに元祿時代は江戸四期のうち最も積極的なる時代にして、思想極めて自由にかつ創意的なり。この特色は學問文藝の各方面に現はれ、仁齋、徂來の漢學におけるあり、契沖、東原の古典の學と國學とにおけるあり、或は俳諧の芭蕉を呼び、或は戯曲小説の西鶴を起し、近松を作る、今と昔と、自然と人生と、向ふところは各、異なりしかども、發するところは一個の源泉なり。渠等は故らに步調を整へ、氣脈を通じたるが如くに、勇往邁進、以て中世以降、時勢を渡にし、人心を麻痺せしめ來れる歴史的制裁の罫を破らむと試みたりしなり。而して或はその理想を古代に求め、或はその趣味を現代に見出でて、十人十色、時に相扞格するものさへなきにあらざりしかど、畢竟これ個人性の相違に加ふるに、經驗の不同より來れる結果にして、この紅紫參差として、枝を交はせるところ、やがてまたわが元祿文學に一入の光彩を添ふる所以ならずや。

余輩は今や江戸文學最盛の時期を敍述し了りぬ。一顧名残を惜みて、更に歩を轉ずれば、自由を叫び個人を重んじたるも煙火流星一時の現象、世は人は再び太平の波に浮沈して、壓制、没自我、習俗の中に漂はむとはするなり。

第四章 文運東遷

八代將軍

徳川氏中興の名主を八代將軍吉宗とす。家康の曾孫にして、折しも幕府の政弊漸く現はれ、三代の功業日に落ちむとする時、紀伊より入りて將軍職を繼ぐ。大に紀綱を振肅し、武事を奨励すると共に、風俗の頹廢を矯正し、人才の登用はいふも更なり、刑律を明にし、貧窮を賑はす。しかのみならず、外國科學の勝れたるを見て、これを範として天文、算理、本草等の學に一大刷新を行ひ、最も意を殖産工業の發達に留めしかば、諸國の物産一時に起り、餘澤の引いて今日に及べるもの、決して少しとせざるなり。

文藝の繁榮

されど繼つて思へ、吉宗が勤儉質素を唱道し、全力を竭して制慾主義を鼓吹し

たる結果はいよ／＼國民の自由を奪ひて、個性の没却をきたすことなかりしか。消極政略は徳川幕府と終始起倒す。家康まづこの方針を樹ててより、前後十五代、政治に與るものは、この遺範に倅るを得ず。吉宗いまはたこの主義を固守して天下に臨む、その人物の大なるに伴ひて、四民の壓迫を感ずることもまた甚しかりしや明かなり。一例を文學に因縁深き出版法に取れ。そも／＼出版に對する政府の干涉は、幕府創立以來のことにして、敢てこの時に始まれるにあらず。すでに元祿中にも、風俗を攪亂し、虚説妖言を構ふる書冊の發行を禁ずるの法度を見しが、これにも拘はらず、放縱淫逸なる當時の社會精神は益々發達したれども、こは風紀取締の上に已むを得ざる事情も存して、強ちに咎めがたき節もあり、されど享保に至りて幕府の箝制は、俄然重きを加へたり。即ち従來行はれたる小説院本類はこの時更めてその版木の檢閲を受くべきこととなりしのみならず、新に上梓すべきものは、その種類の何たるを問はず、すべて著作者及び發行者の署名を要することとなりぬ。こは作家及び書肆をして自己の責任を知らしむるもの、固よりこれを咎むべきにあらず、むしろ讚賞に値すと

いへども、その上に將軍家については、現在の直統はいふに及ばず、その過去の歴史またはその家系の枝葉に關する瑣細の記事をさへ一切載することを禁ずるに至れり、かくの如くんば種々の窘束すべて操觚者をして反省せしむるが爲よりも、社會の向上を欲するが爲よりも、むしろ徳川氏の安寧を計るが爲なり、かくして花紅葉咲き連ねたる元祿の世を過ぎて、早くも人心萎靡、文藝の發展はこゝに一頓挫をなしたるなり。

この時代の
二大現象

文運東遷の過渡期は前後五十年なり、その間上方は形勢日に蹙まり、江戸は漸く好望なりといへども、いまだ偉觀を成すに至らず、一般の勢運は要するに不振なりといふに憚らず、さらばこの五十年は全く文學史上に特筆すべきものなかりしかといふに、さすがに然らず、少くとも閑却すべからざる二個の重要現象ありて存す。元祿の盛運に乗じて諸般の學藝勃興したりしが中に、時において最も後れ、或はこの時代に屬すともいふべきものに、荷田東廬の國學ありき。その特色はすでに前代に敍べたればまた贅するの要なし。今は賀茂眞淵がその後繼者として出て、學派の基礎を堅うすると共に、これを傳播して一世を

前後連鎖の
時代

風靡せし徑路を説かざるべからず、これ一なり。元祿まで漢學は専ら修身齊家治國平天下の學問として、實踐躬行の倫理學、もしくは高遠深邃なる哲學の如く思惟せられたりしに、風潮一變、單にこれを純文學の方面より見て、詩文として翫賞するもの多きに至れること、これ二なり。この二大動力が後の文藝に及ぼせる影響は極めて甚大なるものあり、幕末以後は漢學は洋學によりてその地盤を覆されたれども、彼も此も同じく外國の學にして、國學と相對して、内と外と時に提携し時に反抗して、今日に至りて勢力なほ瓦解せず、國粹保存といひ、外國崇拜といひ、また維新前後における尊王といひ、攘夷といふが如きも、畢竟これらに對する好惡贊否の聲に外ならずといふべし、而して縦にこの風潮の變化あり、横にこれを貫いて、文藝の中心は京を出でて江戸に遷る、一時の趨向はすなはちこれなり。

國學の發展は、いふまでもなく、前時代における活潑なる社會精神が存續繼承して、こゝに一段の進化を示せるものなり。すなはち元祿の遺業はこの時代に至りて始めて光彩ある完結を告げたるものなるが、また一方よりいへば、次の

江戸盛運期における宣長、篤胤等が事業の先鋒となれるものにして、勤王討幕の思想はすでにこの時に萌えたるなり、否、すでに元祿に兆したるなり。漢文學の流行もまた次期に至りて更に大に興るべき新文學の素地を作れるものにして、いづれも前後の關係を味ひて興は一層深かるべく、この時代のみにしては、さしたる發達も認めがたきなり。長あるもの短また伴ふ、國學はよく中世以降の束縛を脱して、上古の簡素自山の時代に復歸せんとしたるが、あまりにこれを憧憬せる結果はまた却つて古文學に對する拘泥となりぬ。漢文學もまた彼の簡潔の辭句、適勁の格調を輸入せる功勞は否みがたけれど、その内容をも模倣して及ばざらむことを恐れたるが如きは、餘弊の甚しきものなり。以下漸を追ひてこれらの消息を明かにすべきが、獨立せる一時代としては、所詮この時代はさして壯大の觀あることなし。文學者その人も他の時代に比して寥々たるを免れず、たゞ國學の眞淵、俳諧の蕪村の如きは、匹儔稀なる大家として特筆大書するに憚らず。

賀茂眞淵

縣居の翁賀茂眞淵の生地は、平安朝以來文學の中心地たりし京都にもあらず、

眞淵の學說

新文學の勃興地たる江戸にもあらずして、その中間なる遠江なり。はじめ渡邊蒙闇につきて徂來學をも修めたるが、のち東應の名を聞き、京に出て、その門に入りて、専心攻學、終に國學の奥旨に達す。師歿してのち、郷里に歸りしが、決然として以爲らく、今の時學を弘め名を傳へむとせば、江戸に出づるに如くはなしとす。なほち行李を調べて東下し、帷を下して諸生に教授す。當時、江戸の地に學者も少からざりしが、眞淵の唱ふるところ奇抜にして生意あり、講筵常に學生を以て充ちたりとぞ聞えし。馬の嘶くにさへ驚ける幕府の當事者はかくと聞き、如何ぞ不問に附するを得む。與力加藤枝直をして往いて學問の正邪を探らしむ。枝直もさるもの、是非の鑑別は明かなり、一たび眞淵の聲咳に接しては、推服措かず、宅を己の近隣に構へてこれを迎へ、自ら師友を以て待ち、またその子千蔭をして子弟の禮を取らしめしかば、眞淵の名はいよ／＼高く、ついで東應の子在滿の推薦によりて田安宗武に仕へ、生涯江戸に寓して、著述に講說に専らその道を傳ふるに盡瘁したり。

そも／＼眞淵が研學に當りて憤慨禁ずる能はざりしは、和歌が古今集以來漸

く優弱に流れて、消閑の末技、戀愛の媒介となれると、漢學が國民精神に浸潤して太古淳樸の風を失はしめたとにあり、渠はこの和歌の墮落と漢學の跋扈とは個々關係なきものにはあらず、漢學傳播以來漸く和歌は剛健の氣を脱して女性的となりしなりと推定し、従うて支那の學問に對して絶對的反抗を試みかくの如きは天地自然の大道にあらず、かの國の如き虚偽詐瞞に充てる國俗を矯めむが爲に設けたる人爲不自然の道のみ、これをしも忘れて直ちに取りてわが國に應用したりしは、思はざるの甚しきものにして、無用の拘束はこれより人心に加はり、天眞の流露を妨げて、さらずばいかに美はしかるべき歴史の上に虚飾惰弱の痕を遺さしめしなれ、今よりわが國の前途に慮り、社會人心の改善を圖るものは、厭ふべき平安朝以來の文化を捨てて、須らく本然の要求のまゝに行動せる無垢なる祖先の古に歸らざるべからずと絶叫せり。この點において眞淵の説は、やゝ大道廢れて仁義ありといふ老莊の説に似たり。さらばいかにして漢學の影響なきわが國本來の眞相を知るを得べきかといふに、眞淵答へて曰く、上古の和歌を究むるに如くはなし、その他典籍いづれもか

歌人として
の眞淵

らごゝろを免れず、和歌のみ人性の眞を詠じて偽らず、飾らず、和歌といへど固より比較的後世の作は與らず、萬葉の四千四百餘首、記紀のうちなる二百餘首ぞ人の國より傳はらて神世を受けし人心の精髓とも稱すべきものにはある、これを學ばば古意おのづから明かに古意を範として進まばすなはち無爲の自然に復するを得むとかくて自然の順序として眞淵は古言の研究に心を潛め、萬葉考、祝詞考、冠辭考などいへる有益の著書あり、されど方便はやゝもすれば目的となる、眞淵が究竟の標的は古道の復興にありしかど、畢竟古文學の研究となり、了せるの觀あり、恰も徂來が復古説を唱へて古文辭の考察に流れたると同一徹にして、眞淵がそのはじめ修得せる漢學の影響はこゝに至りて更に現はれたりともいふべきか。

眞淵が萬葉集の研究は契沖に比して更に一步を進めたるものにして、その説の世道人心に影響ありしは遙かに徂來の上にある。されど眞淵の特長は道學者たり、宗教家たるよりも、文學者たるにありて、天稟詩人の素質を備へたり。渠は古道を闡明せんと力めしかども、深く哲學的思索を廻らせるにあらず、わが

國固有の道を復活せしめむとしたりしかども、これが宗教的宣傳を計畫せるにあらず、寧ろ自己の好尚によりて一種尙古の文藝教を樹立せむとしたるものにして、その創作の才に至りては蓋し驚嘆すべきものあり。萬葉の研究に従事せる渠は、かくしていつしかその言語と格調とに感染し、これを以て直ちにその作歌の上に應用し、また長歌の復興をも志して、苦心經營、作るところ朗々として誦するに堪へたるもの多し。たゞあまりに古語古調を弄したるが爲に、當時の讀者には、甚だ耳遠き感ありしのみならず、廢語を用ひ、またその意義を誤解したるつかひざまさへ少からざりしかど、とにかくに虚飾の粉黛を退けて自然の古意を見んとし、萬葉の形式を借りて、ある程度までこの理想を實現し得たるは、さすがに文壇一代の雄たるに耻ぢず。これより萬葉崇拜の風一時歌壇に吹きすさみしかど、精神を汲むを忘れて、外形を摸するを事とするもの徒らに多かりしは、惜みても餘あり。當時これと全く反對の方向に出でたるものに京の小澤蘆庵あり、旨と平易の雅言を用ひて率直なる感興を遣り、やゝ歌壇に重きをなせりといへども、その勢力に至りては眞淵に及ぶべくもあら

欠

MISSING

點を捕へて、これを表はすべき字句は酥の如く熟烹し、刃の如く鍛鍊せるものなるを要す。もしこれを忘れて或は習慣に従ひ、或は枝葉に馳せむか、直ちに印象薄弱となりて、所期の思想を傳ふること能はざるべし。翫味者の方よりいふも、もしその人にして、十七字に約して突如として投げ出されたる事物に對して、嘗て經驗なく、はた趣味をも有せざらむか、一句の意味は頑として通ずるに由なかるべし。されば、俳句や、一見詠じ易く味ひ易きが如くにして、しかも詠じ難く味ひ難きことこれより甚しきはなし。貞徳以來、その流行天下に普く、芭蕉以後は、吳服屋の手代、髮結床の下剝までが、や、かなの運用に頸うち傾くる世となりたれど、弊害百出、半ばは博奕の如きものとなり果てたるも、畢竟その真意の得がたきが爲なるのみ。芭蕉さへ複雑の思想はこれを避け、人事、時間の描寫はこれを難しとし、活動的狀態もその能くするところにあらざりき、みなこれこの詩形の不便の超越しがたきものあるを示すものなるべし。固より俳諧には種々の法則あり、その季を定めたるが如きはわけても著しき例にして、藤は春、牡丹は夏、鯉、奈良漬の類さへ、二月、六月のものとかやうに一定して動かしめず。

詩文の隆盛

その煩瑣なる一見堪へがたきが如き感あるも、實は、この約束なくしては、片言隻句の中に時處の的確なる心もち、現はしがたきなり、その他雑多の法則も初はみな小詩形に免るべからざるべき、缺陷を補はむが爲の方便として出来たるものなるべし。かゝる窮屈なる詩形をしも操縦して、許多の困難を排し、斯道の上に一新生面を拓ける、蕪村が功はまた偉大ならずや、而して渠が句の芭蕉に比して時に浮華誇大の弊に陥るものなきにあらざるは、取材の相違に基、くといはむよりも、むしろ人格の問題として見るべきものなるべし。蕪村歿して芭蕉以後の無明の長夜は再び來りぬ、長夜は明治の世まで續きぬ。

小説は、八文字屋本依然として惰勢を持続すれども、毫も活氣を存せず、その間に教訓の意を寓せたるもの、または怪談、奇聞、實録類も多く出でたりしが、みな見るに足るものなし、この時に當りて著しく特色を有して、後の讀本の魁となるものを英草紙とす。英草紙を説かんとせば、まづ漢文學の流行を思はざるべからず、漢文學の影響を受けてこの草紙も出でたるなり。さても文壇の情勢を察するに、今や詩文は都鄙に盛行し、詩社を設けて騷客を集むるもの多し、京

英草紙

には龍草廬の幽蘭社、江村北海の賜杖堂、服蘇門の長嘯社あり、江戸には服南郭が芙蓉社、安清河が市隱社ありて遙にこれに相對峙し、大坂には片山北海の混沌社あり、高鳴谷は瓊浦芙蓉詩社を結びて、長崎、京の間を來往す。かくては稗史小説もひとり侮蔑せられていつまでか續かひ、長崎の譯官たりし岡島冠山は京攝に遊び、また東都に住して、通俗水滸傳、小説讀法等の著あり、更に岡白駒は支那の小説俗語に通じ、これに關する著述少からず、從來とてもこれを繙くものもとよりなきにはあらざりしが、これらの書出でてより、世人の稗史小説に對する態度は漸く一變し、讀者は日に増し、俗譯の出づるもの頻々として相次ぐ。

英草紙は實にかゝる時に生れしなり、その著者を都賀庭鐘といふ、大坂の儒醫、博物骨董に精しき兼葭堂と友とし、善く船載の小説類のその一讀を経ざるは稀なり、この述作ありしは寛延二年にして、その續篇に繁夜話、莠句冊あり、いづれも短篇小説を輯めたるもの、元祿清新の氣なしといへども、漢文脈を交へて適勁なる辭藻は殊に世人の注意を引けり、唯その文餘に漢臭を帯び、わが國の

習俗を寫すにさへ、或は手を舉げて會釋すといひ、或は人を饜應するに、粥を煮せしめなどいへる無意義の蹈襲隨所に散見するは、當時の人には珍らしと喜ばれたらむが、實厭ふべき限なること勿論なり。その内容は剪燈新話、聊齋志異等に倣へるものにして、珍異幻怪の談柄全篇に滿つ。蓋し八文字屋本全盛の世に小説改新の機を促せるものにして、この事業をついて上田秋成の雨月物語は出てたり。

上田秋成

上田秋成は大坂の人、後年京に寓して、その地に果つ。年三十五にして始めて八文字屋本風の小説に筆を染め、天成の才筆、すでにその處女作に現はれたりしが、みづからこれに慊焉らず、更に方面を轉じて雨月物語を作れるなり。雨月は英草紙を見てこれより着想せるもの、體裁また短篇數種を集めたるものにして、各篇いづれも異事怪談ならぬはなく、内容形式ともに兩書を比較して明かに相承の跡を見る。されど、前者は小説的事實を假りて作者が道德觀を示せるものなるが如く、その道德的批判は當時世上の偏僻論者が云爲せるところに比して頗る寛大に、或は從來の歴史より見て當然悪人とせらるゝ人の上にも

同情を注ぐを惜まず、或は悪人と思ふも自己の偏見より生ぜる錯誤の判斷にして、實際においては然らざるものありなど、怪異を語りつゝも實は議論の筆を進めたるものならむか、而してその世間に對するも樂觀的見地を以てしたるが、後者はこれと表裏全く相反す、秋成生れて剛愎狷介、世に容れられざるよりも、おのれまづ世を容れず、常に白眼にして人を見たる性情は、いさほひ作物の上に現はれざるを得ず、熱嘲痛罵眞に骨を刺すものあり、また英草紙をはじめとして怪を語るといふも、何れも現世的色彩を帯びたるが江戸時代の小説に通有なる特質なるに、秋成がこの作のみひとり神秘的にして、幽韻縹渺、遙かに世を隔てたる感あり、行文また縦横馳突、意に従つて動かすといふことなく、絢爛にして華麗、古今よく匹を争ふに足るもの少し、秋成中頃より醫を專業として、一たび小説に念を斷ちしが、晩年に及びて、更にまた癩癩談、春雨物語等の著あり、こたびは脂粉の氣失せて蒼枯の色これに代り、今はた故らに想を練り、思を凝すことをなさず、一氣呵して筆を下すといへども、辛辣なる諷刺はいよいよ出てていよく、度を加へたるが如し、虚偽罪惡の結塊の中にわれひとり

清むが如く、みづから高く標置して、怒號これ快しとせるは、畢竟秋成が存在の生命なりしなり。

建部綾足

秋成と同時に江戸にありて、また讀本の發生に與りて力ありしを建部綾足とす。綾足は南部の人、亡命して洛東東福寺の僧となりしが、のち蓄髮して東都に住む。長崎に熊斐に學びて畫名あり、俳諧をもよくし、また片歌カクワの一派を立てむとせしが、廣く行はれざりき。明和五年、秋成が雨月物語を出すと殆ど同時に西山物語を作る。文辭つとめて古雅を欲し、一篇の材料は京都滯在中の見聞にかかると稱せらる。次いで本朝水滸傳は成れり、こは惠美押勝を宋江に、道鏡を高俣に、琵琶湖畔の伊吹山を梁山泊の水寨に擬したるものにて、文章平凡に、結構また強ひて巧を弄すれども、人の感興を動かすに足るものなししかもその世人の注意を引くこと大なりしは、一に水滸傳翻案の先鞭を着けたるが爲にして、秋成と共に等しく讀本の魁をなすといふも、固よりその間に幾何の逕庭あるは忘るべからざることなり。秋成が鬼才に匹敵して下らず、江戸の讀本興隆にも多大の關係を有するものとしては、むしろ平賀鳩溪を推さむか。

平賀鳩溪

鳩溪は讃岐の人、のち出て江戸に寓す。天與の才幹極めて多角的にして、苟くも手を着くればすなはち長ず。その専門とするところは本草、窮理の學にありて、これに關する發明創意決して少からざりしが、輾轉不遇にして一生世に用ひられず、滿々たる不平絶ゆる時なくして、淨瑠璃小説の戯作に僅かに鬱悶を遣りしもの如し。その小説は、根無草の如き、風流志道軒傳の如き、いづれも當時の市井に見聞せし瑣末の俗事を題材とし、滑稽を旨としたるものなるが、その滑稽も尋常一様の滑稽にあらずして、動もすれば憤懣煩悶の情の虚隙を衝いて火燄の如く揚るを見る。この點について見るも、正に關西の秋成と好一對にして、渠の如き精悍有爲の質を以てして、開帳のにぎはひ、見世物のをかしさ、さては女大力の様子などの、陋劣なる小範圍に踞踏せざるを得ざりし衷情、洵に憐むべしとなす。蓋し、鳩溪の如きは、徳川氏の消極的また階級的制度が、餘にその壓迫の手を固くしたるが爲に、可惜多能の士をして彷徨就くところを知らず、花咲くこともなくて朽木と化し果てしめたる、好個の實例なるべし。以上四人は直接に文化、文政の讀本の爲に地盤を作れるものなり、中に就きて、

小説と古典

の學

鳩溪はやゝ他と異にして、むしろ、青本、洒落本の發生に影響すること大なりしといへども、これを讀本の魁として擧ぐるも、また不當の見解にはあらざるべし。かゝる類の作者が續々輩出して、新文學の發生を誘致したりしは、主として支那小説の感化に基けること、すでに述べたるところによりてほゞ明かなるべきが、これと共にわが國學もまた渠等を助けたり、然り、外國文學の影響のいかに大なりしにせよ、國文學の素養なかりせば、その作物はいかに貧弱にして不具ならむ、幸にして渠等はまた古典の學に注意したり、これと表裏して古學者にもまた時に小説の作あり、荷田在滿、賀茂眞淵等が擬固の體を以て短篇の作を試みたるも、娛樂の傍、古代の語法語格を普及せしめんと、の主旨に出でたるなるべし。上田秋成は加藤宇萬伎の門人にして、晩年は主として古典の研究に力め、殊に宇萬伎の師たる眞淵に私淑して、その著者の出版に關しては甚大の功あり、小説の如きは實は渠にありて閑餘の副事業に過ぎざりしもの如し、しかもその小説に對するに、漢文學の影響を認むると同時に、國文學の造詣の深かりしこと、また一見して知るべし。また縣門の名簿を緋かば、宣長が入門

文學の東遷

を記したる寶曆十四年の前年の條には、建部涼信、平賀源内の署名をも併せて發見せむ、而して更に凌俗の翻案せる水滸傳が純粹古雅の和文に成り、また西山物語がみづから古語に註釋を施して古文の習得に資せむとしたるが如き、彼此勘合して思半に過ぐるものあらむ、余が漢文學と相俟ちて、古文學の小説に及ぼせる影響甚だ少からずといへるは、これ等のことをいへるなり。翻つて思ふに、文學の中心はこの頃やうく、動きを止め、諸般の文化と共に、擧つて京坂を去つて東の方江戸に遷らむとす、眞淵が京に學び、江戸に下りて帷を垂れしが如きは最もその著しき例にして、俳諧に蕪村はあり、小説に秋成はあれど、大勢はすでに定まれり。浄瑠璃とてもはた同じ、享保に門左衛門歿し、寶曆に出雲歿してより、近松半二が雙肩は俄に重く、一時好評をも博せしかど、大家の倒れむとする時、一木いつまでか支ふべき、劫風一陣、さしもに盛なりし大坂の浄瑠璃もこゝに崩れおちて、江戸は却つて凱歌を擧げぬ、凱歌の發聲は實に福内鬼外が神靈矢口渡なりき、福内鬼外は鳩溪が別號、渠になほ數篇の作あり、その他にもこれにつぐべき作家一二にして足らざりしが、浄瑠璃の運命は處

をかへても、すでにこの時に傾きて、今に至りてまた振はず、小説に至りては、これと趣を異にして、江戸に移りて新しき發展は着々として成り、元祿前後における上方の盛況をも凌がむとす。特に印刷の進歩の著しきものあり、その粹は所謂江戸錦繪の精巧美麗、今も眼を射るばかりなるに見るべく、これが小説の進歩に便宜を與へたるはまたいふを俟たざるなり。

草雙紙

さらばまづ江戸に行はれ來りし小説の種類はいかなるものなりしぞ、余輩はこれを草雙紙の名に一括す。草雙紙の起原は遙かに溯りて元祿以前にありと覺し、その初は丹色の表紙を用ひたれば赤本といひ、その題は御伽草子中の鉢かづき、文正、桃太郎、花咲爺、かちく山、猿蟹合戦、鼠の嫁入、また金平淨瑠璃に取れる金平が恠勇譚、さらば辨慶、朝比奈、四天王、新田、楠等が武功の物語、やゝ移りては、色道の勝負、敵討の成敗などにして、五枚を綴りて一冊となし、一枚毎に繪を挿めりしかるに、安永四年、戀川春町が金々先生榮華夢の出でたるより、風體一變、専ら當時の人情世態を描き、童幼よりも大人の見るものとなりぬ、かくしてさきの赤本、黒本は進みて青本、黄表紙となりぬ。この青本、黄表紙といはむ

洒落本

もまた妨げずの寫すところ多くは遊廓の事情、開帳、見世物の流行などにして、滑稽洒落を旨とし、さりとして諷刺、教訓などいはむが如き目的もなく、ひたすらそののれの通と才とを銜はむの浮華輕薄の念よりす、もし讀者にして手を拍ちて珍作よ通人よと笑はば、すなはちかれ等の希望は満たされたるなり。青本と併びて、別に洒落本なる一束の小説あり、露骨に吉原、深川あたりの遊里の様を寫したるものにて、野卑、猥雜、厭ふべく、余輩はこれを以て堂々たる文學の中に伍せしむるを耻づるものなるが、しかもなほ輕々に排斥しがたきは、極端なる寫實的描寫のこゝに用ひられし一事あるを以てなり。元祿の西鶴が寫實を主たりしことは、すでにこれを説きぬ、げに西鶴は舊來の習慣に従うて自己の見聞にも觸れぬ事物を描かむとはせず、一意社會の實相を捕へむと試みたりしなり。されど、今にして思へば、そのいはゆる寫實は比較的、印象の著しきものをのみ抽き出でて、微細に當面の事相を寫さず、對話はもとより一種の文章體にして、口語をその儘に筆にしたるものには、あらざりき。洒落本の寫實は、すなはち然らず、遊里を描いては、遊女、嫖客が容姿、衣裳の説明はいふも更なり。

狂歌と川柳

或は客の種類により、もしくは見世々々の慣習によりて異なる言語のつかひざまなど、細かに観察の眼を著け、一擧手一言句も洩らさざらむとする風あるを見る。一言にしていへば、洒落本の寫實はこれまでになく忠實なり、真に寫實らしき寫實はこれに始まるといふも不可なることなく、按ふに明治における寫實派の筆もまた或はこの邊に學び得たるならむ。

吉宗が政治に勵精せる結果は、その死後に至りて益あらはれ、幕府の基礎更に固きを加ふると共に、江戸の繁華はいよ／＼目ざましくなりぬ。九代、十代の將軍は坐ながら太平謳歌の歡聲を聞けるものなりき。吉原、深川の不夜城はいはゆる十八大通が驕奢の競争場、千蔭、春海の輩さへもこゝに出入して、遊興に浮身を糞す時世なれば、一般の文藝が靜平和樂の氣に満ちたるも當然のことのみ。あはれ、市民は胸中一片の不平なく、鼓腹擊壤、花の大江戸に生れ合せて、朝夕なに眺むるは前と後の富士、筑波、水道の水をわかせる、錢湯に鼻唄うたうて、うか／＼と過し暮ししなり。この歡樂場裡の消息はさながら青本に現はれ、また洒落本に寫されしが、ほかにまた適切にこれを髣髴したりしは、天明調の狂

この時代の
大勢

歌なり、狂歌にはこれよりさき、享保の頃大阪に油煙齋貞柳あり、名聲をさ／＼高かりしかど、その作多くは平凡にして、しかも理窟に陥るの弊を免れざりしに、今しも江戸に四方赤良、大田蜀山等の出づるありて、洒落とうがちとを主としてこれを詠じ、高尚なる滑稽はなほ求むるに難かりけれど、口を衝いて出づる諧謔は人をして頤を解かしめずんば止まず。柄井川柳またこの時に出て、巧に人生の弱點を捕へ、これを露骨卑近の警句に仕立てて、皮肉なる諷刺を試みる、また江戸太平の氣運に乗じたるものに外ならざるなり。

第五章 江戸の盛運

徳川氏九代、十代の政治はやゝ紊れたり、十一代家齊の世はまた更に振ふ、老中たりしものは松平越中守定信にして、八代の施設に倣ひ、遠く氏祖の遺訓に則れる渠が爲政の方針は、依然として消極的なりしかど、在職六年の短日月の間に、よく綱紀を張り、經濟を整へ、武事を勵まし、奢侈を戒め、風俗を匡せること、十

五代を通じて多くその比を見ずげにや家齊天下に臨むこと五十年、これを大御所様時代といふその一語の響のすてに何を悠揚たるや。されどその晩年よりして内外の風雲漸く穩かならず、水野越前守擧げられて樞機を握り、英斷以て天保の改革を行ひしかど、察々の明を勵まして瑣末の事にも干渉し、敢て假借することなかりしかば、忽ち四民の反抗を招き、功半ばならずして退きぬ。この頃より外國との交渉また漸く頻繁になりて、嘉永に至りては米艦江戸の近海に來り浮び、人心恟々、やがて尊王攘夷論の沸騰となり、上下ともにこの内憂外患の大渦に捲かれて、混沌の裡に王政維新を迎ふ。さればこの時代の下半期は學問文藝などの榮ゆべき時にあらざりしかど、その上半期すなはち文化文政時代の盛況は元祿にも劣らず、人或はこれを以て徳川氏三百年中の黄金時代となすも、また理なきにあらず。

定信は好學の士なりき、渠が信州岩村の城主松平氏より引いて林氏を繼がしめし、衡こそは、同家の中興大學頭述齋その人なり、林家の昌平坂學問所を幕府の有とし、柴野栗山、尾藤二洲、古賀精里等をして、述齋を扶けて幕士及び諸藩の

寛政政治の
長短

子弟を教授せしめ、多紀氏の講義館を擴張して醫學館となししも、渠なり、堀保已一の爲に和學講談所を設けて、群書類從の編纂に従事せしめしも、渠なり、諸國の寶物を調査し、谷文晁をして畫筆を採つて集古十種をなさしめしも、また渠なり、定信はかくて學藝の保護者たりしのみならず、優にみづから文學者たるに耻ぢざる材幹あり、致仕の後、樂翁と號し、殊に和文隨筆に長じて、花月草紙等の著ありき。以上は定信が美點なり、好所なり、されど身すてに消極的壓抑主義を以て治世の綱領とする徳川氏の執政者たる上は、ひたすら穩健なる古説を庇護獎勵して、新奇の異説を撲滅迫害せむとしたりしは、已むを得ざることなるべし。漢學には、朱子學の外に陽明學もあり、堀川の古學もあり、越國の古文辭學については、更に折衷學派も出て來て、互にその勢力を争ふ。定信はかれらが黨同伐異、正邪の辯論に露々たるを嫌ひ、これを一に歸せしめむとして、終に朱子學を奉ずるものにあらざるよりは、幕府に仕ふるを得ざらしむ、所謂異學の禁なり。この禁制は諸藩の學者をして、水の低きに就くが如く、朱子學に向はしめ、一見すれば學界の弊風を一掃したりしかの觀あれども、むしろ辯難攻

撃以て向上進歩すべき學問はこゝに一頓挫を來せり、すなはち當代の學徒はその第一義とすべき事理を忘れて、字義の末に拘泥する訓詁の學に陥るにあらずんば、酒食遊興の媒として詩文に淫するもの、滔々として風をなす。蓋し訓詁考證の學は清朝の學風の影響し來れるものにして、こゝに定信によりて間接の補助を得、その勢うたゞ盛なるに至りしなり。要するに異學の禁に逢ひて學問は萎縮し、才あるものは韜晦していよゝゝ野に隠れ、名利を逐うて幕府に阿附するものはひとりますゝ世に時めく。

出版の制裁

されど人心箝束の著しき事例は著述出版に對する制裁に如くはなし。天明寛政の交なりき、田沼意知が殿中に刃傷せられしこと、松平定信の政治に關することなどを小説に託して書けるものありしかば、幕府はその罪を問ふ、取締の法これより嚴になりて、寛政三年には山東京傳洒落本を作りて罰せられ、翌四年には林子平内外の形勢を論述して、その藩仙臺に蟄居を命ぜられ、後また數年喜多川歌麿はその描くところの錦繪が風俗を紊亂するの恐ありとて刑に遇ひ、累は飛んで岡田玉山の繪本太閤記も絶版を命ぜらる。天保の改革には、幕

知識の向上

士大野權之丞は青標紙殿居巻を編して政務に關することを公にしたりといふを以て、爲永春水は人情本を著はして風俗を壞亂せりといふを以て、まづ槍玉に揚げられ、寺門靜軒は江戸繁昌記によりて奇禍を買ひ、柳亭種彦また田舎源氏によりて咎を被らむとして僅かに免かる。幕府がかく出版著作の自由を束縛したるは、蓋しその意、人心の惑亂を防ぎ、風教の頹廢を制せむとするにあれば、その動機においては同情するに足るといへども、行爲は苛酷なり、嚴しき壓迫は作者及び發行者の上に下れり。されば寛政に名流京傳が罰せられし後、出づると出づる小説は、いづれも幕府の消極方針に和同するを以て唯一の標準とすれば、その最急の要件は教訓の二字に歸せざるを得ず、こゝに勸善懲惡主義は確立し、一般の傾向において小説はやゝその地位を高うし、従うて文學の上の階級も減殺したると共に、變化縦横の妙は全く滅却せられたり。小説が地位を高くし、文學における階級も減殺したりしを以て、ひたすらに文藝を一途に出でしめむとせる幕府の法令に基けりとするは、皮相の見たるを免れず、その最大の原因は思ふに知識の普及に存せむ。この時代の上半期は江

江戸時代のうち最も平和なる時代にして、偃武の後、學問の開けてより早く二百年を経たり、圖書の弘布したることまた元祿時代の比にあらざれば、國民が智育に於て長足の進歩をなせるは、更めて説明するにも及ばぬ事なり。されば小説もこの趨勢に伴ひてやう／＼野卑の境を脱して高尚の域に進まむとし、小説家みづからも所謂戯作のみを以ては甘んずること能はずなりて、さばれいまだ文學の眞價値を識得せざる際なれば、別に隨筆の著述に歴史的雜考を公にして、文壇に學者の名を馳せむことを求む、京傳の骨董集、馬琴の玄同放言等はかくして出てたるなり。橘守部、黒川春村の如きは、狂歌師たりしもの、後には専ら國學者として立てり、北川眞顔は、赤良の門人なりしが、後にはその狂歌を俳諧歌と稱して、教訓的意義を含ましめ、力めて風尚を向上せしめむとせり。その意中は憐むべしといへども、その作はかへつて平板に流れ、遂に渠はその道における貞徳ともならず、まして芭蕉も出てずして、こゝに早くも狂歌は挫折す。俳句はた、天明以後、俗了し、頹廢するのみ。而して高尚なる和歌が更に流行して、社會の大勢力となりしは、また以て國民が知識の増進を推するに足るべし。

和歌の勃興

江戸にありて和歌に名ありしは、加藤千蔭と村田春海とにして、ともに眞淵に従ひて學べり。いづれも文學の方面に得るところありて、古典の研究は深からず、またこれに通達せむともせずして、むしろ風月を飄詠するを以てその務とす。和歌は眞淵に學ぶといへども、師が晩年の萬葉調は、信屈贅牙の弊に陥れりとして、これを避け、むしろ中年の流麗暢達の風に倣ひたりき。この二人を師として學ぶもの甚だ多く、國學もまた和歌も著しく勢を加へしは、或は偏に偉大なる眞淵が斯道鼓吹の感化ともいふを得む。されどこの時に當りて京に香川景樹の起りて、翕然として天下を風靡せるを見ては、いまだこの解釋を以て盡せるものと思惟するを得ず、即ち文學に對する世人の着眼點が漸く高きにむかへるの致せる一現象に外ならざること、今説きたるが如し。

香川景樹

香川景樹は鳥取の人、はやく京に出て、徳大寺家に仕へ、和歌に潛心して、遂に一家をなす。その立つるところは、専ら眞淵に反抗したるもの、眞淵が新學を破りて新學異見を著はし、かれが萬葉集を以てその道の模範と仰げるに對して、

これは古今集に私淑し、従つて、平安朝の古漢文學盛に行はれて歌道日に頽廢せむとする難關に際して、敢てその前に低頭せざりしのみならず、作例を珠玉と連ねて天下後世に示せる貫之を以て特に偉大なりとし、古今集正義を作ると共に、また土佐日記創見の著あり、思ふに、紀氏が才藻の俊逸を世に知らしめむとの意に出でたるや明けし、景樹はさらば全然古今集と貫之とを以て歌道の神髓を發揮したるものとし、ひたすらこれに歸向し、これを蹈襲せむことを求めたるか否、渠は古今の意を汲んで強ちにその跡を追はず、己の至心至誠に訴へて、虚飾なく細工なく、あるがまゝなる感情を直下に傾倒せむことを期したりしなり、されば景樹が歌論の大概を窺ふに、蓋し次の如し。

景樹の歌論

以爲らく、眞淵の古學といふも、畢竟和歌の極意を以て修辭の技巧に盡きたりとせる謬妄の説のみ、平明直截なる今日の慣用語を以て卑俗と賤しみ捨てて、ひとすぢにむづかしげなる古辭廢語に興を遣らむとせる偏僻の主張のみ、和歌豈かくの如きものならむや、和歌に重んずべきは實にその調にあり、調とは何ぞや、たゞ巧に古語雅言を連ぬるが如き淺はかなるものにあらずして、人心

の秘宮より溢れ出づる悲喜の情の口に上り辭となりておのづから音節を具するものすなはち是なり、これは天地に根ざして、古今を貫き、四海にわたりにて、異類を統ぶるものなり、言語は世々に移り、年々に流れ、且、貴賤と隔り、都鄙と違ひて定則なし、ざるを後人詞につきて調をいふは、本末を取りたがへたるものにて、大よそ違はざること少きは宜ならずや、以上歌學提要の說なり、この書は景樹の門人内山眞可の手に成りて、師說を輯録せるも、故こゝに引けり。自然の感興はむしろ考へず、僞らざる日常の文語を借りて具象せしむべく、強ひて胸底にも響かぬ古今萬葉の言辭を摸擬するは、却つて天真の流露を妨ぐべし、歌は感應の聲なり、うたひ上ぐると同時に感ずるものならざるべからず、探り尋ねて漸く主意を知るが如きものは歌にあらず、歌は他の技藝と異なり、おのが心の趣くに任せれば、法もなく、式もなく、况んや古歌によらむとすれば、古き倣立ち、師の風を學ばむとすれば、忽ち似せものとなり、詞をとれば、小盜と誹られ、意を奪へば、なほ罪重く、調を掠むれば、強盜とさげしめらる、また文辭を專にすれば、巧にちちて造花の如きを免れず、徒言にては、人感ぜず、感ぜざれば、歌といふの甲斐なく、更にせむすべなきやうのものな

り、されば才藝の達人も博學の識者も難しとする業なりかし、されども名利の念を去り、たゞ性情の誠を榮として分け入らむには、おのづから進み易きこと、却りて磯城島の道に如くものなかるべし（歌學提要）と、かくして桂園一派は樹立し、當時關西西國の歌壇を風靡したるはいふまでもなく、明治に及びてなほ廣く世に行はる。

宣長の小説論

今や景樹の歌學は成りぬ、眼を轉ずれば本居宣長が古代小説に對する評論も出てぬ、その評にいへらく、源氏物語を以て、儒佛の道を示さむが爲に作られたりとするは、牽強附會もまた甚し、作家はたゞ物のあはれを寫さむとて筆を執れるなり、されば讀者もまた物のあはれを感ぜむが爲に讀めばすなはち足る、これを外にして何の目的かあらむ心得かあらむと、この二人が説くところ頗る相似たるものあり、江戸時代において、まことに空谷の足音にして、これを明治評論家の先導と稱するもまた不可なし、然らば江戸の文學は各種の方面においてこれらの評論を辱しめざる發達をなし得たりしかといふに、遺憾ながらこれを否定せざるを得ず、宣長は文學の決して宗教道徳によりて拘束せ

らるべきものにあらざるを説けり、景樹はまた作家その人の性情を發露すべしと論じたり、文學はこれら二三の先覺者によりてやう／＼純美主義の立脚地に立たむとする傾ありしかど、多くの作家はなほ階級主義、保守主義、道德主義の鳩毒に惱みて、二百年來の迷夢いつ覺めむとも知らず、小説の上になれ、和歌の上になれ、實際においてこれ等の批評に伴へる反響は極めて微弱なりしなり、さて余輩は甚しく景樹の見識を讚したり、さなり、渠が平明の通語を用ひて直ちに人情の奥底に觸れむとせる一段は、批評と創作と相俟つて當時の文壇に第一流を稱すべき價値あり、その門下にもまた長技を有するもの、乏しからざりしかども、この尊敬すべき子弟の作歌も、實は習慣の繫縛に左右せらるること、眞淵の一流と五十歩百歩に過ぎざるものあり、また訴つて思ふに、桂園が主張は小野（小野）蘆庵がすでに抱いてまた試みたるるところなりき、この事は一言注意し置くべき必要あり。

讀本の流行

さてこの時代における小説を代表するものは、讀本なり、元來、讀本の名は、繪本及び草雙紙が挿繪を主とせるに反して、旨と文章を讀ませむとするよりこの